【毎月二回五日、廿日發行、明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可】

明治三十五年十一月廿日發兌

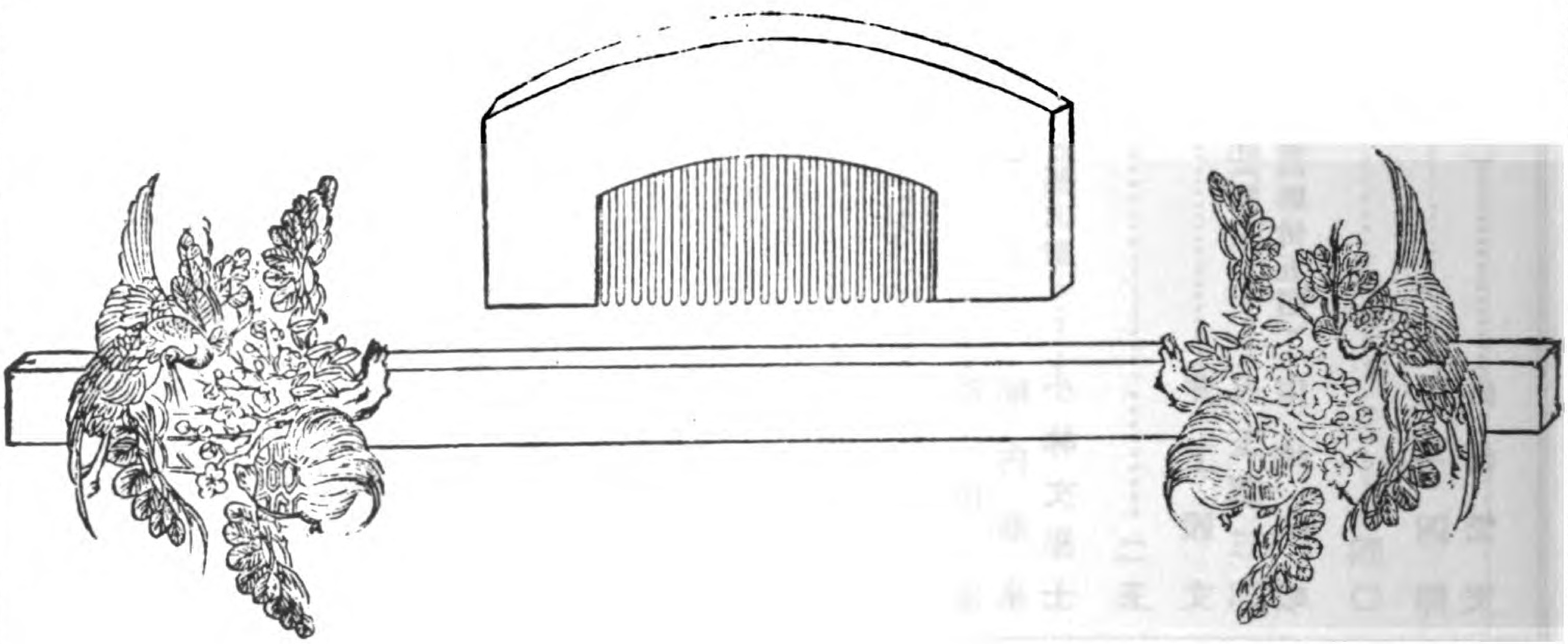
女鑑

第貳百六拾五號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA


東京日本橋駿河町
大阪高麗橋二丁目
三井呉服店
東京電話本局 特五二五、一二一七、一八六〇、二二二二
大阪電話 特四七三、一六五〇、東三四八六
新柄流行の反物品々階上階下にのこらず陳列し尚休息室をも取設け候間ゆる〳〵御遊覧奉願上候
地方よりの御注文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送可仕候尚注文案内書も有之候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



御祝儀用櫛笄

上圖櫛笄の材料は鼈甲を以て随一となせど鼈甲の中にも品質の佳からざる物少からす此品は鼈甲中の最良質を精選して良き工の手に成りたる物なれば透明にして狂を生せず浮を出さず幾久しく御道具となる可き逸品なり

木鼈甲製（金三十圓　五十圓　七十五圓　一百圓
一組之價（百五十圓　二百圓　二百五十圓以上

四方張製（金八圓　十圓　十五圓　十八圓　二十圓
一組之價（金二十五圓　三十圓　三十五圓以上

右の外御婦人裝飾用品一式時々の流行に魁け新意匠の物品各種取揃へ居候間何卒御來車の上現品御高覽の榮を賜り度候市内は電話又は葉書にて御一報次第各種取揃へ貴覽に可供候地方より御注文の節は御用品詳細に御認め代金御送り被下候へば御注文に應じ多數の内より精選仕即日小包郵便にて御送り可申候尤も御都合に依り代金引換へ小包應用致し御便利御取扱可申上候交換日數は市内一週間地方は里程の遠近に不依三週間以内は代金又は他品と御交換可致候

東京市京橋區尾張町

白牡丹本店

店主　松田幸治郎

（特電話新橋五百五拾壹番）

女鑑第貳百六拾五號

目録

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵劵代用は(一錢、三錢)一割增の事
○別に領收證を出さず若し强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證劵郵送料御送附の事
○未納稅の來書は一切受取り申さゞる事

定價

一冊	金拾錢
六冊三ヶ月分	前金五拾七錢
十二冊半年分	前金壹圓拾錢
廿四冊一年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金參拾錢
半頁	金八圓
一頁	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

明治三十五年十一月十九日印刷
明治三十五年十一月二十日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊秦一
東京市京橋區南八丁堀二丁目十二番地
印刷人　並木眞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發賣元　株式會社國光社出版部
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



岡部子爵夫人抵子

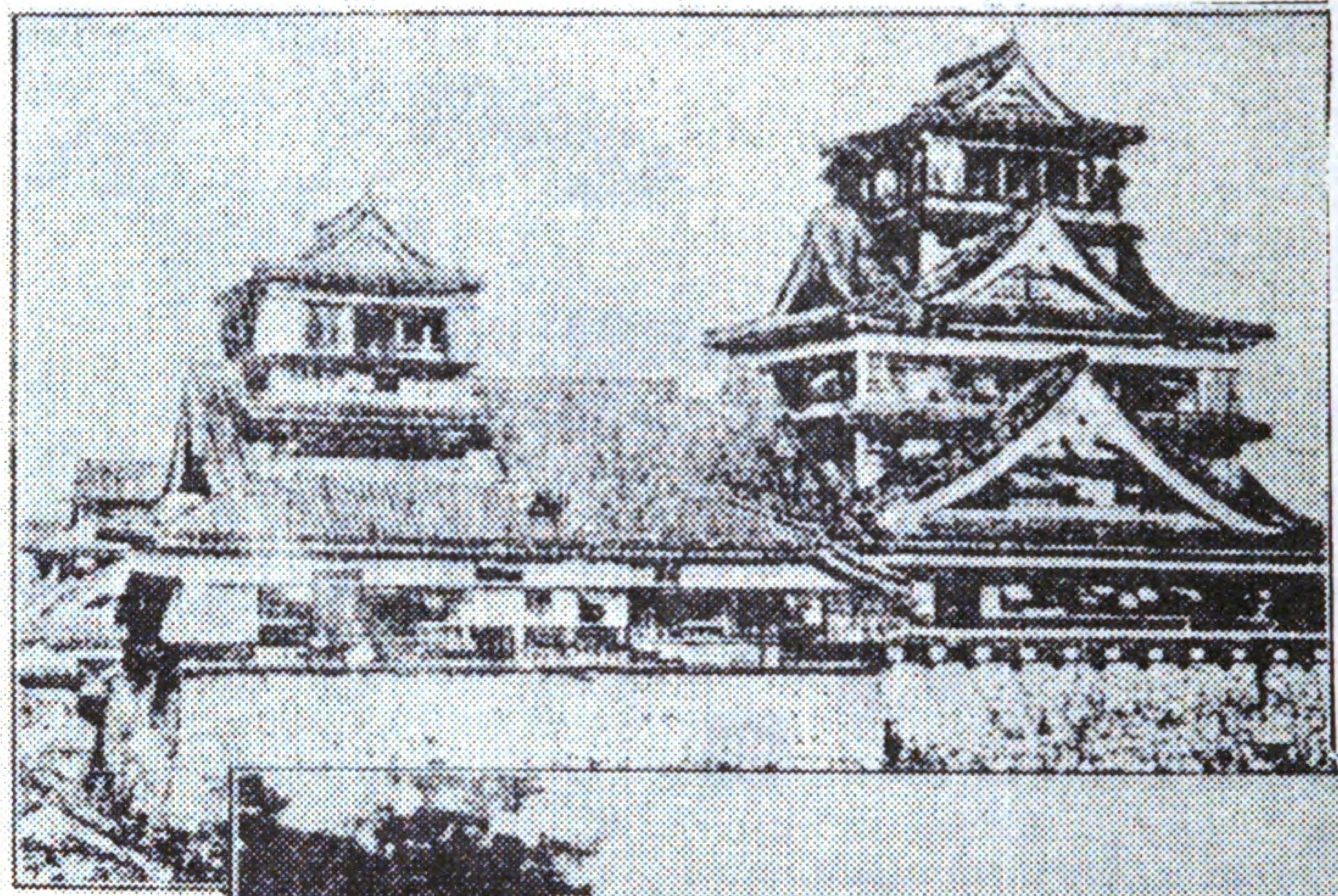


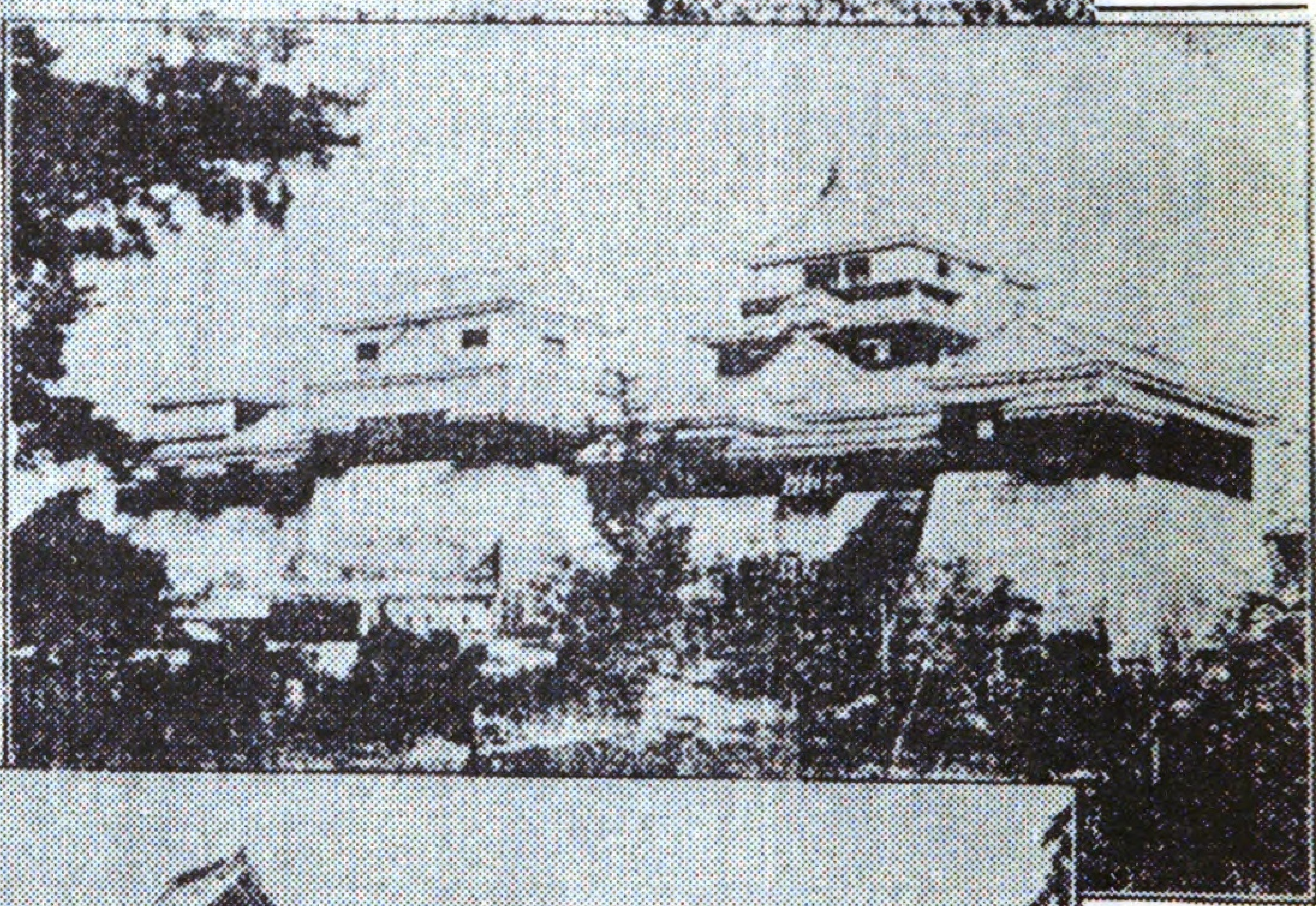
松平(直平)子爵夫人久子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

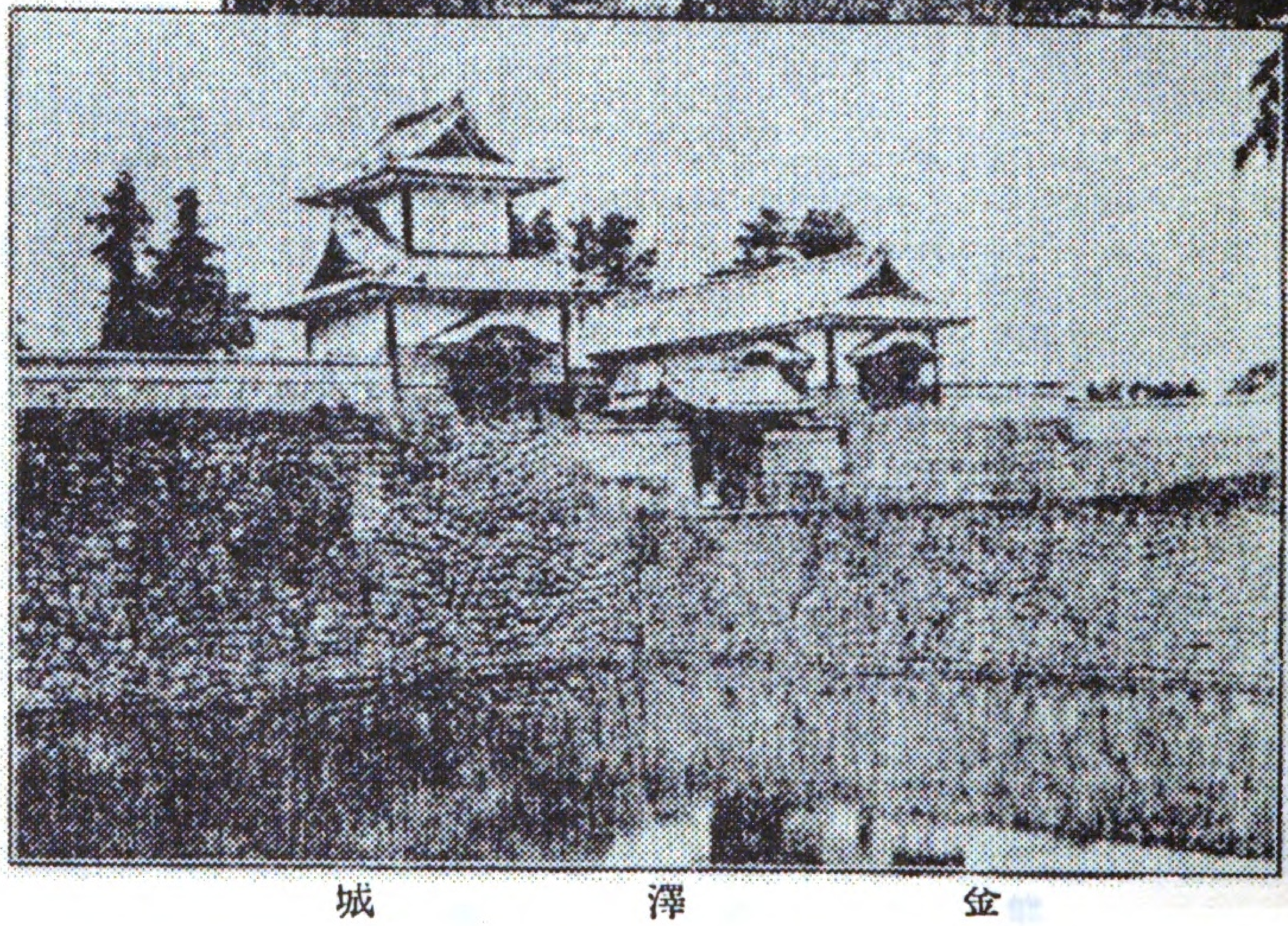
Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

熊本城





松山城



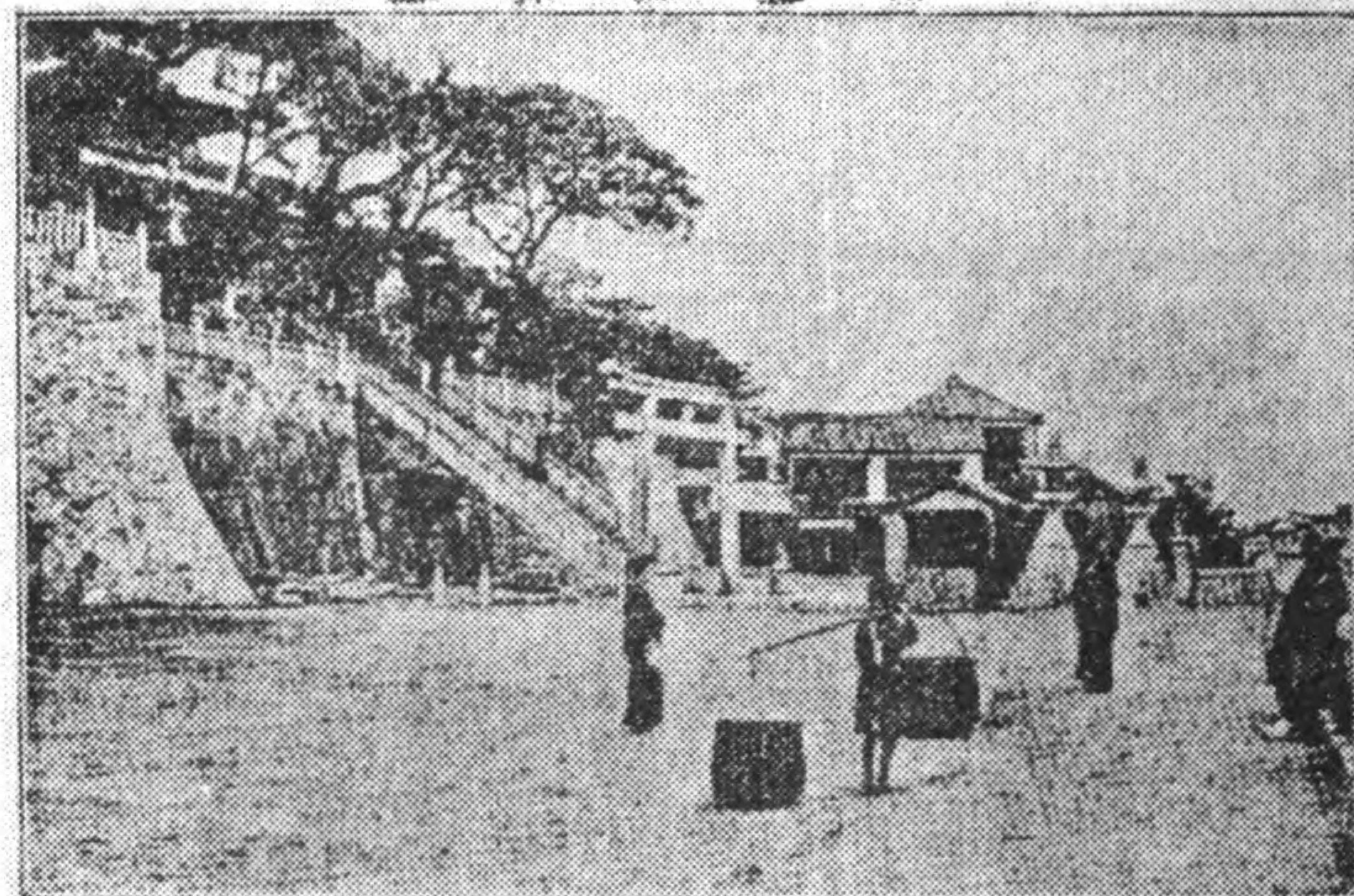
金澤城

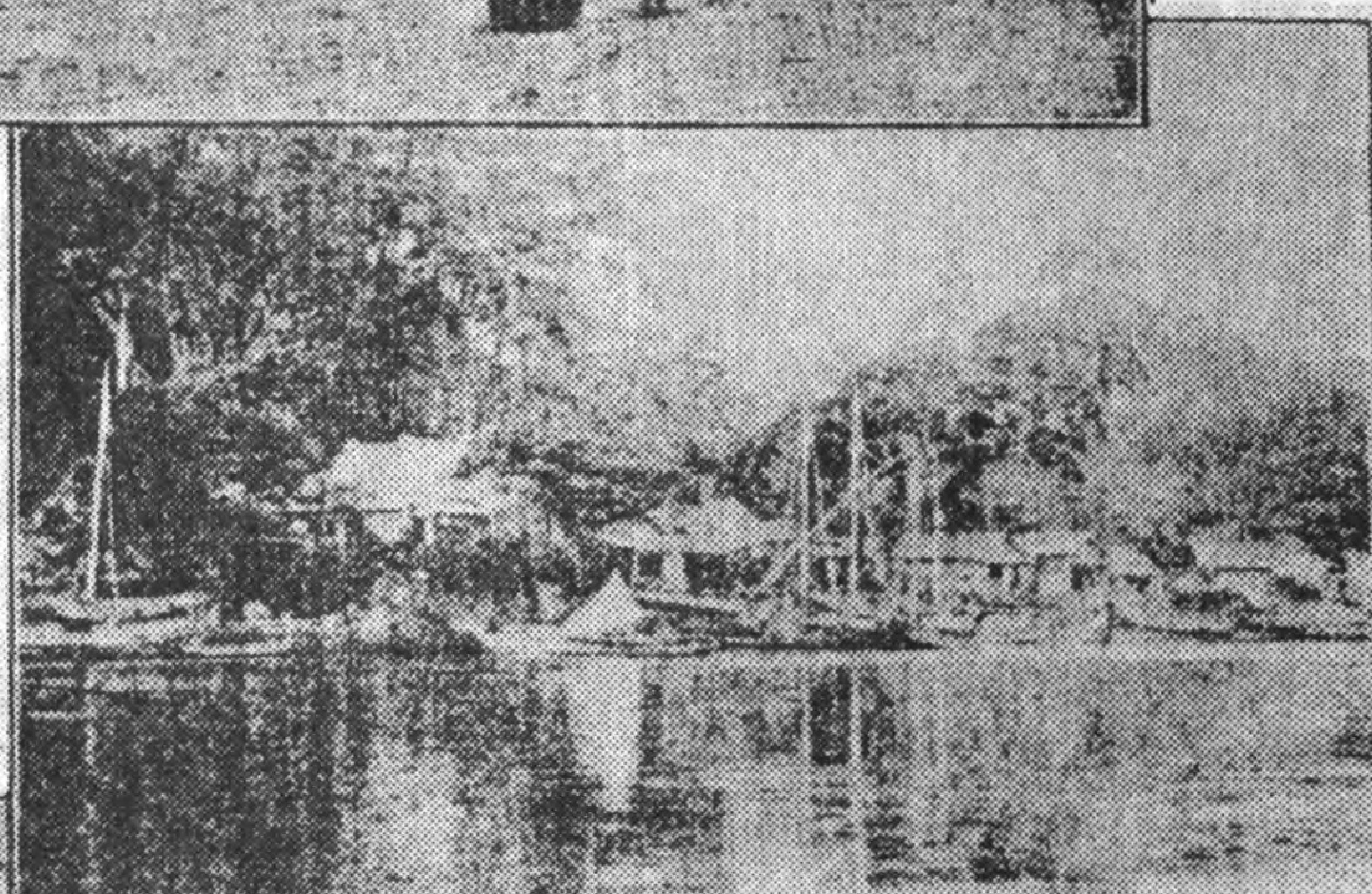
Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

馬關龜山神社





下田港



熊の浦

Digitized by Google

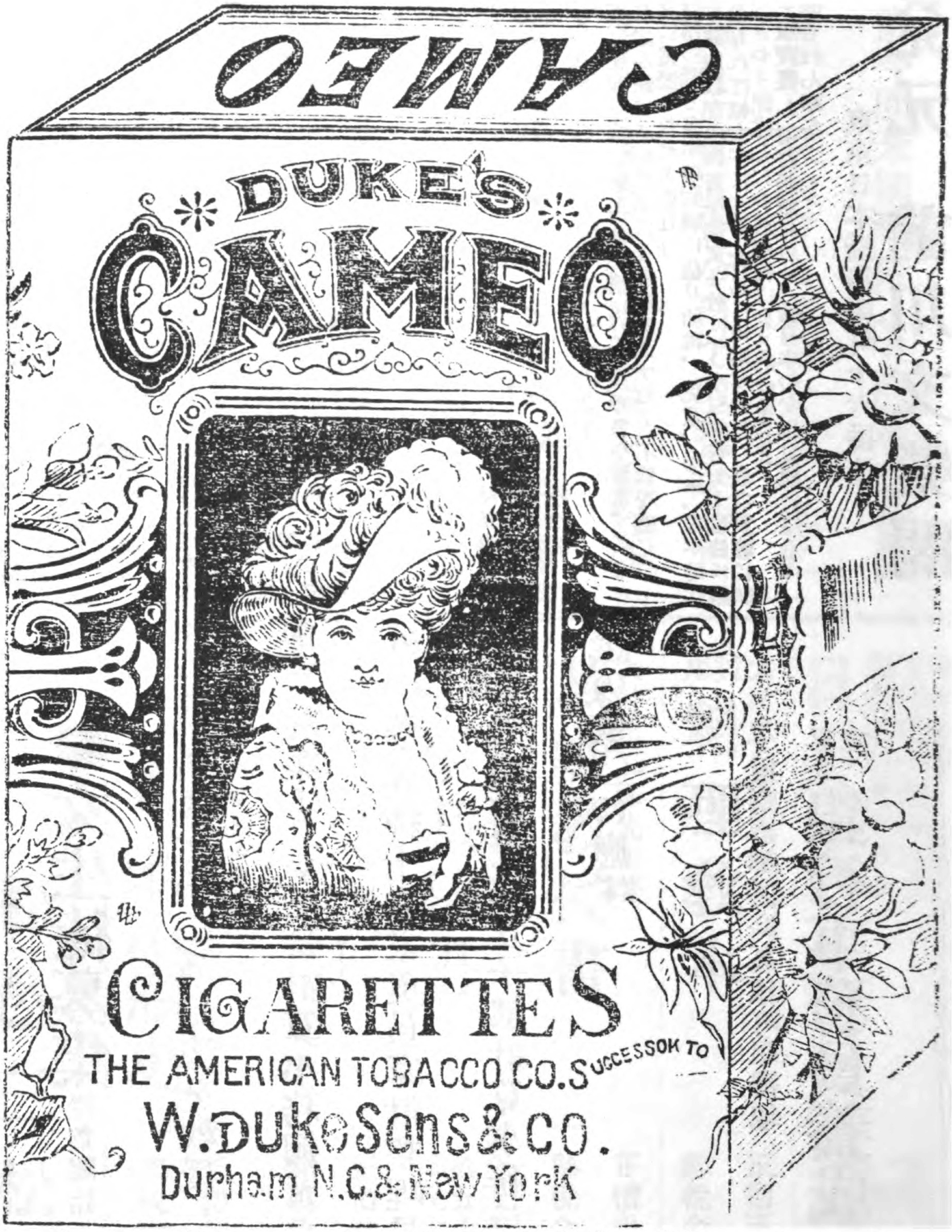
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

カ　メ　オ



東京新橋　江副商店

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

宮中御歌所寄人　中郁秋香著

訂正三版

千草のにしき

八面玲瓏の芙蓉峰、朝日に匂ふ山櫻花、是我國の精ならずや、壯烈秋霜の如き節義、高潔氷雪の如き精神、是我大和民族の華ならずや、此秀麗と高壯とを發輝せるもの實に我が國文の精華とす本書は古學復興以来諸名家の文詞中金玉の響あるもの無慮數百編を輯錄せるものにして、記事あり紀行あり論説あり消息あり物語體も韻文もあり之に加ふるに要語數千を載せて作習の模範と應用とに供す故に常に此書を座右にせば天下の名文を會得し一度び筆を執れば千言萬語の長編大作一氣呵成するに至らん今や訂正三版を發賣す

●和裝高尚優美本 ●定價三十五錢 ●郵税六錢

久津見蕨村著

増訂四版

家庭教育

子供のしつけ

家庭教育不完全の聲漸く喧し世上是が適切なる參考書を要求すること頗る急にして其之を缺けるがために子女教育上大なる不便を感じつゝあるは識者の常に遺憾となせる處なり

本書は著者が該博の識と多年の實驗に依り幼稚、兒童、少年、青年時代の四段階に至る家庭教育の仕方を言文一致にて十三章百六十餘條に説き示されたる者なれば婦女子にても容易に理解せられ、直に實驗に試むることを得べきやう記述したる近來稀に見るの好著なり

●初版再版三版賣盡し増訂四版發行す新日本の父母兄姉は座右に一本を是非備られん事を

●表●●清 艶麗錢郵定 廿五錢價試 税四装

發兌元　前川文榮閣

東京日本橋箔屋町十六番地

●

女生徒募集

授業開始入所當日

當女子部は女子に簿記法を教授し家計整理又職業としては計算事務頼たらしむる外○華族紳士商家奥員家計整理員○女學校其他出教授向女子部計算事務員紹介保證の依○に應ず

東京市神田區裏猿町四番地

私立

銀行事務員養成所女子部

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

福音十旅館廣告

野生儀今回米國桑港より歸朝し横濱と該港との往復する旅客を福音的に禁酒的に正實眞意を以て取扱ひ時に渡米せんとする人には桑港の風俗は勿論學校僕丁給仕等より料理人その概要を懇篤に傳授し又は出入船舶に送迎する等被我便益を圖るべくと存候間御宿泊被下度奉願上候敬具

横濱山手中村町二番

瀧本由造

重野博士 小杉博士序
下田歌子先生序文
須藤求馬先生新著

日本女史

正價一冊一圓二十錢
郵稅十四錢

大村忠二郎先生著

實用料理教本

正價五十錢
郵稅金八錢

大村忠二郎先生著

裁縫教授書

正價卅五錢
郵稅金六錢

眞能まさき先生著

小學裁縫書

全三冊正價金五十六錢
郵稅金八錢

鳩山博士夫人及諸大家述

今世女訓

正價廿五錢
郵稅金四錢

華族女學校學監正五位
下田歌子先生著

女子日本小歷史

正價參拾錢
郵稅金四錢

東京市京橋區弓町
松邑三松堂
電話新橋三千百七十三番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

早稲田大學文學部校外生募集

●文學教育科、史學科とも毎月二回の講義錄を發行す●一回の講義紙數二百頁內外にして二ヶ年卒業とす●月謝各六十錢、三ヶ月壹圓七十錢、半ヶ年三圓卅錢、一ヶ年六圓五十錢●學術普及の趣旨に基き本年度より入學金を全廢す

文學教育科講義

▲十月上旬一號發行、此際申込に便なり▼

掲載科目　倫理學、和漢の倫理學史、憲法、教育學、日本西洋の教育史、心理學、哲學、美學、言語學、和漢の文學史、和漢の文典、作文法、西洋の文學思潮史、文學概論、文學批評法、國文國歌の評釋、有職故實、漢文漢詩の評釋、支那時文、漢字顛倒排置法、文部省試驗問題擬答（教育、倫理、國漢文）、參考書案內、其他

擔任講師　坪內、高田、木村、小杉、大塚、桑木の諸博士、赤堀、有馬、北村、中野、雀部、保科、和田、上田、久保、武島、長、高橋、桂、大橋、中島、綱島、高島、菊池、青柳、五十嵐、永井、廣池、梅澤、正宗等の諸講師

史學科講義

▲十月中旬一號發行、此際申込に便なり▼

掲載科目　日本史（古代、奈良朝、王朝、鎌倉時代、南北朝、室町時代、安土桃山時代、江戶時代、幕末史論、明治史）、西洋史（古代、埃及、古代西南亞細亞、希臘、羅馬、英吉利、佛蘭西、匈牙利、土耳古、獨逸、露西亞、南北亞米利加、殖民史、政治史）、東洋史（匈奴、清國、中央亞細亞、印度、波斯、亞剌比亞、蒙古、朝鮮史）、傳記、解題、文部省試驗問題擬答（歷史全部）、其他

擔任講師　重野、星野、三宅、白鳥、有賀、那珂の諸博士、久米、福地、箕作、浮田、池田、渡邊、高桑、坂本、野々村、三輪、阿部、長瀨、河野、新見等の諸講師

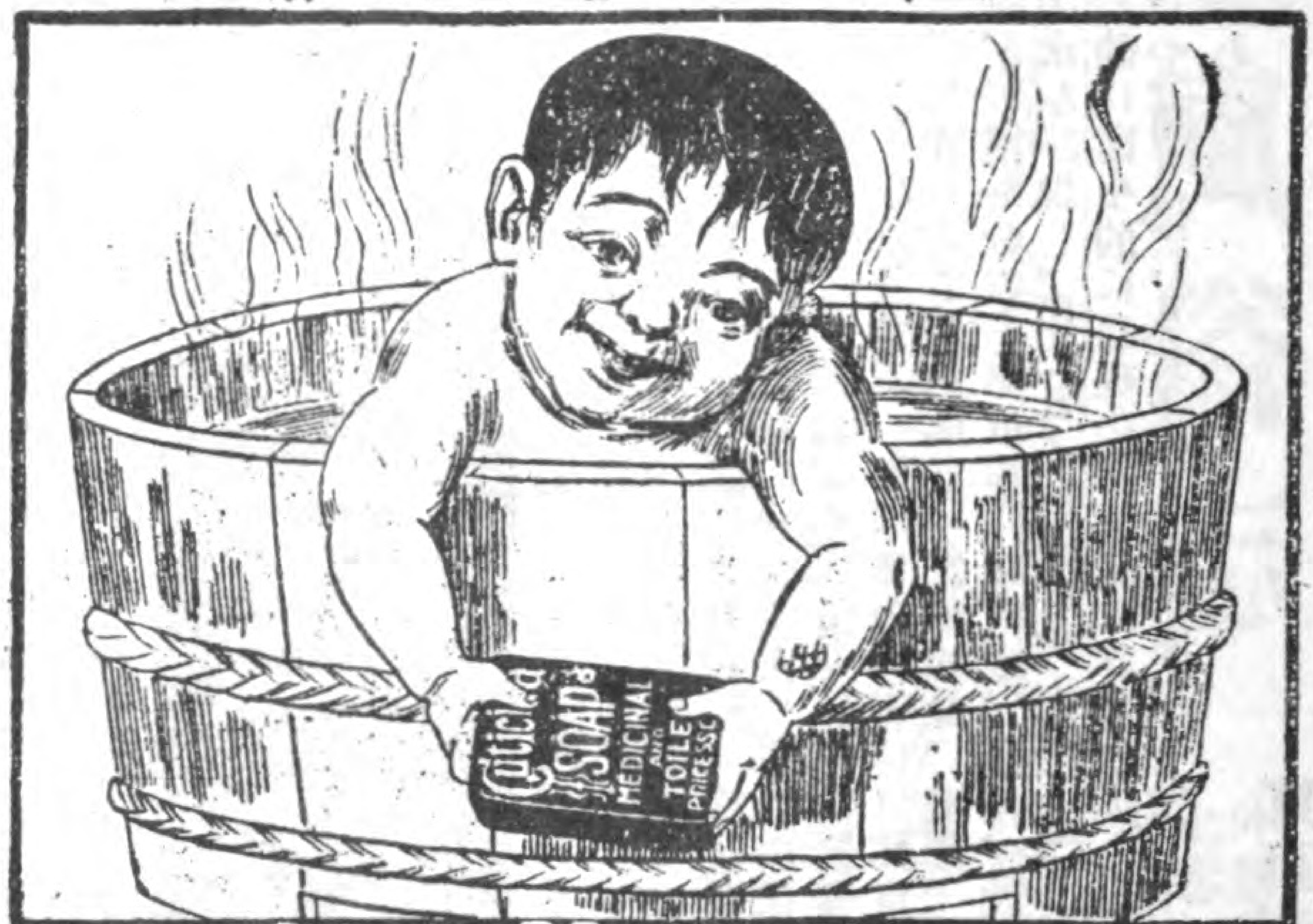
本講義錄の講習者は掲載の講義に就て質問することを得べく其の他種々の特典あり、細則を要する者は申込まるべし

東京牛込早稲田

早稲田大學出版部

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

小供の入浴と
キューチキュラ石鹸



小兒の身體手足に腫
物を生じ又たゞ皮膚病の爲めに
れ其他種々の
苦しめられ氣六ケ敷く晝夜安眠を得ざる
者には湯を
使はす時にキューチキュラ
石鹸を用ふれば忽ち肌を滑からに
皮膚病を癒やし
す又キューチキュラ石
平生
鹸を用れば皮膚病を憂ることなし
尚は婦人の髮洗ひ及化
粧用として最も適當なり

日本全國到る處の藥屋小間物屋に販賣せらる獨有名なる北米合衆國ボストン市ポツター製藥會社の製造に係る

東京市日本橋區通三丁目
丸善株式會社洋物店

●再版發賣廣告

●樞密院副議長　東久世通禧伯題字
●華族女學校學監下田歌子女史序文
東京帝國大學醫科大學卒業　秋山七朗先生著

再版 女子教育 家庭教養法

全一冊　●製本菊版大本　●四號活字鮮明刷　●正價金五拾錢

女子教育は今日の一大問題にして、家庭に學校に其書甚た少しとせす、然かも専攻學家の手に成り生理に照し衛生に基き學理の上より家庭に於ける教養の方法を詳説したるものや即ち少し、殊に筆を姙娠の前に起し分娩、保育より教育、性行に渉り家庭を通して必要なる教養の方法を詳説したるものに至て本書に於て始めて之を見る、是れ本書に題して女子教育家庭教養法と謂ふ所以にして、試に其目次の一班を擧げんか第一章に姙娠を説き姙娠の徴候、精神の衛養、身體の攝養、乳房の準備を詳説し、第二章に分娩に入り産前産後に付て産室、出産用具、出産、産蓐中の用産を説き、第三章の生兒の保育には母乳、乳母、獸乳より入浴及胎髮、臍帶及衣服、啼音睡眠及外出、乳齒、離乳、種痘、保姆、疾病、健康、醫師藥用、服製、玩具及遊戯、第四章の教育には體育智育德育に付き身體の發達保護、衣服飮食、智力の發達、視官、聽官、觸官、嗅官、味官、筋肉官、記臆想像、概念、斷定、推理、性情、體慾、色慾、慾望、情愛、情操、推考意思、摸範、教訓、習慣を分説し第五章には放縱、傲慢、沈鬱、過敏、怯懦、刻薄、輕躁、懶惰、嫌忌、好奇等の各性行に付き矯弊の方法を詳説し、凡そ女子教育に於て最も必要至重女子の知らさる可からさる家庭の教養法は擧て漏すなく、生理的に心理的に衛生的に學理の定則より詳説細述したるものなり、是豈に生花の書を讀み點茶の書を讀むと其必要同日の論ならむや、苟も母たり女子たる者の座右に必ず缺く可からざる大好書也、賢母たらんとするの淑女請ふ必す一本を購讀する所あれ

東京市麴町區飯田町四丁目三十番地
發行所　自治館
（電話番町四八二番）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

平出鏗次郎先生著述

東京風俗志

上中下三冊大和綴最上日本紙刷挿入木版銅版數百彫刻印刷最精巧△定價上卷金五十錢中卷金六十錢下卷金七十五錢郵稅各金六錢

本書上中卷世既に好評あり、今下卷出で丶玆に完成を告ぐ、その周到なる觀察遒麗なる六辭、東京風俗の起源を說き、變遷を論じ微に入り細を穿つの所實に掌上紋を指すの慨あり、加ふるに鮮明美麗なる挿繪概ね二百を挿みたれば、都門の光景は紙上に躍然たり、若し夫れ遊樂の眼を以て繙かば坐に墨堤の花に醉ひ、東臺の鐘に耳を欹つ感あるべく研學の志を以て讀まば、社會倫理教育或は歷史地理の學に幾多の資を供するへし請ふ愛讀の榮を賜はらんことを

東京市神田區裏神保町

合資會社 冨山房

[illegible]兌元

弊社儀從來出版業專門に有之候處今回出版部の擴張と共に新に販賣部を設け市內は勿論各地の出版にかゝる新刊書類までも漏れなく取揃へ顧客諸君の御便利を專一とし何品に不限薄利と誠實とを旨とし出精營業仕候間多少に係らず御愛顧の程奉願候

尙新刊の書籍種々陳列有之候間御誘合ひ御來觀奉願上候

東京市神田區裏神保町

合資會社 冨山房

販賣部

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

驚林軍醫總監發明

りうまぢす根切

梅毒根切

複方克快丸

半劑試み

大効なければ決して服すべからず

◉五劑三圓五十錢二劑一圓五十錢送四錢

五年十年長病二劑服し全快す

複方克快丸は其効驚くべし克快丸に三倍す

責任調劑…順天堂合資會社長…植木彌一

順天堂合資會社

本店東京市淺草區なみ木町

支店大阪市高麗橋枡屋町通

全快禮狀時に新聞に掲載す……一劑七十五錢半劑卅五錢



御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

高等師範學校研究科卒業横山德次郎先生著

新刊

日本婦女讀本

和装全一册
定價金廿五錢
郵税金四錢

新刊

高等日本婦女讀本

和装全一册
定價金三十錢
郵税金六錢

本書は曩に發刊して好評を博し十數版を重ねたる日本公民讀本の女子用として法制經濟に關する事項の外新たに修身家政の項目を加へ平易なる假名交り文を以て叙述したるものなれは女學校の修身科裁縫專修學校の讀書科小學校の補習科家庭の好讀書はた學校の賞與品として無二の良書なり

森井貞子
吉岡治子 著

小學校教科用 **裁縫書**

全二册
定價八十五錢
郵税金拾二錢

廣島秀太郎著

教育術語解

全一册
定價金卅五錢
郵税金四錢

佐藤福雄著

實驗新遊戲

全二册
定價金壹圓卅錢
郵税金十八錢

發兌元 東京神田區南甲賀町八 大阪東區備後町四丁目 寶文館

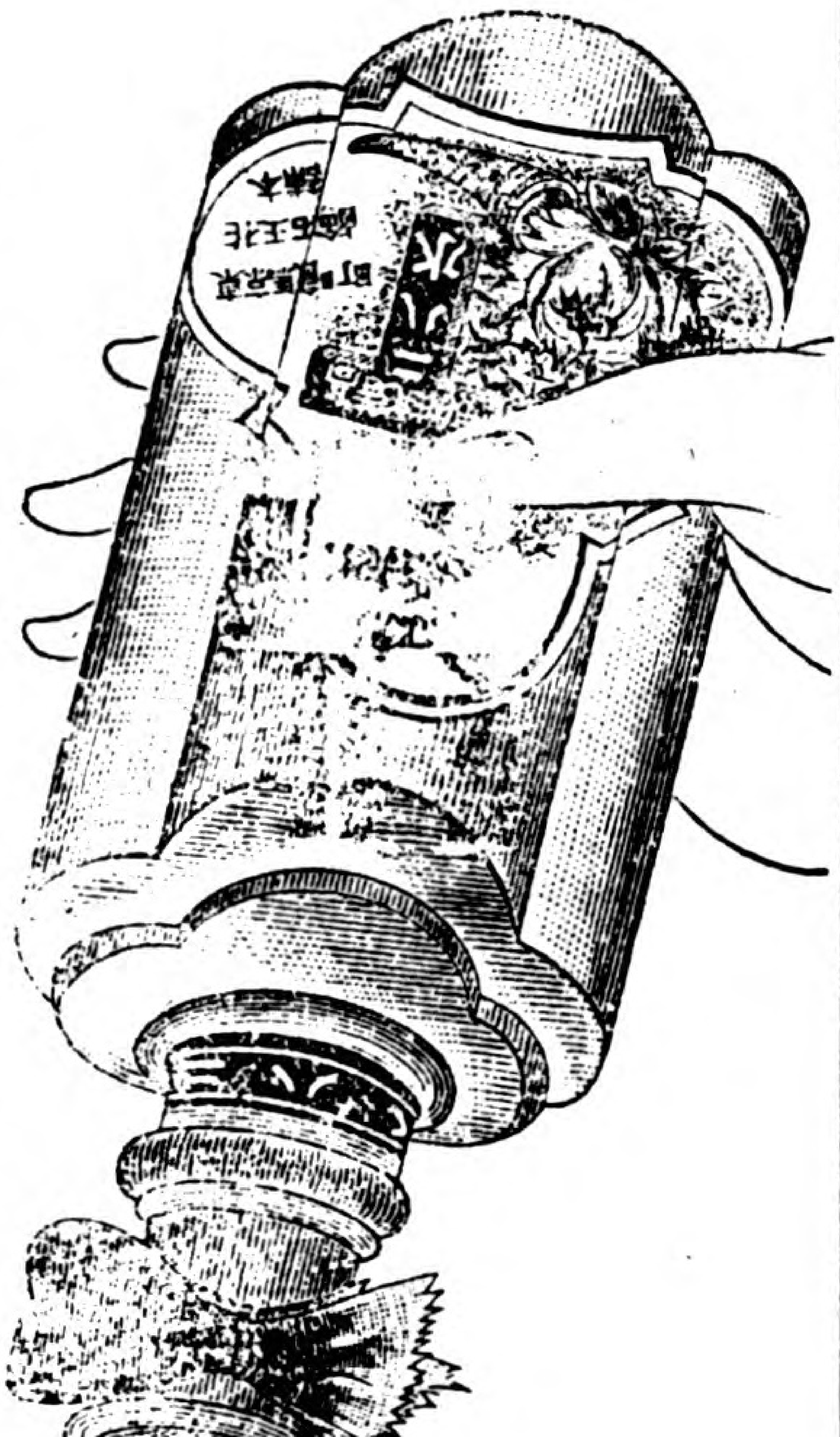
Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

二八水は
肌を白くきめをよくし●にきび●あせも●ひゞ●すべて肌のあれおしい下に用ゐて尤もよし
又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり(中瓶一本十五錢)

登錄商標

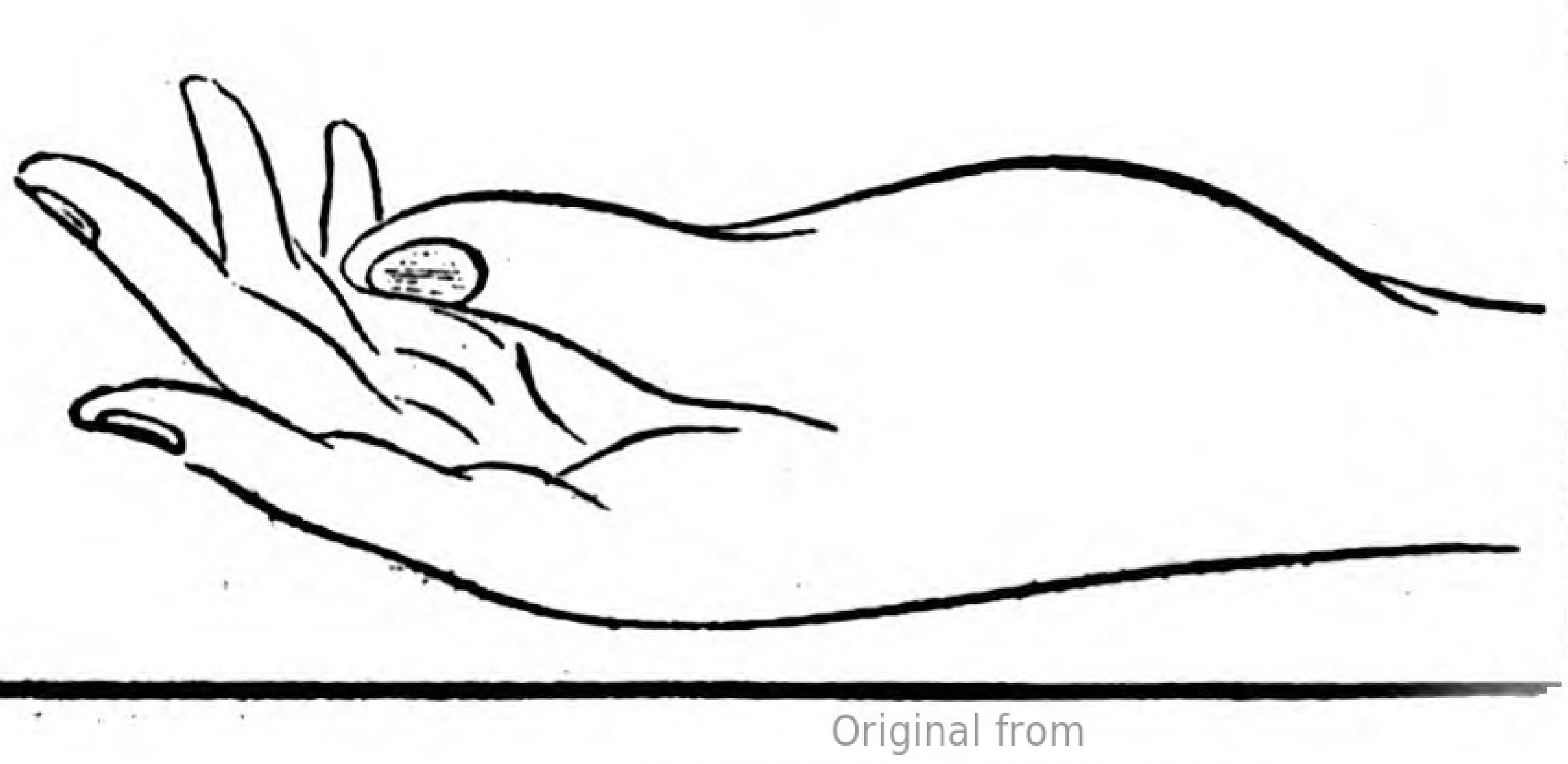

本品縮圖



花王石鹸

●品質ノ善良ト衛生ニ經濟ヲ旨トシテ製煉シ洽シクタル佳品ナリ

東京日本橋區馬喰町二丁目
發賣本舗 長瀨富郎
(電話特浪花九二二)



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑

第貳百六拾五號



女學生と紅粉

事甚だ小なるに似て、其實却て大なるものあり、舍てゝ顧みずんは、遂に害毒をして瀰漫せしめずんば已まざるなり。夫れ一滴の酒何かあらん、一喫の烟草や元と微なり。しかも其の風紀、健康、衞生等に及ぼすところの害毒の少なからずして、浸潤の致すところ、恐るべき至大のものあるを思はゞ、誰れか又少年子弟が酒を飲み烟草を薫らすを見て、是れ小事のみ、問はずして可也といふものあらんや。禁烟法の發布せられたるは此故のみ。禁酒法案の再度までも議會に提起せられたるも亦此故なり。

丁年未滿の男子の陷いり易き弊害に就きては、斯の如く既に法律の制裁を加へたるものあり。且つ社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

會一般の監視もまた自ら嚴格なる傾きありて、禁酒法案の如きも、早晩法律として形はるゝに及ぶことあるべし。元來斯の如き德義上に屬すべき問題をば、強ゐて法律として發布するの可否利害は、姑らく此に之を論ずるの要なしとして、唯だ吾輩は社會の制裁と監督とが、漸やく嚴格に赴くの勢あるを見て、少年子弟が深く自ら戒愼を加へ、放縱蕩冶の弊害に陷いるものゝ次第に其數を減少するの望あるを悅ぶものなり。靑年男子に於ける社會の制裁や、監視や、夫れ斯の如し、而も妙齡女子に就いては、一般社會が之を等閑視して、殆んど省みざるが如き姿あるは何の故ぞ。

斯く曰はゞ人或は云はん、妙齡女子にして飮酒の惡弊に陷いるものは殆んど稀なり。喫烟の害毒に罹れるものゝ如きも、また絕無なるべし。縱しこれありとするも、そは千百人中の一人ならん。若し千百人中一人にても、かゝる惡習惡癖に感染せんとする者あらば、法律と、社會の制裁は猶ほ男子を監視すると輕重あることなし。何ぞ又た特に妙齡女子のみに限れる制裁なるものあるを要せんやと。妙齡女子の惡習惡癖をして、單に飮酒と喫烟のみに止まらしめば、吾輩また別に云ふべきことなしと雖も、その尤も陷いり易き惡弊と、感染し易き惡習とが、喫烟にもあらず、飮酒にもあらずして、他に存在するあるを奈何せん。吾輩の制裁否な少なくとも取締を加へんことを望む所以は實に此にあるなり。然らば則ち妙齡女子の尤も陷いり易く感染し易き惡弊惡習とは何ぞや。曰くたゞ紅と粉とをいふのみ。

夫れ口に紅脂を施こし、顏に白粉を塗るは、たゞその容色を美麗ならしめんが爲なれば、別に咎むべ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

き程のことにあらず。女人本來の性質なり、曰はゞ寧ろ尤のことなりとして、之を看過するも可なるに似たり。殊に古來粉飾をもて婦人の身嗜みなりとして、素顏のまゝ男子に接するは禮にあらずと傳へられたる吾邦の婦女にありては、之を身嗜みの一なりと心得居るも亦無理ならず。されど是は深く思はざるの過のみ。花街娼閣、藝を鬻ぎ、色を賣るを以て、一身の計を立つるものはイザ知らず、婦德を修め學藝を研き、將來の賢母良妻を以て自任する妙齡婦女が、又何ぞ紅粉を塗抹して、身嗜みとするの必要あらむや。

由來女子は感情に鋭くして、誘惑され易き傾きあり。その品性の如き、操行の如き、學業の如きも、已れ自ら之を破るにあらずして、多くの場合に於ては、他性の誘惑の爲め、知らず識らずの間に、遂にその身を全うする能はざる者多し。例へば今の女學生問題といふものゝ如きも、その因て來るところを穿鑿すれば、十中の八九までは、女性が自ら進みて犯したる罪惡にあらずして、他性の誘惑に遭ひ、意思軟弱にして、抗拒すべからざるより生じたる出來事に過ぎざるなり。而かも婦人は往々にして、他性に愉悦せられ、迎望せられむことを欲するの情あり。此情や誠に誘惑の投じて以て、乘ずる所の間隙にあらずや。若し婦人自ら他性の誘惑を迎ふるの素を作るものありとせば、その塗抹するところの紅粉は則ち是れのみ。何とあれば紅粉を粧ふの心は、他人に歡ばれんと欲するの心に他ならざればなり。

酒に醉うて狂態狠藉たる少年の見苦しきは、勿論なれども、飲酒を戒しむる所以は、別に大に存する

なり。烟を吹いて街上を徜徉する未丁年者の生意氣にして厭ふべきは、言を待たざれども、喫烟を禁ずるの旨趣は、又他に重なる理由の存すればなり。紅脂を施こし、白粉を塗るが如きは、狂態として惡むべきなく、生意氣として厭ふべき點なきのみならず、一見却て可愛可憐の觀なきにあらずと雖も、紅粉を塗抹して自ら悦ぶ心事と、紅粉を見て以て歡迎せんとする他性の心情とを推して以て、機微を其間に求めなば、飲酒を戒しむることの狂態以外に在るが如く、喫烟を禁ずることの生意氣以外に存するが如くに、紅粉の餘弊や、その顏容の麗澤美色と全く反對して、女德、學業、操行等形以上に於て自然に闕如たるの傾きあるを發見せずんばあらざるあり。吾輩は紅粉の餘弊に就きて、尙陳べたきことなきにあらずと雖も、敬愛すべき吾が愛讀者たる諸孃子に對して、「憚かるところなき能はざるを以て、暫く是れより以上を言はざるべし。

兎にも角にも學校に在る女性の紅粉を塗抹するを禁ずるは、敎育上尤も必要の急務なりと信ずるが故に、吾輩は此點に就きて、各女學校に於ける當局職員諸氏に向つて期待する處自ら切ならざるを得ざるなり。寄宿舍の內に於て紅粉化粧の具を入るゝを許す學校とてはなかるべきも、通學の女性が厚化粧して校門に出入するは、決して稀らしからざる也。吾輩は獨り學校に於てのみならず、外客接待の時に於ても、親戚知己往訪の時に於ても、物見遊山の時に於ても、苟も籍を學校に置く間は、塗紅抹粉を禁

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ずるを以て、女學校の規則の一條となして、嚴重に之が取締りを設けんこと、恰も未丁年者の飲酒喫烟を禁ずるが如くにして、而て之にも優りて其實の擧らんことを希望して措かざるなり。

（青眼子）

中江藤樹

恐天命

たまものは人のわづらひかしこくて
　人のみちなきひとのゆくすゑ

知恥

我とわれこゝろに恥づるものならば
　恥べきことのなき身とぞなる

毋自欺

虎の威をかるやきつねのこゝろより
　其身をゑばにするぞはかなさ





日常の修養

棚橋絢子

現今女子敎育の上に行はるゝ二弊風あり。即ち一は孝貞の道を敎ふるに、極端なる例をのみ用ゐて、人生極めて稀に起るべき、非常の凶變に際して、古人が身を處せし行爲のみを談じ、吾人日常注意すべき行爲を講ぜざるにあり。此結果は子女をして、日常の行爲を輕んぜしめ、道德は非常の際にのみ、守るべきものと思はしめ、所謂細瑾を顧みずといふ、尊大倨傲の女子を作らんとす。これと同時に、また一方に於ては、德育徒らに空理に流れ、講師たる者博學を衒ひ、喋々として言辭を先きにし、奇怪なる新說を唱ふるを以て、自ら高しとし、其實行に至りては恬として顧みざるの弊あり。此結果としては、輕佻放恣なる女子を生ずべし。是等は皆自ら行はずして、口に誦し知らずして知りたりとし、大を談ずるを高しとし、新を論ずるを博しとせるより起りし弊にして敎育者たるもの、深く注意せざるべからざる事なり。非常なる人事の變に遭逢せし、烈女節婦が勇壯なる行爲の事蹟は、素より之を青史に載せ、百世に傳て吾人の誦唱服膺すべきものにして、若し不幸にして、斯る凶變に遭逢せば、吾人も亦古人に耻ぢざるを期せざるべからざること勿論なりと雖も彼

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

等節婦烈女の眞の精神の存ずる處を忘れ、徒らに其形式のみを誦し、孝悌の道の日常に存するを忘るゝが如きは、妄の甚しきものと云ふべく、又道德なるものは日常行ふべき、正大明白須臾も離るべからざるものなることを思はず、之を理論視して、其日常の實踐を顧みざるが如きは、是れ即ち道德を無視する者と云ふべく、斷じて許すべからざる者なり。

日常の實務を外にして、他に道德あるなし、大石良雄を以て之を云へは、良雄もと幸にして、主家の凶變に遭はざりしとするも、彼の忠義に於ては何等の相違なかるべきなり。亡君の仇を報じたる大石は、赤穗城下に君臣輯和せる幸福の月日を送りたる大石にして、他の大石にあらざるなり。之を孝悌の名を轟かせし烈女に見るも、皆其平常の心掛を以て、非常の際に處せしまでにして、其心は常時と少しも異る處なけれども、其境遇に應じて、其行動は異りしのみ、孝女烈婦の眞の精神は其平常にあり。國危くして忠臣あらはれ、歲寒うして松柏を知るとは、國家の危急が忠臣を產むとの意にあらずして、斯の時に初めて安穩時代に存在せし忠臣が、世に現はるとの謂なり。恰も松柏は春に於ても、夏に於ても、松柏なり。冬に至りて初めて生ずるものにあらずと雖も、霜露しげきに及びても、尙は其綠を變ぜざるが故に、其節初めて見はるゝが如し。忠臣孝子の忠臣孝子たる所以は、其如何なる場合にも忠臣たり孝子たるにありて、國家の難に殉ずるのみを以て謂ふにはあらざるなり、松柏の松柏として其節の堅きにたどへらるゝは、其四時を通じて色を變ぜざるにあり、唯に秋冬の際のみを以て稱するにあらず。

夫れ彼の非常の凶變の如きは、素より非常のこ

とにして吾等は切に遭逢せざるを祈り、力をきはめて之を避けんと欲する事にして、實際是に逢ふこと稀なるものなり。道は斯る萬一の場合にさへ、守らざるべからざるものなれば、平穩無事なる日に於て、守らざるべからざること勿論なりとす。

實に平常守るべき道德の外、他に道德なるもの存せず。此事甚だ知り易く見やすき道理なれども、世に知られざる如き觀あるは、心を正し道を實踐躬行すること、一見容易なるが如くして、其實甚だ難きに依らずんばあらず。往昔唐の魏徵が、臣をして良臣たらしめよ、忠臣たらしむる勿れと謂ひしは、此邊の消息を解し得たる名言と謂ふべし。

道德は、實踐躬行すべきものにして、空言にあらず。此行ふべきもの丶外に、道德あることなし。千萬言の訓戒も、萬卷の理論も要は行ふべき道を敎へ、守るべき德を論ずるに外ならず。行はずんば何の效なく、守らずんば何の用なし。道義の理論の生命は實行に在り、唯實行を要するのみ、實行なくんば其事終に空し、然るに談論の風熾んにして、實行の見るべきもののなきは何ぞや、之を云ふこと易くして、之を行ふことの難きによるにあらずや、況んや輕佻の徒、空言妄論を弄して、奇を競ひ新に誇り、處を顧みず時を思はず、其結果をも考究せずして、漫然放言するが如きは人心を蠱する妖邪と稱すべく、風敎を害すること甚し、速に之を剿滅せずんばあらざるなり。

されば人は其平常を大切なりとす。日常能く心を正し、行を省み、完全なる生活を送るべきなり。殊に女子たる者寸時も自己の本分職責を忘るべからず。實に日常の事はやがて非常の時の事に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して、之を實踐躬行して缺ぐるなきこと甚だ難し。蔡中郎女訓に婦人日常の修養工夫に付說く處あり。即ち首面と心とを比して、婦人が日毎に其面を化粧する如く、其心を修養すべきを云ひ、化粧と修養と諸點に一致せるを說き、甚だ記憶し易く解し易く示諭せり。之を譯述せむに曰く。心は恰も首面の如きものなるを以て、甚だ飾りをなさざるべからず。但し面は形あり、故に飾るといへども、心は無形のものなり、故に之を飾ること能はず、之を飾らば僞となるを以て之を修養せざるべからず、此の心の修養を怠り、一朝善事を思はざれば、邪惡は其虚に乘じて、これに入り、之を荒廢せしむること、恰も首面一旦修めざれば、塵垢の之を穢すが如し。然るに世人の多くは、面を飾るを知て、身體四肢の主神たる心を修めざるは甚だ惑へりと云ふべし。面の飾らざるは、愚者が之を醜と云ふに止まれど、心の修まらざる時は、賢人に惡と謂はるべし。面は潔淨ならざるべからず、されば鏡に對して面を拭ひ、其淨潔なるや否やを見る如く、自己の心の潔淨なりや、否やを省み、其潔淨なることを思へ、粉を傅くるには其粉能く調和せざるべからず、されば此の如く我心の能く和柔し居るや否やを省み、之を和せしめんと思ふべし。粉を加ふるには、其鮮明ならざるべからざる如く、我心の鮮なるべきを思へ。髮を澤はすには、髮潤澤ならざるべからず。心また斯くの如し、心に裕ある處ありてつやあることを要す、故に之に依て心の潤なるべきを思ひ、櫛にて亂糸を理するに依て、其心の能く筋みち立ちて理あるを思ひ。髻を端正に立つるにつけて、其心の正しかるべきを思ひ、鬢を攝するには、整齊ならざるべからず、之に依て其心の整齊あるべきを思

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

へといへり。

斯く日常何事につけても、能く心を用ひ、温柔方正にして仁慈淑良なる樣心掛け完全なる一日を送らば、やがて完全なる一生を送り得べく、精神の圓滿幸福なること限りなかるべし、また斯くてこそ修養の工夫もつみて、若し不幸にして、非常なる凶變に遭ふも、至善の境に住するを得て、其心を貳にせず節に殉ずるの勇も備はるべけれ、心を貳にせずとは、變に臨むも、平常の心を失はざるを云ふなり。新に心を生ずることとは、全く相反せり。さればよく心して、日常の實務を勤むべきにこそ。

行爲、儀容、歩行、是等は皆汝の品行を綴るところの文字なり。（ラウエートル）

婚姻哲學（承前）

前田長太

（四）今人の眼に映ずる婚姻

今人の眼に映ずる婚姻、替言すれば、今人の婚姻觀であるが、今日の人々は隨分婚姻に就て妙な觀念を懷て居る、余は今其中の最も弊害になるものの二つ三つだけを擧げるつもりである。

婚姻は人倫の大道にして輕々に執行ふ可きものでないと云ふ事は昔の人が始終口癖のやうに云つたものである、昔は人が財産の爲に結婚しなかつた、故にソロンは婚姻の時に嫁資なるものを禁じたのである、但だ衣裳三枚、それに些少の道具をのみ許した、其譯は婚姻は貿易でないと云ふ意を明にする爲であつた、此は太古の事であるが、降て中古の時代に至りても、年少男子は女の淑德

の爲に結婚してお金の威光に眼が暗まされなかつた、徳は金より貴重なりと云ふ語は、此の時代に中々勢力があつたのである、所が世が段々澆季になるに從つて、婚姻が遂に一種の商法の如くになつて了つたのである、故に結婚の話が出ると直ぐに嫁資の話も出る、附錄として、號外として、出るならば、尙恕す可しであるが、本紙何頁と云ふやうな譯で、第一着に持出されるのは、沙汰の限りとや云はむだ、男は女の淑德の如何を顧ずして、直に其の嫁資の幾許を勘定する、甚しきは其の嫁資の多寡によりて女の美醜をも撰ばぬこともある、女の父母も又其娘を嫁するに當りて、先方の男の財產如何を第一着に問ふを常とする、乃で財產が澤山あれば直に條約が成立するのである、之を稱して財產結婚と云つて可からう、財婚と云ふやうな熟字は語學の上に許されまいが、事實の上に公許されて居るから仕方がない、それで今では誰某が結婚したと云はないで、何萬圓が結婚したと云ふ可きである、實際西洋ではさう云つて居る。

是では父母が其娘を市場に賣れりと云ふヌビア及び土耳古某國の事を笑ふ譯には往かぬ、彼の支那人が女を買ふと云ふ事を聞て、如何にも野蠻の遺習らしく思ふけれども、今日文明國と稱せらるゝ處にも、亦矢張異名同實の事が行はれて居るのである、吾人が飽迄之を排擊しやうと思ふのは、斯の如くお金で女を買ふと云ふやうになるのは、女子の淑德を滅却した話で、女の道德的價値勢力を毫も認めぬからの事である、是れ實に現今結婚の弊風として大に筆誅しなければならぬ事である。

次に門地の結婚なるものがある、此は必ずしも

今日初まつた事ではない、處により昔は何多かつたかも知れぬ、所謂婚者の技倆如何を顧ず、彼の人は誰某の苗裔であるとか、其の親御は斯々の位置に立つて居つた者だとか、華族だとか士族だとか、何んでも名門名族を當にして結婚する事である、今日の世は各自の働によりて功名富貴手に唾して得べしと云ふ世の中になつて居るに係らず、倘門地に戀々として居る沒理漢が澤山居るのは、實に驚く可しである、然し門地は當ならぬもの、槿花一朝の榮と同様であるから、如斯結婚者は忽にして車夫的生活に陷ることもある、平民主義、社會主義、平等主義が盛に行はれて、階級打破など云ふ文字が多くの人々の口より叫ばれて居る今日には斯る結婚は餘程考へ物である、注意までに申して置くのである。

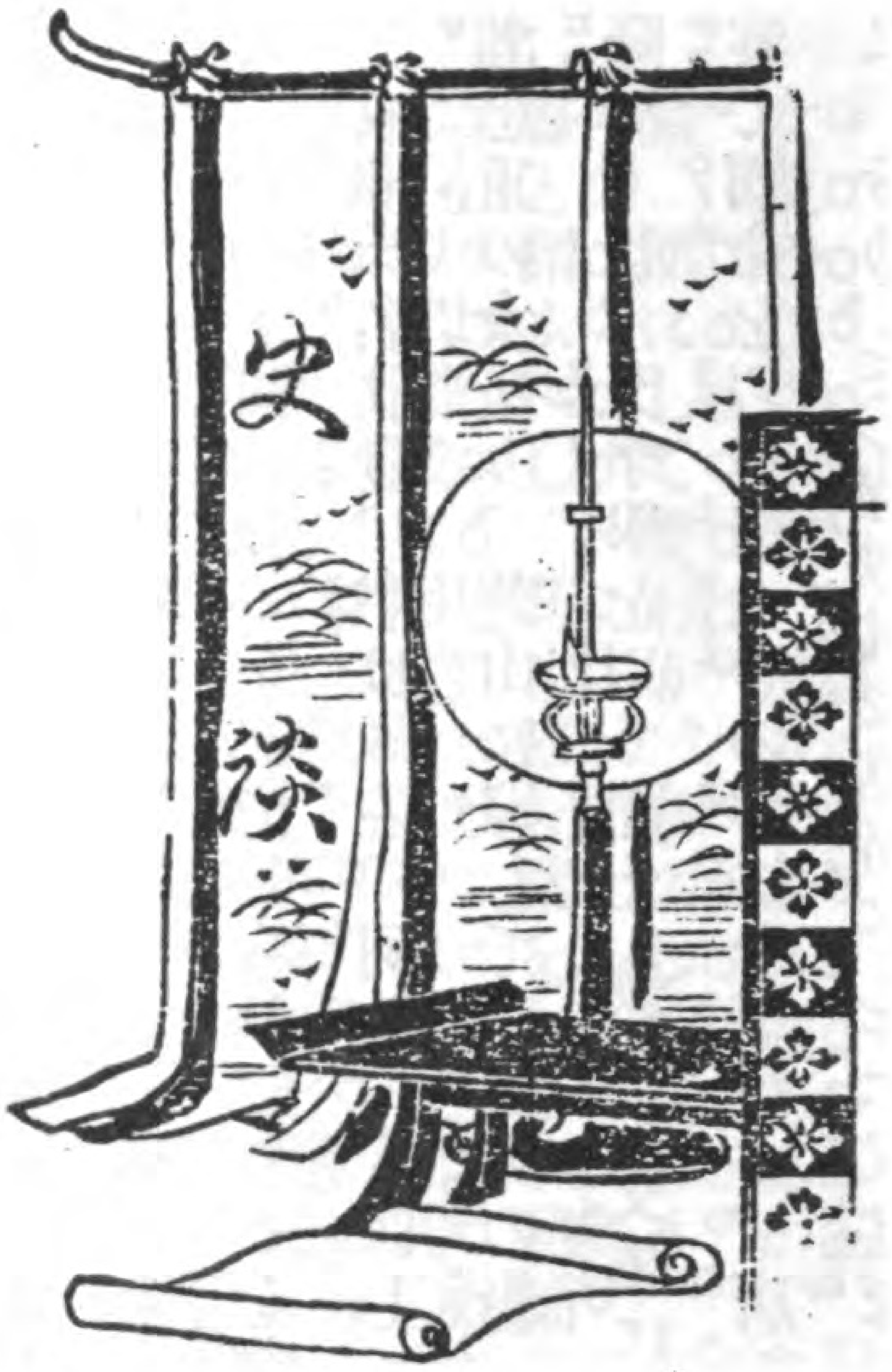
其外西洋では娘を舞踏に伴れて往き、衆人稠座の前で、娘に歌はせたり、踏らせたりして、其の標緻、其の伎倆などを見せて男を見附むとする者もあり、又某國では父母が自分の娘を與へたいと思ふ男を釣込んで、娘に抱込策を授け、甚しきは二人同室せしめて、否應なしに結婚條約を成立せしめやうとするものもあるさうだ、何れも沙汰の限である。

兎に角世が文明になつたと申しても、今人は結婚の何物たるかを能く解して居らぬ、如上の弊風は野蠻の遺習と云つて宜しいか、將た文明の餘弊と云つて宜しいか、そは別問題であるが、斯る弊風の今倘盛んに行はれつゝある間は、結婚せんと欲する者の宜しく大に注意すべきで所ある。

（未完）

心の修養は額と眼とに在り　（西　諺）

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



唐錦

文學士　濱田廉

土佐の儒者大高坂芝山は、德川の中世に於て、朱子學派の雄將なり、幼名九郎三郎、名は季明、通稱清助、芝山とはその雅號にして、又別に一峯黃軒或は喬松子、黃裳閣と號す、同藩の宿儒谷一齋の門に學び、最も心を理氣心性の學に潜め、適從錄二卷を著はして、縱に伊藤仁齋を毀罵し、又山崎闇齋傳を作りて、痛くこれを詆れり、先哲叢談、近世叢語によるに、芝山弱冠にして、巖代侯內藤左京大夫につかへ、居ること數年にして、去つて稻葉美濃守に游事せしが、晚年に至りて、祿足らざるを以て、休致を乞ひしかど、ゆるされず、尋で災に罹る、美濃守金を賜ふてこれを慰む、是に於て芝山止足軒記を作り、後また致任を云はざりしと、然れども欽慕錄によるに、この後又去つて、更に伊豫松山侯松平隱岐守定直に事へしなり、垂憲錄拾遺に、貞享二丑年、稻葉美濃守殿肝煎を以て、世銀百枚三十人扶持、同三寅年、右知行直　四百石十八人扶持、常江戶奏者番、元祿九子年隱居、爲隱居料十八扶持、とあるを以て證となすべし、其子孫世々松山侯につかへて連綿として今日に至るまで、こゝに家せり、松山はわが故

郷なり、父祖かつて大高坂氏を云々するを記憶せしをおぼゆ、芝山の名を聴いて、聊感慨なき能はず。

されど予が今こゝ記せむと欲するは、芝山にあらずして、其室成瀬氏なり、然れども先哲叢談、近世叢談以下、この賢婦人を記するものなく、落寞として煙滅に歸せむことを恐れ、こゝに世人に紹介せむと欲するなり、但しその傳は唯欽慕録に略叙あるのみなれば、その詳細を悉すに由なしといへども、予が本稿の趣旨は、その傳にあらずして、その著書に在るを記憶せられむことを冀ふ。

成瀬氏名は壹、字は維佐、阿波の人にして、成瀬忠重の女なり、芝山に嫁して、閨秀の譽甚だ隆かりき、又才學を以て聞え、兼ねて文墨に嫻ふ、嘗て國命を以て婦女子の作法を著はす、唐錦即ちこれあり、その卷帙甚だ浩瀚にして、又甚だ稀なるを以て、世人これを知るもの少し、予が云はむと欲する所は、實にこの唐錦あり、後寛政十二年四月に至りてこれを刊行す、裔孫大高坂延年の序に曰く、

元祿中、越智侍從公(伊豫今治侯)が維佐に著述を請ふ、是に於て唐錦十三卷を撰ぶ、芝山之れが訂正を爲す、書成り、乃ちこれを侍從侯に致し、副本家に傳へて寶となし、敢て失墜せざること、今において百餘年、時を待つこと久うして、未だ勢を得ず、公行するに由なし、故に未だ之れを知るものあらず、同僚田叔徳偶々來り、架上書あるを見、披閲晷を移して、予に謂て曰く、家に珍書あり、徒に私蓄となす、亦惜しからずや、我甚だ一本を藏せむと欲す、幸に深く嗇むこと勿れと、輙寫して善き所の人に示し、遂に轉傳して莊内邸良醫前田子仁の手に落

つ、人を退はして予に言うて曰く、輓近の世、女流の該洽卓識、斯人の若き者あるが、述作の體、簡にして要あり、幸にして實あり、有用の書と謂ふべし、苟も婦女輩をして、朝誦夕讀して、以て訓戒に服從せしむれば、閨門の中嚴師友あり、我大男子と雖、亦裨補を得ること居多あり、人に於ても亦然らむ乎と。遂に同好と謀つて、更に一通を寫し、以て剞劂氏に屬す

刊行の次第はかくの如し、而して前田子仁子の評寔に當れるなり、然るにもと藩主に告げずして、私刊せしを以て、後日その譴怒に觸れ、其板を滅せらる、故に世間に流布すること鮮きなり、今その内容を語らむは煩雜に涉るを以て、總目錄をかかげて、讀者の想像にまかせむと欲す、

唐錦總目錄

女則五卷

是はそんなの學びの法を、こゝのつにわかちついで、つはらにのべ侍る、みないにしへのをしへあり、

装束抄一卷

是はむかし今、女房のさうそく、四時をり々々の、かしこき妃のおほんことを、しるし侍る

姿見一卷

是は装束抄にひきいでし、もろこしのかしこき妃の、おほんことをしるし侍る、

寫繪一卷

是は我朝ちかき世の、見聞にし貞女のことをなんしるし侍る、

古敎訓一卷

是は學びの道、誠敬のたぐひの字訓を、やはらげとき侍る、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

史談

柳櫻集

是はまへの五部のふみのうちに、のこれることをひろひ、おぼろなることをほがらかにし、あるは世のことわざのさま〲にうつり、花、紅葉、月、雪のをかしきけうなど、まじへあつめてしるせり

およそ、部のかずはむくさにして、巻のかずはとをあまり三つなり、このごろいとやんごとなき君の、おほせをかけ、日かげあまたすぎざるうちに、すが〲うつして、奉りけらしが、あらたにからにしきとなん名づけ侍りける、古歌に、おもふどち、まとゐせる夜は唐錦、たゝまくをしきものにぞありける、くちたる筆のすさびを、錦のうつくしきになずらふ類にはあらねど、自ら思ふに、むくさながら、をんなの學び、いづれゑらびすてがてなるも、きんしるのたゝまくおしきに、ひとしかるゆゑに、題號にも、のせしなり、しかはあれど、古詩に、美人我に錦繡のきれ〲なるをおくれり、ともすしぬれば、あたらにしきなれど、たち分ちて、衣にぬひうはもに作り、裀とし、几帳とし侍らんも、皆その用にかなへるから、あしかるべき物かは、いで此ふみも、すへ名の外題をのぞき、しな〲にゆきてもちゆともよし、さもあらばあれ、何のさはりかあるべきなれば、それをあはせ、かつは後に見ん人の心に、まかせさふらふならし、

この書芝山の力を藉ること、固より少なからずと雖も元祿の頃、女流にしてこの種の書を作りしは、誠に多とせずばあらず、たとひこの書は得難きも、大高坂芝山の室に、成瀨維佐子ありて、この浩著ありしことを記憶せられむことを願なり、芝山の

跋文あり、曰く、

唐錦十三卷、黄裳閣喬松子妻、藤原伊佐媛之所撰、其經日幾三月而稿成矣、喬松子亦與論評焉、盖我朝女學之書、古今未嘗有如此之正且備者也、

文祿七年首夏　西湖一峰翁書

（をはり）

お杉お松の傳（下）

堀内新泉

右樣な次第で、お杉お松の姉妹は、加之も年さへ同じうして、何方も若寡婦に成りましたので、互ひにこの上も無い悲みを抱いて、心細い月日を送つて居りました。

頃は丁度その年の、秋の農事も爲し終り、百姓はこゝで一寸一ト息吐いて、麥蒔にかゝらうと云ふ時分でございましたが、ある日のことに妹お松は、當歳の娘を抱いて、姉のお杉を訪ねゆき、四方山の話の末には、互ひに仕合わるき身の上を歎き合つて、暫く袖を絞つた後、お松は姉に向ひまして「姉さんお前さまも未だ年は御若いし何時〱までも斯うやつて、寡婦で月日を送つて居ては、何彼に就けて定めて御困り、成さるであらうが、何う成さるお積りです」と、試みにその所存を問ひました。

ところが姉は、いさゝかも躊躇ひませずに「私かえ――私は最う此の儘一生寡婦で終りますのさ」と申しました。

「でもお前さん、別に財産が有ると云ふでも無いから、肝腎な嫁人が無くては、お前さんお一人で、野のことから山のこと、それに朝夕の煎炊の業まで兼て行くその上に、目のお見え成さらぬ母さんや、子供の世話まで仕て行くのは、中々骨が折れ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ませう」

「ナニお前世の中は、そりや最う他に靠れる氣に成れば、朝夕のお箸を取るのにも、他に含めて貰ひたいやうな氣にも成らうが、心を少し強く有つて、誰にも頼らぬ、自分は自分一人の力で、世に立つて往かねば成らぬものだと極めれば、何んなことでも出來るものさ」

「そりや左樣かも知れないが、何分女子の腕ではね――」

「イヤ、それは御前、少し考へが違ふかも知れないよ。女子は元より相互さまに、何から何まで、そりや男子には及ぶまいさ――けれども其は不斷の心がけ次第では、蟻が百足を追越す例も世には隨分有勝のことで、何にかけても強いからと云つて、油斷をすれば男も強ち強くは無く、また何にかけても弱いからと云つても、油斷さへ仕なければ、女も強ち弱いとは言はれまい。よしんば弱い女でも、私はこれから撓まずに、油斷を爲ずに働いて、生活も立つれば、母さんの看病もする、子供も立派に育てあげて、嫁でも貰う頃に成つたら、切ては田畑の二三反、それに家位は新しく普請して、若夫婦に讓らうと思ふを心の勇みにして、これから精々稼がうと思ふのさ」

「それで遣つて行けなされば、それに越したことは無いが、姉さん果して、女子でそれが出來ませうかね」

「出來ると思へば立派に出來る、出來ぬと思へば、假令充分お金が有つても、世は何事も出來ぬもの、其處は不斷の氣の張次第さ。お前は私の了簡を、宜しく無いとお思ひかも知らないが、先ア善く思つてごらんなさいな。手のかゝる老人はある、子供はある、それに身代と云つては僅彼の田が二反

限に、よく辛抱に働き通して下さつた東助どのゝ、遺しておいて下さつた畑が二反に山が少し、餘程の稼人で無いことには、所詮生活は立たぬこの家に、誰が今更入婿などに來てくれませう。よしんばあつたと仕た所で、その人がまた先の人を見たやうに、第一親に優しくて、彼の通りに正直な稼人であるならば、それは誠に願つたり叶つたりだが、世の中は中々そんなに誂へ通りには行かぬもの。萬一此方の當が外れて、酒は呑むは、仕事は爲ぬは、その上心が邪見であつて、もし母さんにでも強く當つてごらんなさい、私は毎日何んなに苦勞でござんせう。それでは第一唯た一人の母さんにも濟まないし、私も一生袖に涙は絶えぬと云ふもの。その切ない思ひに比べやうならば、この儘寡婦を立て通して、母さんにさへ飢じい思ひを爲せ申さず、この子を育てる傍に鍬も取らうし鎌をも取つて、氣樂に稼ぐが私は嬉しい。身體に骨を折らせるのは、却つて身體の藥だが、心に苦勞を爲せるのは、滅切生命が縮まるさうな。私は思案を極めました――一生寡婦を通します」と、姉のお杉は何處までも、動かぬ色を見せまして、我が所存を妹に打明けたのでございます。

妹のお松は篤斗姉の話を聞き終り、少らく凝然と考へて居りましたが、膝を前めて氣をば引立て、「姉さん成程左樣ですね。ア、私ば所存が足りなんだ。實は私も御承知の通りの今の身の上、何したものか此の末はと思案に暮れて居ましたが、今のお話を承はつて、心がしやんと落着きました。私もこれから男を便らず一生寡婦を立てまする」と、聞きも終らず姉は手を振り「イヤ〳〵お前は思案もの、さう早まつたもので無い。おなじく寡婦とは云ふものゝ、子供こそあれ彼の家と緣を斷

てば何處までもお前の手で、是非とも看護仕なければ成らぬと云ふ親は無いゆゑ、この間の話のやうに亡人の、切て一周忌も濟んだらば、一旦宅へ引取つて、再び夫を有つが宜い。それに就いてはお前の娘は、私に下さい大事に育てゝ行々は、私の子供に女合せませう」

「それでは姉さん斯うして下さい。そんなに話が纏まれば、私もこの子を連れて歸つて、生涯立派に寡婦を立てお前に一臂力合せて、女子と云つても悔られぬ丈に、この家を女子二人の力で見事繁昌させ、それを彼の世の土産にして、世を終らうではありませぬか」

「それも宜からう。では左樣仕ませう」

「何分お願ひ申します」と、喜び勇んでお松は歸り、その後一年ばかりは亡夫の家に居て、夫何某の生前も同樣に、舅姑に厚く事へて、義理ある間の弟妹を情も深く撫恤りつゝ、亡夫の一周忌をも極めて懇切に營んで、或る日のことに若寡婦は、兩親に打向ひ、委細の事情を明らかに述べまして、身の暇を請ひました。

兼て得心の上ながらも、それと聞いては兩親も、今更中々名殘可惜く「さては左樣か名殘惜しい。けれども未だ左樣云ふ譯ならば、一旦別れても同じ村内のことゆゑに、何時でも顏を見られるのが切てもの喜びぢや。生涯こゝの嫁女だと思ふたに、計らず悴が逝つたので、餘儀無く此んな事には成つたが、內情は矢張これ迄通りぞ、其方に事あれば此方が往く、此方にまた事あらば、其方が何うか來て下され」

「何うか何分これ迄通りに、宜しく御願ひ申します。一旦御暇は頂きましても、毎日一度は必らず此の子を伴れまして、お兩方さまの御機嫌を伺ひ

ます」

「そればかりが樂みぢや。此方も往きます煩いはど。孫を何分賴みます。これは忰が形見の紀念、僅ばかりの物ながら、何うか取つておいて下され、長々御世話に成りました。切めては家の次男めが、最う四つ五つも年取つて居れば、また所存もあるなれど、浮世は何も心に任かせぬ。婆さま殘念なことぢやのう」

舅が泣げば姑も、倶音に泣いて名殘を惜む。これも偏にお松が不斷の心意氣の優しい爲でございます。

亡夫の紀念として、田畑合せて三反ほど、情ある舅に貰つて、生家に歸つて來ましたお松は、姉の所有の田畑と相合して、母に孝養を尽しつゝ、我が子他の子の區別無く、二人の雅兒を撫恤る傍ら、姉のお杉に力を合せて、六反ばかりの我が物を耕し作るは、また世の人の虛然として居る間に埒をあけ、餘る月日は他の爲に傭はれて、その賃錢にて優に一家の生活を立てつゝ、我が田地より得る年々の收獲米十餘俵、並びに麥粟その他も總て金にして、辛抱に貯へゆくこと十餘年、たゞ一年として怠らず、一人の母に奉ずる外は、成る可く費用を儉約して、利殖の方を講じた結果は、忽ち見えて十餘年の後には、貳千圓以上の資産を得たと申します。

二人の寡婦はこれを見て、一方ならず打喜び、貳千圓の金はその儘確たる銀行に預けおき、また新に前の法に依つて、十年餘の年月を送つた結果は、前にも增した額を貯め得て、前後の物を合計しては、六千有餘を二人は得たのでございました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

この間に一ッの不幸はございましたが――爾來十五年目に、母はこの上も無く滿足して死にました――その外には二人とも、加之ならず二人の子供も、皆息災にて過し得たるばかりで無く、二人の子供も最早十分人一人前の者に成りましたので、一家四人は樣々の方法に依つて、金の利殖を計る中、この家の財產は次第々々に增し加はり、お杉が子息の東吉と云ふが、その年二十五歳にして、お松が娘お糸と云ふのと、目出たく夫婦に成つた頃には、彼此合して壹萬圓餘の身代に成つて居つたと申しますが、今から指屈り數ふれば、それも早十年前の昔語に成りまして、今日この家の財產は、その額殆んど參萬餘圓、土地の地持また勉强にして、一家最も和合せる、模範的家族として、同地方の人々に尊敬せられて居りまする。而して二人の良く力めた老寡婦は、最早何れもその齡六十歳に達せんとしながらも、まだ〳〵何方も健康にて、鍬鎌取つても若者に讓らず、世に在る限りは世に盡くし、家に盡くし、子に盡くし、即ち國家に盡くしつゝ、孫を愛して、身の後世安樂を願ふの傍ら、世の中の慈善事業に骨折つて居るとは誠に感心な二人の行狀、男勝の女とは、おそらく斯樣な人々でございませう　（をはり）

傳通院夫人と樂山殿

文學士　小林雨塔

東京小石川なる安藤坂を上り果てゝ、正面を望めば、朱門巍々として南面せる一大寺院を見るべし、これ有名なる傳通院にして、今余の語らむとする傳進院夫人水野氏の魂魄長へに眠る所あり。傳通院夫人は江戸幕府の開祖德川家康の生母な

ること周ねく人の知れる所なるべし、夫人名は阿大三州苅谷の城主水野右衞門太夫忠政の女なり。余熟々當時に於ける夫人の境遇を察するに、實に亂世の慘さ、果敢なき女子の身の悲しさには、あはれ何むべき婦人の貞操殊には天下何物にも換へ難き夫、子に對する愛情など、全く父兄の家を保ち國を治むる政畧の犧牲に供せられ、婦人其人の行動の自由など、露ほどだに認められざりし當代女性の中にも、わけて此の阿大の方の如きは儔稀れなるべし、しかも、其悲慘なる境遇幾轉變の中にも終始貞烈の心を失なはれざりしは敬すべきの至なり。今余は亂世の婦人の模型として、傳通院夫人を説くと共に、其ころ一般女子の身の如何に悲しき運命を有せしか、當時の社會はいかに婦人に對して慘酷なりしかを述べ、畏くも無限の皇恩に浴して、日夕學の業に勵み、月花の樂、さては音樂演戲の類の外、心を累はすの要なき當今の婦女子達が其社會に於ける地位は上進に就き、心頭一點感謝の念を要求し、往にし世の女性に同情の涙を濺がれんことを望まんとす。

德川家康の父は松平次郎三郎廣忠とて三州岡崎の城主なりき、これ阿大夫人の初の夫なり、そも廣忠の父清康は、其繼室として、宮の善七の女を娶れり。この人初め苅屋の城主水野右衞門太夫忠政に嫁し、藤次郎、惣兵衞の二人を生みぬ、傳通院夫人は右の忠政の女なれども、別腹なり、廣忠も清康の庶出なり、されば廣忠と傳通院夫人は世に云ふ行逢の兄弟なり。清康の夫人宮野氏は後又出で、菅沼氏に嫁しぬ。此く當時の婦人の再嫁三嫁を敢てするは、思ふに女性の情として、心に喜ぶ所にはあらざるべきも、諸方に割據せる大小名の政治上の勢力衝突するまゝに、時々變り行く

形勢の爲め、父兄保國の政略の犧牲となり了りし一端の事例と見るべきのみ、

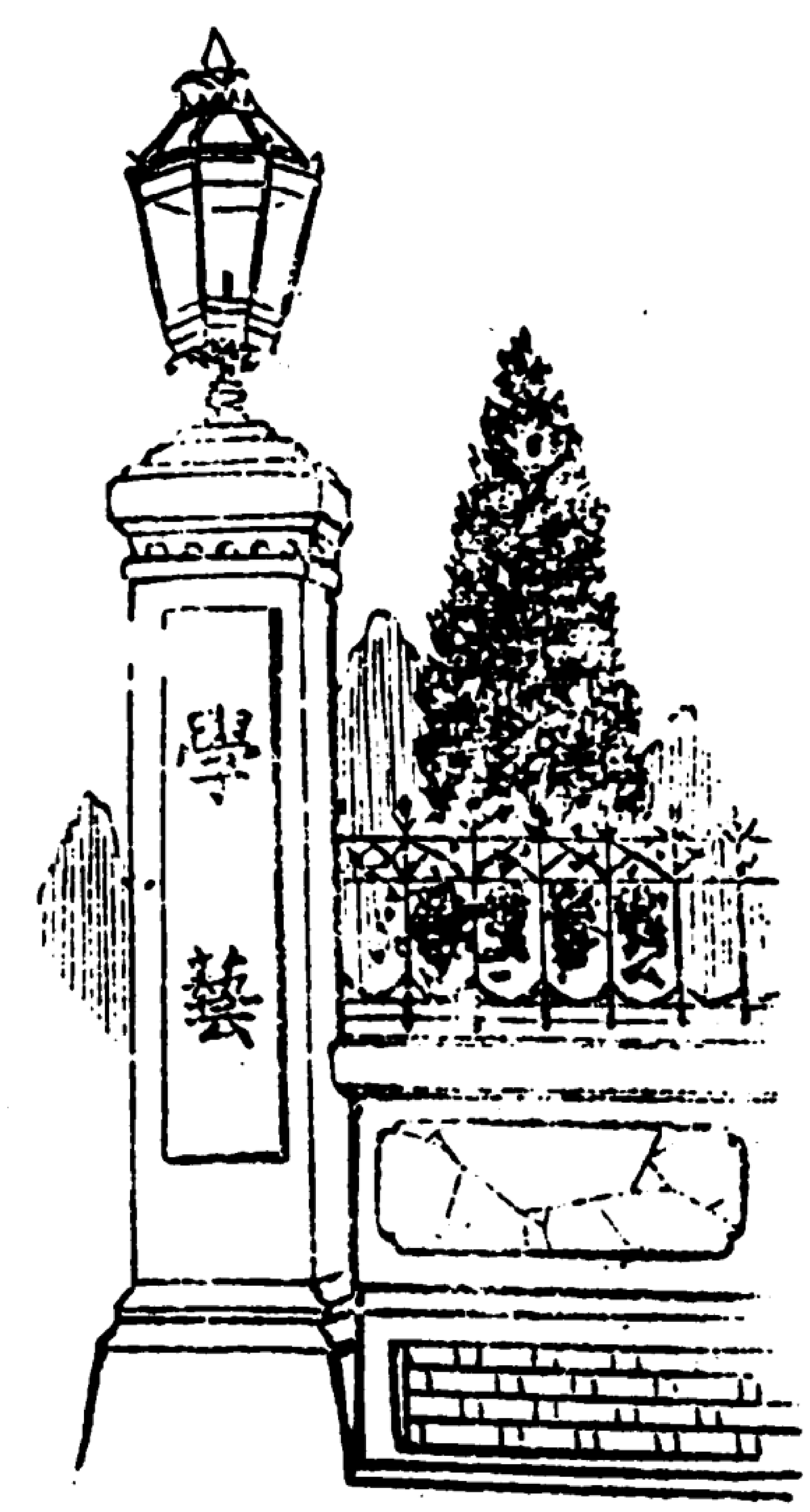
傳通院夫人廣忠に嫁して竹千代(後の家康)を生めり。然るに其比廣忠は東隣の强國今川氏の幕下なり。夫人の父忠政は既に身まかりて、兄下野守信元家を繼ぎしが、信元は三河西隣の雄國織田氏の附庸となれり。あはれ今川織田二氏の勢力は、衝突して、岡崎松平氏の家庭に、一大内訌を起しぬ。廣忠は幼時より、其恩蔭の下にありし今川氏に對し、武士の意氣として、恩愛の絆を絕たざるを得ず、是に於て夫人は悲しき破鏡の嘆あるに至れり。夫人今年漸く三才なる愛兒竹千代を後に殘し置きて琴瑟相和せざるにもあらぬ夫廣忠の下を辭して、冷酷なる兄信元の家に歸り行くその胸中察するに堪へたり。時に天文十三年、岡崎よりは金田與三左衛門正房及び淺羽十内の二人家臣十余人を率ゐ、夫人の輿を護して行く、岡崎苅屋兩領の境に到りしとき、夫人護衛の人に向ひ、皆々此所より罷り歸るべし、見送苦勞に存ずるとありしに、金田等、殿樣(廣忠を云ふ)の御申付なれば是非苅屋迄御供申さすではと申す、夫人更に云はるゝ樣兄下野守はたゞならぬ短氣の人なれば、苅屋迄赴けば皆々打殺されぬべし、さなくとも髮を削りて追放の目に遇ふは知れし事なり。妾は過世つたなくて夫に距られ歸り行くとも、竹千代を岡崎に殘し行けば、今汝等の命を失なはせては、後來竹千代伯父下野を怨みぬべし、唯歸り候へと、何と其言葉の情深かく心ばへの美しきことよ

緣絕えにし夫の家を思ひ、かなしと思へる兒竹千代を憐み、固より兄信元とて好みて岡崎と爭ふにもあらず、各附屬せる主將の勢に驅られて、岡崎と絕ちしなれば、竹千代の盡きぬ怨を信元に

懐かしむるもよしなき事なりとて、又兄の家を慮るは、いとも深かき思慮ありと云ふべし、岡崎苅屋両家の間にはさまれて夫人の苦心せること、讀む人同情の涙は出で來ぬにや、されば岡崎の家臣もいなみがたくて、苅屋領の百姓を呼出し、夫人の輿をかゝせ遣りて後、岡崎に歸るまねして、林の中に入り、少し休みて窺へば、苅屋より侍三百騎迎に來り、皆々下馬して、岡崎より侍共來らば討取れと主公の命ありとて、羽織をぬげば、皆下に具足を着込み居れり、夫人送の者は早く返しやりたりとありしに、詮方なく夫人を護し歸り行けり。金田等之をぬすみきゝて命からから岡崎に逃れ歸りしとかや、夫人の遠慮に彼等は命を保つを得たりと云ふべし。

夫人大歸して後更に織田氏の部下なる久松佐渡守に再嫁しぬ、貞女二夫に見へずとは、當時の婦人とて理想とせざるにはあらねど、又兄の嚴命妹として默止し難かりしなるべし。夫人久松氏に嫁して數子あり、舊伊豫松山藩今治藩の久松氏は其後なり。

（未完）



國文學講義

紫式部日記講義（四十二）

井上頼文

たいふの命婦は、からぎぬは、てもふ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れず、もを、しろかねのでいして、いとあざやかに、おほうみにすりたるこそ、けちえんならぬものから、めやすけれ。辨内侍の、もに、しろかねのすはま、鶴をたてたるしさま、めづらし。ぬひものも、松がえの、よはひを、あらそはせたる、心ばへ、かどかどし。少將のおもとの、これらにはおとりたる、しろかねのはくを、ひと〳〵つきしろふ。少將のおもとゝいふは、しなののかみ、すけみつがいもうと、とののふる人なり。その夜の、御前のありさまの、いと、人に見せまほしければ、よゐのそうのさふらふ、御びやうぶをおしあけて、「この世には、かうめでたきこと、また、え見給はじ」と、いひ侍りしかば、「あなかしこ〳〵」ほんぞんをばおきて、てをおしすりてぞ、よろこび侍りし。

釋義

たいふの命婦　たいふは、大夫にて、女房の、めし名、命婦は五位、の位をもてる女官をよぶ稱なり○てもふれず　手も觸れずとは、唐衣を物づきがましく、飾りなどもせぬをいふ○しろがねのでい　銀泥なり、銀泥とは、銀箔を水にて溶したるもの○あざやかに　鮮明になり○おほうみにすりたる　大洋のさまをうつして、裳に摺りたるなり　けちえん　掲焉の字音にて、目に

たつほど華美なる意〇ものから　こゝは、もの
ながらの意〇めやすし　見にくからぬ義〇しろ
がねのすはま　銀泥にて、洲濱の景色を書にか
きたるなり、州濱のことは、上にいへり〇鶴をた
てたる　鶴を書にかゝせたるをいふ〇しさま
仕方の意〇ぬひもの　いろ〳〵の糸を以てさ
ま〴〵のすがたを縫ひいだしたるものゝ稱〇松が
え　糸を以て縫ひ取りたる松の枝のかたち〇よ
はひをあらそはせたる　齢を競爭せしめたる意
り、銀泥を以て書にかきたる鶴と、糸を以て縫ひ
とりになしたる松とを對にしたればなり。鶴も松
も共にめでたく、長壽のものと、いひならはしたれ
ば、その壽命に、優劣なくならびたる故に、あら
そはせたるとはいへるなり〇心ばへ　こゝは、
用意といふほどの意〇かど〳〵し　かどは、怜
悧、才智などいふに當る語にて、こゝは、チエガ

アルラシイ取り合せ方ぞとカンシンせるさまをい
へり〇おめと　上にいへり〇これらにはおとり
たる　前の女房たちの、美しき裝束にはおよば
ぬをいふ〇しろがねのはくを　銀の箔をなり。
この下に、拙く見苦しく摺りたる、などいふ文字
を入れて心得べし〇ひと〴〵つきしろふ
箔のおし方の、見苦しきを見て、人々が互に、つ
ゝき合ひて笑ひたりとの意〇ふる人　道長公の
邸に、年久しく仕へて居る人の意〇その夜　九
月十五日の夜にて、すなはち、五夜の御祝をなし給
ふ夜なり〇見せまほし　見せタシとの意〇よゐ
のそう　夜居の僧とは、夜の御殿につめて居る
御持僧なり。惡魔などのおそひ來ぬためとて、夜
御加持などする僧〇この世には云々え見え給は
じ　式部の僧に問ひかけたる詞なり　此の世
とは、現世のこと　かうは、カヤウにの意〇

めでたきは、愛痛きにて、メヅべキ事ノ、スグレテ甚シキ意　また、え見給はじ　二度と、御覧ナサル事はデキマスマイとの意なり○あなかしこく　僧が式部に對しての詞なり　あなは、俗に、アラ、といふに同じく、物に感じたる時、思はず、知らず發する詞、かしこは　恐れつゝしむべきことにて、こゝは、俗にモッタイナイなどいふにわたる○と　こゝの　と　の字は、といひての意なり○ほんぞん　本尊にて、僧の主人公として、禮拜すべき佛像をいふ○おきて　本尊は、禮拜せすしての意にて、俗に、ソッチノケニシテといふに當る、かゝる僧侶は、昔も今も多からん、されど、此の僧のごとく正直に答へたるは、無邪氣にて、罪なし、殊勝げに水晶の珠數つまぐり、目を半眼にひらきて尊とげに、もてなしながら、心中には、賽錢や、布施の勘定ばかりなす僧徒こそかへりて罪ふかけれ

譯解

大夫の命婦といふ女房は、唐衣の方には手をもつけず、飾りもせざるが、裳をば、銀泥にて、最も鮮明に、大海の景色をうつして、みごとに摺りいだしたるが、華美にはあらぬものながら、上品にて、見つきよろし。

また、辨の内侍といふ女房の着たる裳には、銀泥にて畵にかきたる、洲濱の景色に、鶴をかゝせたる仕方は、めづらしく見ゆ、

そのうへ、ぬひものゝ松か枝の、千代もかはらぬといふこゝろばへと、銀泥の鶴の、千代の、齢とをくらべ合せたる、意匠は、怜悧き工夫といふべし。

少將の御許といふ女房たちのには劣りたる、銀泥を以て、見苦しく摺りたるを人々見て、つゝき合

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ひて笑ふ。
この少將の御許といふ女房は、信濃の守、すけみつといふ人の妹にて、この御殿に年古く仕へ居る人なり。
その五夜の、御前のありさまの、キツウ人に見せたければ、夜居の僧の伺候せる、御屛風を、押し開けて、
　此の世の中には、かやうな、リツパな事は、又、二度と見給ふことは出來まじ
といひじめば、
夜居の僧は、たゞ頭をのばし
　アラ、モツタイナ〳〵
と、いひて、禮拜すべき本尊をば、ソツチノケニシテ、御前の御ありさま、女房の今日を晴れと、着飾りなる姿など見て、手を擦りて、悅び居たり。

通俗土佐日記（第三）

廣島商業學校教諭　兒玉彌三郎

廿六日、尙ほ守の館にて、主人罵りて、男等までにも物被げたり、詩、聲揚げて言ひけり、和歌、主人も客もこと人も言ひ合へりけり、詩は之れには書かず、和歌、主人の守の讀めりける、
　都出でゝ、君に逢はんと來しものを
　來し甲斐もなく別れぬるかな
となんありければ、歸る前の守の詠める、
　白布の浪路を遠く徃き通ひて我に
　似べきは誰ならなくに、
こと人々のもありけれど、賢しきも無

かるべし、兎角言ひて、前の守も今のも、諸共に下りて、今の主人も前のも、手取り交はして、酔言に、心よげなる言して出でにけり、

○尚は　とは總て違ひゆく筈のことの未だ違はずして舊の儘なるをいふ昨日だに夜明くるまで居んとは思ひ掛けざりしかば斯く書きたるなり、快からぬ樣此の文字にても明らかなり、

○守の館にて　此の詞は下に續けて見ざるを善しとす、此の下に云々の詞省かれたるなり、

○主人　とは今の守なり、罵るの解は前に出でたり、此處は被げ物の準備配布など命令せる樣をいふなり、

○男等　とは紀氏の從者なり、までといふ詞にて、紀氏並びに一族にも種々餞贈の物ありしことは自ら明白なり、

○物被げたり　物とは種々の物を束ねていふなり、被ぐとは總て下位なる人物に與ふるにて、其の賜はりたる物を頭に戴き被ぐ心にていふなり、漢文の纏頭是れなり、此の贈り物及び被げ物なども、守若し禮あらんには舟まで持たせて來たすべきを、呼び置きて斯くしたるに對しても、紀氏の心中は不平なりしなるべし、されど表面は只主人の志の郎從にまでも及べる由を喜べる體に書きたるなり、

○聲に揚げて　とは聲高に吟じたるなり、故に明亮なりしを喜びたる樣に思はせて、其の實、己れが作れる詩を聲高に吟ずるは甚だ高慢げなりと感じたるならん、昨日呼びに來らせたるを始め、被げ物の仕ざまなど、詩を高吟したるとを併せて此の守の人品を思ふべし、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○まらうど　はまれびとの音便にて稀に來る人といふ心なり、こと人とは陪宴の人をいふなり、言ひ合へりけりとは詠み交はしたるをいふ、

○詩は之れには書かず　此の儘にても聞ゆれど、斯くては詩を擯斥したること明白に見ゆるの嫌あり、定家卿書寫本には之れにえかゝずとあり、是は漢字のかたくるしきは、女なれば得書かぬが故に書きたくも心にまかせずとの心なり、穩かなる樣なり、

○都出でゝ云々　の歌本句は都を出でたる時よりの情をいひ、末句は今の情をいふ、都を出でゝ此の地に來るまでは、只紀氏に逢はんことをのみ思ひしに、今斯く別るゝことの本意なさよ、若し斯く甲斐なきことゝ知りたらんには、寧ろ初めより思はざるべき理なるに、其の理にも外れたるわざをばしつることかなと歎けるなり、

○白布の云々　の歌、白布は白妙とも書して衣といふ詞の枕詞に用ゐれど、此處のは浪の白きに縁を持たせたるなり、浪路を遠く往きかひてとは都より遙々土佐に來りて復た都に歸るをいふなり、萬葉集には徃反をゆきかひと讀ませたり、我に似べきは誰ならなくにとは、我に似たりといふべき人即ち浪路を遠く往き交ふことをすべき人は別人ならず貴殿なるにとの心を、自ら決せずして彼方にて判せしめんとする語路なり、

○賢しきも無かるべし　とは勝れて善き歌もあるまじの意、此の下故に書かずといふ意は自ら了せらるべし、

○前の守も今のも　今の、下守の字は上に讓りて省けるなり、

學藝

○今の主人も前のも　前の、下同じく守の字を省けり、

○酔言に　とは酔に乗じていふ言なり、平素は謹厚の人も酔へば口輕くある例にて、酔に託して少しは聞き苦しきことをいふも、酔中なればとて人も聞き許す習ひなれば、其の心持にて書きたるなるべし、

○心よげなることとして　とは平素の慎みを弛めて、種々戯れ言などいひて別れ憂きを紛らはして出たりといふなり、但し是は詞の表にて、實際は昨日呼ばれしより心よからぬこと共多かりしを、其れとなしに酔に託して言ひ晴らせしなるべし、けの字は傍より心よかるべしと察したる女の心らしく書けるなり、

廿七日、大津より浦戸を指して漕ぎ出づ、斯くある中に、(句)京にて生れたりし女子、國にて俄かに亡せしかば、此の頃の用意、急ぎを見れど、何事も言はれず、京へ歸るに、女子の無きのみぞ悲み戀ふる、在る人々も得堪へず、此の間に或る人の書きて出せる歌、

都へと思ふに物の悲しきは歸らぬものゝあればなりけり、

又或時には、

在るものと忘れつゝ尚は亡き人をいづらと問ふぞ悲しかりける、

○大津　は土佐の國府より西南一里餘に在り、浦戸は大津より南二里許國府よりは三里許にて、大洋と入海とを隔てゝ突出せる處なり、此の日始めて舟を出せるなり、

○斯くある中に　とは浦戸を指して漕ぎ行く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中にといふ意にて、是れにて句を切るべし、直ちに下の京にてに續けて見るべからず、此の一句は悲み戀ふるまでに冠らせたるなり、是れ即ち此の數日は餞送の人々に應接するなどにて、暫くも心靜まらざりしが、今漕ぎ出て舟中靜かになりたるが爲め、復た亡兒の上を思ひ出す暇ある由を思はせたるなり、

○國にて　とは勿論土佐國のことなれど、例の如く漠然と書きたるなり、

○俄かに云々　とは急症なりしなり、

○此頃の用意云々　とは上京の用意兎や角と氣を配りて營めるをいふなり、急ぎは古勤務等の字に當てゝいへり、急卒の意とせるは轉じたるなり、此處も勤務と見て急卒の意も籠れりと上田秋成の説あり、さもあるべし、

○何事も云々　とは其のいそぎに、言葉を發すべき塲合もあれど、只悲歎に沈みたる樣なるをいふ、是は紀氏夫婦の上をいふにて記者自らのことにはあらざるべし、

○京へ歸るに云々　とは京へ歸るは嬉しけれどゝいふ心なり、

○女子の無きのみぞ云々　とは國務は固とより私事も多くして、其れ等に關係しながら、心の中には此の女兒を悲むの一條のみなる由を思はせたるなり、

○在る人々も　とは紀氏の傍に在る人々をいふなり、

○得堪へず　とは紀氏夫婦の情を察し、且つ侍婢の如きは常に彼の女兒にかしづきたることとて、夫婦の悲歎に暮るゝを見て、誰も悲みに堪へざりしをいふなり、傍人すら然り、況して紀氏夫婦の情は察するに餘りあることを思はせ

たるなり、
○此の間に　とは紀氏夫婦並びに侍女までも今斯く歸京するに、獨り亡兒のみは其の員に加はらで遺骸を遠國に置きて、其の墓をだに再び見ることの難き悲みを思はせたるなり、
○或人の云々　記中舟君といへる　總て紀氏のことなれど、それすら名を匿したる程なれば、其の餘の歌皆誰とも知られぬ樣に書きたれど、多くは紀氏の歌あるべし、故に此の歌の如きも勿論紀氏の作なるべし、下の童の歌とあるも果して童のものか否か、思ふに其れ等も紀氏の作なるを書き紛らしたるなるべし、
○書きて出せる　とは涙に咽びつゝ言葉も出でざるが爲めなるべし、然らずば殊更に書きて出すの必要なし、
○都へと々々　の歌、今斯く都へ歸るは年來希望せし本意を遂げらるゝにて、只管嬉しく思ふべき筈なるに、之れに反して何ともなく物の悲しきは不審のことゝ思ふに、よく思へば下向の際には共に來れる女兒の、今は一行に加はらざるが故なりと知られたりとの意にて、亡兒の故なりとは思ひ寄らざりし樣に詠みたるなり、歸らぬといふ詞に、黄泉より歸らぬと都へ歸らぬとの兩意を含めたり、
○在るものと云々　の歌、在るとは世に存在するをいふなり、とはと思ひてなり、此の第一句は忘れつゝといへる第二句には續けずして直ちに第三句に續けて見るべし、二句は挿みたるなり、忘れつゝとは失せたることを忘れつゝといふなり、いづらは何處といふに同じ、在世の時傍に見えざりしを探すが如く何處に居るぞと問ふをいふなり、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○此の段、二首の歌を擧げたるは、此の歸京に際し、若し彼の愛兒を失へる悲みなくば如何に嬉しかるべきにと思ふ情を寄せたるなり、

といひける間に、かこの崎といふ處に、守の兄弟又こと人、此れ彼れ、酒など持て追ひ來て、磯に下り居て、別れ難きことをいふ、守の館の人々の中に、此の來たる人々ぞ心ある樣には言はれほのめく、別れ難くいひつゝ、彼の人々の口網も諸持にて、此の海邊に擔ひ出せる歌、

惜しと思ふ人や留まると葦鴨の打ち群れてこそ我は來にけれ、

といひてありければ、いと痛く感でて、行く人の詠めりける、

棹させど、底ひも知らぬ渡津海の深き心を君に見るかな、

といふ間に、楫取、物の哀も知らで、己れし、酒を喰ひつれば、早く往なんとて、潮滿ちぬ、風も吹きぬべしと噪げば、舟に乘りなんとす、此の折に、或る人々、折節につけて、唐の歌ども、時に似つかはしきいふ、又、或る人、西の國なれど甲斐歌などいふ、斯く歌ふに、船屋形の塵も散り、空行く雲も漂ひぬとぞいふなる、今宵浦戸に泊まる、藤原言實、橘季衡、こと人々、追ひ來たり。

○といひける間にとは此の亡兒の歎きにて舟の進みたりしをも覺えざりしなり、

○かこの崎は大津の南に並べる村なり、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○こと人　とは屬官の人々なるべし、此れ彼れは數人なるをいふ、
○守の館の云々　守の館中の人々必ずしも心なしといふにはあらねど、此の人々は殊に厚情なる由を示せるなり、
○言はれはのめく　とは紀氏が從者に向ひて襃め語りたるなり、前日守の館に呼ばれて往きたる時は、只同等の人々と思へりしが、今其の情の頴脫して自然と厚きを認めたるを以てなり、
○彼の人々の口網も云々　くち網といふに種々の說あり、一、口つきといふことにて海邊なれば其れを口網といふならん、二、口おもきといふが如く口に網を張りたるをいふならん、三、萬葉集に朽網山あり、此の歌衆人打ち寄りて辛うして讀み出せるを、朽網の持ち出し難きを荷ひたるに譬へたるならん、以上何れも一理あれど、下文にもろ持ちとあれば、朽網にかけて口網といへるなるべし、俗諺に人の口網にかゝるといふことあれば、其の俗諺を用ゐたるなるべし、下文にも俗諺のまゝを用ゐたる例あり、
○もろ持ち　朽網と口網とを諸持ちにせるをいふ、肴にもせんとて此の人々の網を打ちければ其れに思ひ寄せて、此の歌、口輕く讀めるを斯くいへるならん、さ程に別れを惜しと思ふにもあるまじきを、誠に深く別れ難き樣に讀みたるを口上手なりといへるなり、但し是は、此の人々の口上手なるを譏りたるにはあらで、さまで惜まるゝ程の我にはあらずとの謙遜なり、
○荷ひ出だせる　とは此の歌、人々の讀み出でたるを網に寄せていふなり、
○をしと思ふ　下に葦鴨とある緣にて、惜し

を鴛鴦にかけたりとの說は面白き樣なれど、然らずと見ても苦しかるまじ、

○あし鴨　は葦田鶴といふ類にて、常に海邊に棲むものなりとの古說確かなる樣なり、此の他味鴨との說あれど濁音ぢとじとの相違あり、又求食の反切ありとの說もあれど、是れ亦普通にあさり鴨、あさり鶴などゝはいへる例なければ從ひ難し、

○一首の意は、君は兎ても永く留まるまじとは知りながら、葦鴨の如く打ち群れて來て留めあば、暫しにても留まりもやせんと思ひて、望みを屬して斯く來れるに、其の甲斐もなきことよといふ意を含めて、專ら紀氏の德を慕ふ心の厚きを暗に思はせたるなり、

○いと痛く感でゝ　は此の歌を讀める口網に紀氏が乘せられたる樣をいふなり、其の實、此の人々の、館中にすぐれて心廣きを大に喜びたるなれど、其を直接に言ひては守の前日の不遜を咎めだてする樣にも當るを以て、覺えず此の人々の口網に乘せられて痛く愛でたるを、女の、片腹痛く思ひたる體に書きたる妙文と知るべし、

○棹させど云々　の歌、世に人心の深きはあれど、底も知られぬ程の深き心はあるまじと思ひしに、今此の人々の情深き心に接して、始めて、さる心も世にはあるものなることを知り得たりといふにて、哉の字には、斯く世に有るものを、無き樣に今まで思ひ誤まれる我が愚かさよといふ程の意を含めたり、

○早く往なん　のいなんはいきなんの省かれたるにて、早く到るべき處に到らんと思ふ心なり、楫取等が、酒を飲みし間は更に其の心もな

かりしに、己れ等飲み果てゝ今は腹滿ちたれば、出急ぎする情の輕薄あるを示せるなり、
○とては、と思ひてあり、
○潮滿ちぬ　とあるを以て見れば、今までは潮待ちがてら舟を留めたりしなるべし、
○風も吹きぬ　の風は追風のことなるべし、
○折節につけて　とは今別れんとする情につけてといふ心なり、
○甲斐歌　古今集大歌所に「甲斐が嶺をさやにも見しかけゝれなくよこほりふせるさやの中山」「甲斐が嶺をねこし山越し吹く風を人にもがもやことづてやらん」とあり、二首の中孰れを誦したるかは詳かならずされども、思ふにね越し山越しの方なるべし、
○船屋形の塵　事文類聚續集に「善歌者有二虞公一、發レ聲動二梁上塵一」とあり、舟中あれば斯くいへるなるなるべし、
○空行く雲も云々　列子湯問篇に「薛譚學二謳於秦青一、未レ窮二青之技一、自謂レ盡レ之、遂辭歸、秦青弗レ止、餞二於郊衢一、撫レ節悲歌、聲振二林木一、響遏二行雲一、薛譚乃謝求レ反、終身不二敢言一レ歸」とあり、善く謳ふを譽めたるなり、
○此の次下今宵浦戸に泊るとありて、人々に別れて舟出せることを書かざるは、潮滿ち風吹き出たる紛れに、自他共に何事をも言はで、倉皇、舟に乘じて別れたるを言外に思はせたるなり、
○藤原言實橘季衡云々　言實は前に出たり、季衡も屬官の人なるべし、言實の信ある人たることは前にあるが如し、之れに伴ひて此處まで追ひ來れる季衡あれば、言實に劣らぬ人物なるべし何の由とも書かざれど紀氏の德を慕ひてなることは明らかなり、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

和畫通信講義（第卅五回）

山崎彩峨



彩色なれば、萎れたる花は、黄色を含めし筆に、朱と少量の淡墨を附し、開きたる花は、黄色を含めし筆に、紅色を附して畫き。花瓣の裏は、黄色の量多きをよしとす。子房、果實、莖葉は、皆鮮緑色にて、ゑがくなり。

萎れたる花、開きたる花、いづれも、淡墨にて畫くものなれども、花瓣の表は、少量の濃墨を附して、畫くべし。子房、果實、莖、皆挾墨あり。葉は、淡墨を含めし筆先に、濃墨を附して畫くなり。

家庭



冬の衛生

中外醫事新報記者
治療新報記者　尼子四郎

氣管支加答兒の中にて最も重きものは小兒の第一生齒期に發する處のものにして、大人に於ては加答兒は多くは中等大の氣管支に止まれども、小兒に於ては間々極細小の氣管支所謂毛細氣管支にまで蔓延し、加之あらず更らに進むで肺胞にまで到ることあり。若し加答兒の毛細氣管支を襲ひて毛細氣管支炎を起すときは稍々高き熱（三十八度乃至三十九度稀れにはその以上に昇ることあり）を發し、呼吸數著しく增加して一分間に六十回乃至八十回となり、脉搏の數も亦增加して一分間に百二十乃至百四十至となり、肺胞內に進入する空氣の量減少するが故に呼吸困難となりて恰も努力するが如く呻吟するが如き狀を呈し、鼻翼の運動活潑となり、胸廓側方の下部は陷沒す、而して之れに加ふるに加答兒の肺胞を襲ひ加答兒性肺炎を起すときはその症候一層增劇し、小兒は初め頗る不安となるも後には稍無感覺の狀となり、血液中の酸素の量減少し且つ心臟の力衰ふるが爲に小兒の顏面幷に手は蒼白色となりて微に藍色を呈するに至る、この症は頗る危險のものにして若し小兒殊に虛弱の小兒本症に罹るときは多くは死を免か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れざるものなり、概して痲疹、百日咳等と同時に起る處の氣管支加答兒は別して毛細氣管支加答兒に陥り易き傾向あり。

　氣管支加答兒も多くは寒冷にして濕潤せる北風に遭ひて感冒するが爲に起るものにして、其他塵埃の吸入等種々の原因によりて起るとあり、而して此場合に於ける養生法は前に述べたる喉頭加答兒の養生法と大差なしと雖も、加答兒は深く胸廓内に在るが故に胸部全體に熱き日本酒、温湯或は薄荷水に浸したる「リント」を巻き、その上を亞麻仁油紙にて被ひ、次で綳帶を施す等頸部罨法の如くすべし、されとも餘り強く緊縮するときは呼吸を妨ぐるが故に注意すべし、又加答兒は一局處に止まりて廣く蔓延せざるものには胸のその部に當る處に芥子を貼るをよろしとす

　若し毛細氣管支炎の起りたるときは無論病人を靜かに床に就かしめ、室内の空氣を熱湯寧ろ五十倍の食鹽水の蒸氣を以て常に濕潤ならしむべし、その最も簡便の法は土瓶に食鹽水を容れ其蓋を取り室内にて之にを始終沸騰せしむるにあり、而して患者若し小兒なるときは成るべく身體を起立位に抱持し以て胸部の運動を容易ならしむべし、小兒を數分時間四十度乃至四十二度の熱浴に入れ、入浴中頸部及び胸部に冷水を灌漑し、以て深吸氣は促すは洵に良き手當なれども、この法は必ず醫師の監視の下に行ふべし、咳嗽を鎭むる藥品は甚だ多しといへども多くは劇藥又は毒藥なるが故に決してみだりに用ゆるべからず、間々水飴又は甘草藥を口中にて溶かすときは咳息の大に輕快することあり

　又彼の流行性に來る惡性氣管支加答兒の如く熱高くして體力衰ふるものに温浴を行ひて發汗を促

さんと欲せば所謂臥床蒸氣浴を用ゆるを可とす、之れを行ふには小便成るべくは大便をも豫め漏らし置かしめ、熱湯を容れたる五個の湯婆又は「ビール」瓶を用意し、床上に二條の大手巾を横へ、その上に大毛布を廣げ、病人を裸體としてその上に臥せしめ、冷水に浸したる手巾を以て頭部を頭巾樣に包み、冷水に浸したる大手巾を厚く折り重ねて心臟部に載せ、兩脚の外側と背部の兩側に湯婆又は「ビール」瓶一個づゝを置き、殘りの一個を足部に當て、布片を以て湯婆又は「ビール」瓶と身體との間に生ずる空隙を塞ぎ、曩に床上に廣げ置きたる毛布を以て湯婆又は「ビール」瓶と共に身體を包み、同じく曩に横へ置きたる手巾を以て輕くその上を結び、枕を以て足と臥床の間に生ずる空隙を塡め、更らに頸部より足部に至るまで蒲團を掛けて能く身體を温包し、同時に甘味枸櫞酸「リモナーデ」又は砂糖湯を多量に内服せしむべし、小兒にこの法を行ふ際は三個の湯婆を用意すれば十分なり、而してこの浴を行ふ時間は一時間或はその以上を通常とすれども虛弱者、肺病患者、心臟病者等には注意して行はざるべからず、殊に心臟部に置く處の手巾は度々變換して十分に心臟を冷さゞる可らず、又若しこの浴を行ふ際血液の頭部に多量に流れ行く模樣あるときは、冷水に浸したる手巾を頭部と項部とに當て且つ度々之れを取代ゆべく、斯くするも更らに効なき時は、斷然浴を廢すべし、而してこの浴法は一日に何回行ふべきか、又何日間續けて施すべきかはよろしく醫師に質すべし、咳嗽非常に劇くして容易に鎭靜せず、而かも胸部に疼痛あるものには水蒸氣の吸入良効あり(前記の蒸氣浴と同時に行ふべし)、その法の最も簡便なるは鐵瓶又は土瓶に湯を沸かしその蒸

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

氣を吸入するにあり、其他手巾を適宜に折り重ね、漸く指を漬け得る溫湯に浸し、少しく絞りて「フラネル」の間に挾み、十分乃至十五分間毎に交換して胸部、頸部及び背部等に分け當つれば同じく咳嗽を鎭むるの効あり、但しこの際冷水に浸したる手巾を以て頭部を頭巾樣に卷くことを忘るべからず

以上述べたる處のものは主として既に發したる喉頭加答兒幷に氣管支加答兒の養生法なれども若し加答兒を未發に防ぎ得るの法あらば之れより重寶のことなかるべし、依て左にその法を簡單に說明せむ。

此法の主旨は身體を强壯にして以て氣候に抵抗し容易に加答兒に襲はれざる樣なすにあり、日本に於ては概して小兒に衣服を重襲せしむる習癖あり、殊に良家の小兒の如きは幾枚となく溫暖の衣服を纏ひて非常に身體を暖むるを常とすれども、甚だ宜しからず、却て成るべく薄襲せしめ早くより冷水摩擦に慣習せしめ、春より秋に至るの間は成るべく素足にて步行せしめ且つ虛弱の小兒は五月より七月までは海濱にて遊ばしむべし、大人殊に老人に小兒と同一の法を行はしむるは聊か困難なるが故に寧ろ絨毛製の襯衣を着し以て感冒を防がしむるを可とす、されども若し別に有害の關係の存在せざる限りは每朝起床するや否短時間冷水を以て全身を洗滌せしめ、洗滌畢るや否直に再び床內に入りて身體を暖めしむるか或は運動を試みて身體を暖めしむべし、居室幷に寢室の換氣に注意せしむべきは勿論なれども殊に冬季に於て室內の寒冷に失するはよろしからず、居室幷に事務室の溫度は列氏寒暖計の十四度乃至十六度を適當とし、寢室は十度乃至十三度を適當とす、小兒の室

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

温は之れより一度高くせしむべし、而して室内の空氣は清潔にして煙及び塵埃等を含ましむべからず、温暖の室内に居て透風に觸るゝときは加答兒及び神經痛等を起し易し故に之れを防ぐことに注意せしむべし、又天氣温和の日には一日一回以上裸體にて室内を運動せしむべし、之れ空氣浴と稱へ近時大に賞用せらるゝ法なり。

家庭俳句（四）

内田茂文

秋冬の句のみ打續けて掲ぐるは興甚だ薄きゆゑ此回は時候には少々早いが春の句をも取雜て紹介する事としました。

◎起されて起たればこそ初鴉　　閑那

此句は第一回に紹介した梢月の朝起の句と殆ど同意味であつて文字に顯はれただけの意味で畢竟よく他の注告を容れて早く朝起きをしたればこそ初鴉を聞き得たと言ふので暗に朝寢坊を戒めた句です。

◎火を打て火にする迄の寒さ哉　　梅遊

是れは何れの家庭にも有り得べき事です、俗に言ふ夫婦掛向ひと言ふ家庭には妻君が厨の骨折も連想されます、又奉公人召使などある向きでは差し詰め下婢の役廻りであつて、漸次時候の寒氣に向ふに伴うて火を一ツ起すさへ容易に起り難き炊事向きの骨折は、實に懐手して遊び居る男子が豫想の外である、尤も此句は舊時代の吟であるから燧石にて火を拵へる樣を咏だものであるが、此頃なら上五字を「寸燐から」とでも咏み變ゆるべきものです。

◎叱るまじ我も昔は雪まるけ　　一具

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

親の子に對する情と言ふものは子を持たなければ解らぬもので、時としては夫れ自身に小兒の心にも成て見なければならぬ、賞る場合には賞め叱る時には叱らねばならぬ、又時としては小兒の擧動に同情も寄せねばならぬ場合もある、此句の如きは親自身が過去の小兒時代を回想して雪丸けをして遊びたる當年を呼び起して小兒が雪戲に同情を寄せたものです、

◎氣に入らぬ風も有うに柳かな　　青蛾

是は名高い通り句で「むつとして歸れば門の青柳が」云々など、小唄にまで作り替てもある程です、デ、總ての家庭には此句の主人公たる「柳」の心持が大々的必要なのです、夫にあれ妻にあれ親にあれ子にあれ、この柳的精神を失はなければ家庭は團欒和合して靜かに溫さと春の海の如しで、決して風波など起る憂はないのです、併しナカ〳〵然は行かぬもので此句を狂句に咏替えて「氣に入らぬ風ばかりだと柳言ひ」と云ふ川柳があるが克くも浮世の裏面を穿つたものです。

◎座配りをして並べ置く火桶かな　　佑年

誦し來つた所では別段深き意味もないが、火桶の句としては能く行屆いた句です、座配りをしてと言へば無論客にてもあるべき座敷の光景、客數に對する火桶の數など計りて秩序亂さず整然と備はりてあるに於て、如何に其主人が萬事に行屆いた人であるかをも窺はるゝのです、又斯る席に招かれた客の心持も大に愉快を感じるのです、在昔千利休が客を招いた時に七人の客に菓子が四人前しか無つたので利休は工夫して客と客との間に一人前づゝの菓子を置きて其場を取繕ふたので客は孰も其頓智に感じたと言ふ話があります、尤も是は例の客なる豊太閤が初め四人と申込で置き乍ら突

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然人數を增して、利休を困らして遣らんと言ふ串戯で暗に利休の才智を試驗たのであるが、家庭に於ける利休の樣な心掛は必要なものです、

◎寢た家の明りのぞくや松の内　　一　甫

歌骨牌であるか、雙六であるか、若しくば福引でもあるか夜に於ける、室内の春の遊びにても有う、表の方は最早や寢た如くに戸ざしある隙間から刺す明りに室内の娛樂も思はるゝ春の光景を咏だものです。

◎葱の香や客ともつかぬ小鍋立　　頂　雨

中流以下の家庭には折々見かける實景であるが、是は說明する迄もなく葱の香よりも厭ふべき芳ばしからぬ空氣が家庭に滿て居るのである、此種の家庭などが時々例の新聞紙の三面欄に素葉拔かるるのです。

挿花の話

小畑いく子

挿花の法はこれまで數回述べました通り、其形式も略、一定致して居るやうでありますが、木々なる、草とちがひ、なか／＼思ふ通りに枝が出て居りませぬ、それ故種々な變化が起るのであります、詳細なる挿方になりましては、とても文字の上には盡されませぬ故略しますが、茲に注意して置かねばなりませぬのは、其材料たる草でも木でも各〻性質を異にして居る事であります、されば斯の道を研究せんとするものはよく其天然の性質に注意すべきは前にも度々申しましたが、是れは各〻其花の特性を發揮する必要から起るので、殊に當季節などでは、挿け上げた所で、各〻の特性があらはれず、あまりによく似て其花によらなけれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ば見わけがつかないといふやうなのが往々出來ます、即茶と山茶花の如きは其一例であります、然しながら是れを山野或は庭園等に於て見まするときは、決して取りちがへる様な木ではありませぬ、が是れを挿花としては惡しくすると、前申した通り、個性の特質があらはれて居らぬ爲めに遠くより見る時は一寸見わけがつけ難き様なのが、往往諸流の會などにも見受ることがあります、それは單に木振と葉の様子とが似て居るからでもありませうが、多くは茶も、山茶花も同一の心持で其各自の特有の狀態を忘れ、自分が心中に畫く挿花の形式にのみ拘泥するからの事であります。

茶五本



茶も伊豆、日向、大隅、薩摩等の山野にはまゝ自然生のものがありまして非常に大木となりてあるといふ事でありますが、それは稀なる事でありまして一般の例證とはなりませぬ、當時行は

れ愛する茶樹はふるく唐土より舶來せるものでありて年々用途も擴がり遂に今日の如く貴賤の別なく一日も缺ぐ事の出來ぬ飲料品となりました、それのみならず、海外にも非常に多く出るさうであります、そこで栽培方も益々隆盛になりましたが其元は皆舶來種の方であります、總てさういふ風でありますから其摘葉の爲めに年年剪こみを致しますから兎角立のびたのがないやうに考へますが、決してさうでありませぬ、全體が長けの高くならぬ灌木性のものでありまして、小枝の端はうるさい程茂り、幹は全く葉があく現なもので一種洒落な所謂茶人見た樣な大に風韻のある樹であります、それ故挿花に致すにも其性質をよく辨へて、あまり根を高くせぬやうなるべく擴がるやうに、また或る部分は非常に繁ちし他は恰も葉のなき程の所などあるやうに致さねばなりませぬ、また喫茶が中古より高貴の間に大に行はれて禮式にも、まづ喫茶といふやうに珍重された爲でもありますか、または霜雪の苦に

山茶七本



出版業空前之光榮

畏多くも本書には**皇后陛下の御肖像**を精巧なるクロタイプ寫眞版にて奉寫したれば坊間に有觸れたるものと類を異にし髣髴御眞影を拜するが如く加之**土方伯御珍藏の御眞筆**（竪一尺二寸 横一尺七寸）を同伯の許を得て拜寫し**皇后陛下菅公の御詠を土方伯**に拜寫を乞ひ共に拳頭に奉戴し華族女學校學監**下田歌子女史**の序文を附し而して表紙**（坤德）**の二字は前皇太后宮太夫**杉孫七郎子**の揮毫を乞たるもの眞に弊社の光榮出版界空前の盛事なり



◎定價廿五錢◎郵稅四錢◎特製卅五錢◎

本書元篤志者間にのみ分つ目的なりしが發行を聞て頒布を希望するものの相踵くを以て遂に一般に賣捌く事となしぬ嗚呼坤德の廣大無邊なる今更ら申も畏こし四千萬同胞本書を讀んで誰か奉公の心を激勵せざらんや

學校其他公共團体より一時に十部以上御申込の時一部金貳拾錢に割引郵稅は弊社支辨可仕候

（御注文は國光書房に願上候）

發行所 東京京橋區築地二丁目 株式會社 **國光社敬白**

發賣所 東京本郷丁目 **國光書房**

細川十洲先生序文　三輪田眞佐子刀自著

女子の本分

第十二版

彩色摺表紙大和綴菊版美本全壹冊定價金廿五錢郵稅金六錢

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 電話新橋二六九三番 國光社出版部

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

總裁小松大宮妃殿下　副總裁鍋島侯爵夫人

大日本女學會發行

東京麴町區下二番町三七

をんな

第二巻第十一號發兌

毎月一回十五日發行　定價金拾五錢　全國無遞送料

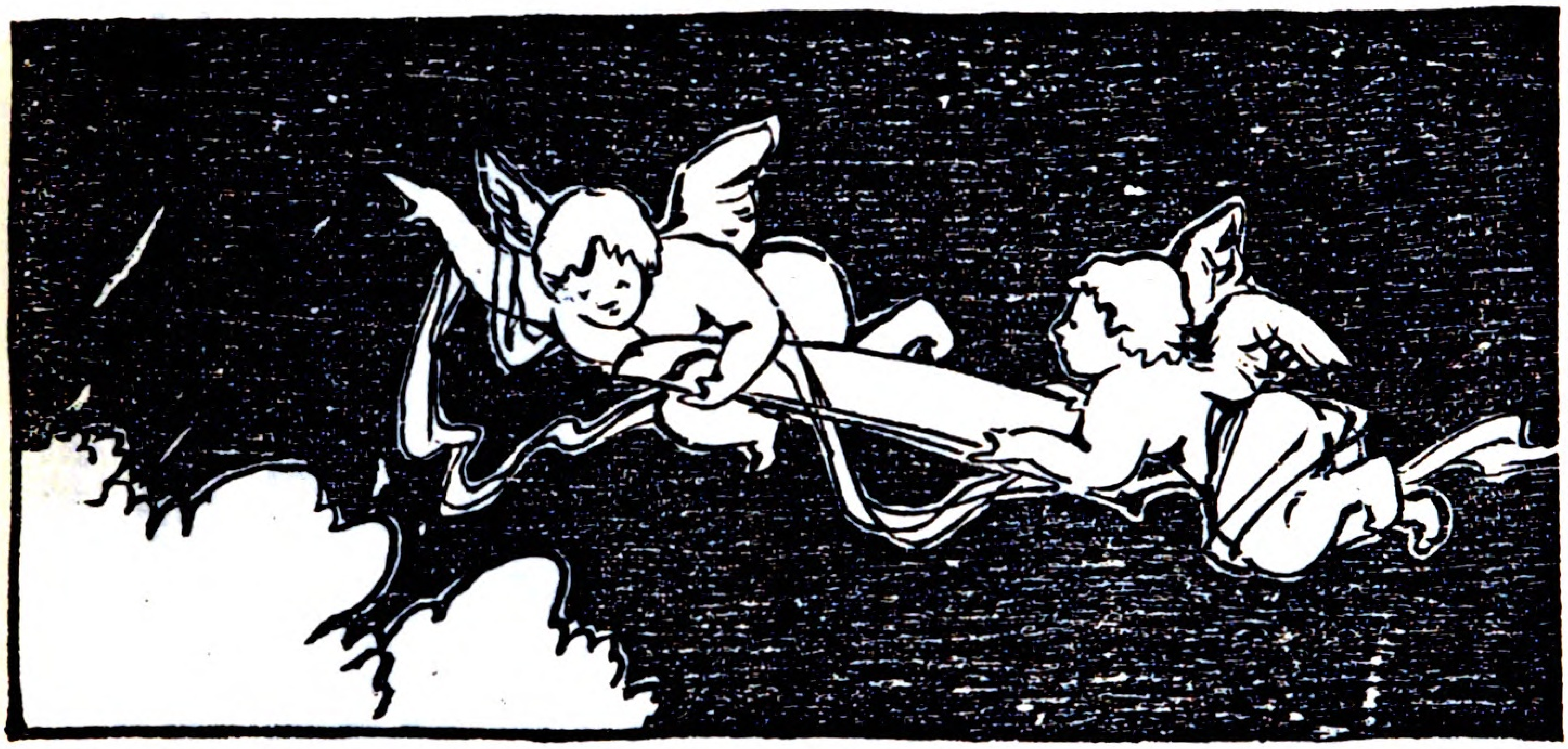
（卷首）本會賛成員三井五十子筆『新選女百人一首歌かるた』（論説）女子美術學校新築落成式祝辭、松方伯爵、佐藤醫學博士、淸浦男爵●三輪田女學校開校式祝辭、成瀨仁藏●婦人讀書會開會の辭鳩山春子●婦人の集會に就て、山澤俊夫（學藝）和書角題（今鏡・增鏡）喜田文學士●漢書解題（北齊書・周書其他六書）丸井文學士●作文批評今泉定介●作歌批評、大口鯛二●日本名媛批評（檀林皇后）下田歌子●數理に關する地理の話、上野清●秋の木の葉、服部理學士●兒童の言語（六）梅澤和軒●音樂の話（二）森しづか（修身）歐洲女德變遷史（一）本田增次郎（齊家）點茶、松浦伯爵●割烹、石井泰次郎●家計費目の割合、吳文聰●家計收支の實況（世務）法制談（犯罪及び刑罰）岡戸法學士●各地產業の實況（二十六）「甲斐絹」無海山人（詞藻）十一月五日宮中御歌會御兼題詠進●みやび會員詞藻（雜錄）刺繡（承前）木村仲子●緋の話、中村綠水●婦人論梗概（彙報）內外要報數十件

大賣捌

神田表神保町三　東京堂　神田一ッ橋通町七　有斐閣

京橋銀座四ノ一　東海堂　京橋鍋屋町六二三　北隆館

堀内新泉子著



一個の美人身は良家に生れ姿麗はしく才かしこく廣く中外の音樂を研究して其蘊奥を極めしが月下氷人の媒妁にて一個の青年と赤繩を結び、音樂の効により陰欝柔懦なる良人の心機を一轉して勇進敢爲の、丈夫となし、遂に或る一大事業を成功せしむると云ふ趣向斬新の家庭小説にて、春宵孤閨に泣くの新婦、秋夜明月に歌ふの夫妻、一面出産の歡樂、他面洋行の別離、と悲

家庭小説

女樂師

再版

喜忽ち變じ、哀樂俄に移り、讀者をして應接に暇あらざらしむ、而も主要は一家を輯睦して子孫の繁昌を圖るに歸せり、著者が家庭小説に別才あるは、大方諸君の知らせ玉ふ所、一本を座右に置かれなば、特り秋夜の幽寂を慰むるのみならで、家庭教育を裨益すること疑ひなし

壹部　價參拾五錢　郵稅六錢

發行所　東京株式會社國光社

も堪へて常盤の色をかへず發芽の盛ある所よりいひそめましたか、今に芽出度き席に挿るものゝ一となりて居ります、是は本花、低ながしに大に適して居りますがなるべく氣品高く、雅に挿す事を要します。

山茶花は茶とかはりまして至極素直に立ちのびる質でありまして、技つきなども直に葉つきと繁く優麗なる木でありまして、茶を雅客に見立てますれば、山茶花はいかにも盛裝したる温雅の美人とでも申しませうか、誠に艶なる花であります。殊に木の中で一年中最終の美花でありますから大に愛せられるのであります、また其技もとにやさしく矯もよくきゝますから、初學の人には大に適して居ります、また低なかしなどりも最よいものであります兎にも角にも優にやさしく挿す心がけが肝要であります、かへす〴〵も各其性質を失はぬやうに、山茶花に素直にのび〳〵した所が本領、茶は余り高からず技つき疎密あるやうに心がけて挿る時は決して特質を失ひ又見分がつかぬやうな事はないのであります。

椿は、また山茶花と大に趣が似て居りますから別段申す程の事もありませぬが、花、葉ともに山茶花よりは大なるものでありますから、葉一枚にても大に全體に關する樣な事がありますから、鋏を入るゝ時其邊の注意を充分要します、また枝なども、山茶花に比し太く疎に矯めるにも粘りつよき質でありますから、あまり折れる事はありませぬが、又矯めの長く保たないといふ憂があります、總てかやうな類を矯めますには或は炭火にてあぶる事もあります、または「焼ごて」を用る事もありますが、アルコールランプを用ゐます時は樹皮を多く害せずして矯めがきゝますまた此椿と申

すものは霜雪とまだ解やらぬ寒さの中に堪へて、おのが葉の下にやさしく咲き出で丶清き香を放つあど實に品格ある花で、殊に白き花を白玉椿と歌にもめでらる丶程で最も氣高く山茶花を美人と見立てたら是は佳人烈女の趣ありとも申しませうか、されば其心して挿る事が肝要であります、殊に白椿は例の玉椿の八千世までといへる古歌の意味よりか兎角吉事の席に用る慣となりて居ります、がまた此花は他の花よりも殊に落ち易い欠點がありますから、それを大に忌む事もあります。

そこで此落ち易きを防ぐには、花の中心即ち蕋の處に少量の食鹽を入れ置くもよろし。

女鑑貳百六十號の「低ながし」の部に椿の（山茶花とあるは誤）圖は出して置きましたから玆には省きます。

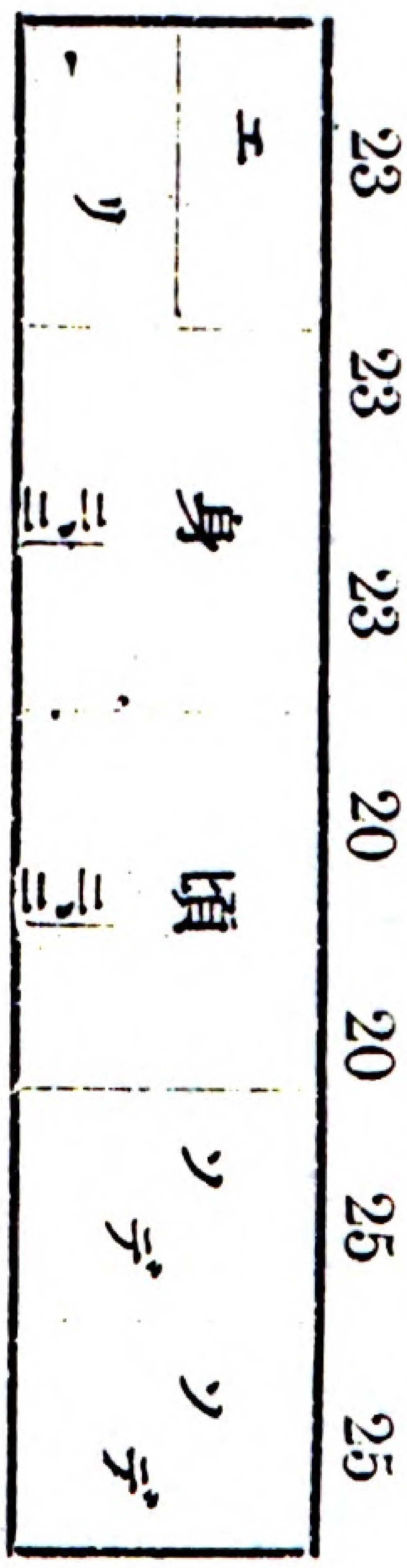
裁縫

橫濱高等女學校講師　中村むめ子

今回は本裁襦袢のお話を致しませう

巾九寸五分、長さ一丈五尺三寸の布を以て、本裁單男襦袢の裁方及び積り方

但し袖丈一尺二寸五分



153,—12,5×4—3,÷5=20,身丈

20＋3,=23,衿丈

積り方解

總尺より、袖丈の四倍と衿肩廻しの三寸とをひきます、其殘りを五で割ますと身の丈が出ます、身の丈へ衿肩廻しの三寸を加へますれば、衿丈を得

るのであります

裁方順序

先づ總尺から五尺裁ちまして、兩袖と致します、次に八尺取りまして四つ折にし、衿肩を二寸二分明けて身頃と致します、其次に殘りの二尺三寸を半巾に裁ちて中繼ぎにし、衿にするのであります、

仕立つる寸法

袖丈　一尺二寸　身丈　一尺九寸五分
後巾　八寸　前巾　七寸　抱　六寸五分
行　一尺七寸五分　肩巾　八寸五分
馬乘　三寸　衿巾　一寸六分

縫方順序

袖の表を見て、袖付けの方を五分殘して袖下を淺く縫ひます、引返して此度は裏を見て袖丈の印の處を縫まして、折は左の袖はふりを右にして、向ふに折、右の袖は自分の前に折をつけ、夫から表を出まして、袖巾の印をするのです、次に身頃は衿肩を右に持ちまして、並縫代で背を縫ひます、折は自分の方に返して下に置き、後巾と肩巾との印をつけ、馬乘の印より袖付の印まで脇を縫ひます、夫から縫込を開いて縫ひつけ、其端を身頃に綴付くるのであります、袖付は身頃と袖と四枚共に糸止めをしまして、袖の付け始めと終りは淺く上は一分の縫代で付まして、縫目は袖の方に返します、次に裾口を三分五厘の巾に、三つ折にして縫ひましたらば、前巾と抱巾の印をしまして折をつけ、衿山と背縫ひとをよく揃へて針を刺し、衿を付けまして折は衿の方に返します、次に上前を一寸長くして袢衿を掛けるのです、其次に衿巾の印をつけ衿先は一分中を縫ひまして、折は裏の方

に返します次に衿を絎けつけ正しく疊んで壓を置くのであります。

だいどころ

女子東京美術學校講師　石井湧太郎

伊勢海老
八ッ頭　甘煮
うど

◎八ッ頭

八ッ頭は皮をむきて五分方形に切り、一度水に浸し洗ひて、後湯の中に入れて茹るなり。最も茹湯は充分に多くなし、掻きまはし芋の崩れぬ樣になすべし。茹りたる芋は金の目杪子にて掬ひ取り皿に揚げ置き、さて鍋に鰹節の煎汁と砂糖、醤油味りん、をずいぶん多く合して內に芋を並べ煮るべし。芋に煮汁のよく染み渡る程文火にて一時間位煮込むべし。然して后其の煮汁に浸し置きて後用ゆべし。急ぎて用ゆる時は一時間も煮るに及ばす。

◎うど

獨活は水にて洗ひ、薄皮をむきて、小口より一寸位に切りて用ゆるか、又は亂切にしてもよし、湯にて少時煮る時は茹湯少しく靑味を持つべし。之れはあくの出るなれば、一度其の湯を捨て新に水を加へて、再び茹でべし、よく柔らかに成りたる時笊に上げ置きて后煮るなり。割合は鰹魚煮汁、醤油、砂糖、味りんをよき鹽梅に交へ少しく甘味を帶びたる方になして煮るをよしとす。

◎伊勢海老仕方

海老は成るべく大きなるを撰ふがよし、沸騰したる湯に少量の鹽を摘み入れ、此の中に右の海老を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其のまゝ入れて茹るなり。凡そ十分間程にして、其色全く赤くなりたる時取り出して頭をもぎとり(もぎ取るには其の頭に布巾を巻き付け取るべし)而して後甲を剝ぎて其の身を取り、此れを小口より四五分宛に切りて置き、さて鍋に味淋、醬油、砂糖少量を加へ之れを煮詰め、半分程に煮詰りたる時、前に切りたる海老の身を入れ、照り煮となし、芋、うどを盛りたる上に置きて出すべし。其の煮汁を煮つめる時、焦げ付かさぬ樣注意する事肝要なり。

鉢肴

鹽蒸小鯛
流球でんぶ

小鯛を其のまゝ鱗を取り、腹を明け腸を出し、ゑらを取りて水にて洗ひ、兩面に鹽を振りて腹の中にも同じく振りかけ、暫らく置きて、鹽氣の大概通りたる時を見計ひ、水にて其の鹽を洗ひ落し、蒸籠に入れて充分に蒸すべし。蒸籠の底には竹の皮を敷き、其の上に魚を並べ置くなり。蒸し上りたるを試すには、細き竹串の如きものを其の身に貫き見るべし。容易に通りたる時は好しとす。之れを崩さぬ樣に皿に盛るなり。

流球でんぶは次號に載すべし。

室外には雨雪霏々として終夜間斷なきも室内には溫袍煖火爐邊に靜座して冬の寒さを知らず茶を喫し古詩を吟じて餘念あることなし

浦人の日も夕ぐれになるみがた
かへる袖より千鳥なくなり
權大納通光



婚姻論（承前）

法學士　天野弘一

（第二）家の沿革

扨て前段に於きまして、普通家といふものゝ定義を下して家とは同一の家長の下に在る親族の結合團體であると申しました。即ち普通家と申しまするものは

第一上に同一の家長を戴くこと、
第二親族の結合團體たること、
を要するのであります。

扨て上に同一の家長を戴くといふことに就きましては、最初家長の何たるかを知らなければ御わかりになりますまいから、之は説明の便宜の爲に後まはしにして、先づ第二の親族の結合團體であるといふことから説明、いたしたいと存じます。

扨て親族の結合團體、之は果てどういふ意味かと申しまするに、其大體は既に前段に於て申述べておきしたが、之を通俗に申しますれば、所謂他人交らずのほんの内々同志の集りといふとであります。扨て然らば他人交らずとか、内々同志とかいふとは、之を精確に申せばどういふとかと申しまするに、これはちと六かしう御座りまするが、先づ第一に自分と血筋を引いて居る人々、即ち血を分け

た肉親は之を親族と申すのでありまして、父母祖父母子孫兄弟姉妹伯父母の如きは即ち其著しいものであります。それから第二に自分と連れ添ふ妻夫、これまた御互に親族と申します。それから第三に妻や夫の肉親の者、此等も亦親族といふ中にはいります。即ち親族と申しますのは以上三種の者を併せていふのであります。然し親族の結合といふたからとて、必ずしも、此三種の親族が

悉く集つて居らねはならぬといふことではありません。現に親子兄弟のない家も御坐りませう。夫婦の揃つて居らぬ家も御座りませう。甚だしきは前段の終りに申しましたるが如き身に繋累なく覊絆なく所謂三界を家と為す單身戸主の家も御座りませう。然し苟くも親あり兄弟あり夫婦ある以上は否進むで此一身の存する以上は大底皆相互に結合して以て同一の家を形作るか、さもなくば一身以て一家を爲すもので御座ります。扨て然らば

抑何故に此等の親族は相結合するに至りしか、而して何故に家なるものを形作るに至りしか、此等の問題を本段に於て申し述べたいと存じます。扨て親族の結合、此事は先程も一寸申上げましたが、凡そ親族といふもの丶中でどれが一番近しいかと申しますと、申す迄もなく血筋を分けた肉親、是程近しいものは御座りませぬ。法律では之を血族と申しまして所謂切ても切れぬ關係をもつて居るもので御座ります。

時に皆さん只今でこそ吾々は外國人と交際を結びて互に中よくつき合うて居りますが今より三十四年以前の日本を想像して御覧なさい。交際を結ぶどころでは御座りませぬ。異人と見たなら切つてしまへ殺してしまへといふ思想を國民一般にもつて居つたのであります。然らばこれは日本に許り

行はれたことかと申しますと決してさうでは御座りませぬ。現に西洋の言葉でも外國人といふ語の源は敵と云ふことだと申します。だから決して日本ばかり笑へません。只今でこそ文明開化と呼ばるゝ西洋諸國でももとは矢張り三四十年前に於ける日本の如き時代があつたので御座ります。たゞ其野蠻の觀念を日本よりも早く脫したといふに過ぎません。然しそこが西洋の西洋たる所でもうもうそんな思想は一日も早く脫してもらはなければなりません。

扨て此の如く昔はどこの國でも他國の人は一切之を敵視して居たので御座ります。殊に日本に於ては吾々が現によく知て居ることで御座ります。以上は他國の人に就て申上たので御座りますが、今もし吾々が少しく想像の度をつよくして考へてみますれば、昔むかし大昔におきましては人さへ見れば互に敵だと思て居たので御座ります。それはどこの國でもさやうでありまして、現に今でもそのあとかたの殘てをるが者でござります。即ち西洋の禮で人と挨拶をする時は必らず握手といふをする。その握手は今でこそ人に敬意を表する禮式となつたのでござりますが、昔は決して禮式どころでは御座りませぬ。無禮も無禮とんだ無禮な話であります。それはなぜかと申しまするに、昔はそれ只今申すとほり、人さへ見れば互に敵だと思て居たのでござりますから向から、知らぬ人がやつて來る、いきなり兩人で手をつかむ。まるで氣ちがひじみたはなしである野蠻人は野蠻人だけに考へて居る、それは何かと申しますと、兩人互に手を取て果して、相手が吾を刺すの短劍を有しつゝありや否やをためすのである。それかくの如く人間の野蠻時代にはまるで犬か猿のやうなものであ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つたのであります。之を要するに他國人を敵視したのはつひ近頃迄行なはれた事であつたやうに、他國人ならぬ他人を敵視するといふことは遠き昔に於ては決して無理あらぬ事柄であります。他人といふものは一切敵、之と貸借もしなければ賣買もせず、婚姻もしなければ縁組もせず、是等の行ひは一切みな血族と稱する肉親の間柄に於てのみ行はれたものであります。現に只今でも「あの人は他人でありながら親内も及ばぬ世話をして呉れる」など〻申ではありませんか。其時の他人と申しますのは、無論親族以外の人といふ意味でありまして、それらの者に對して他人といふのでござります。然し他人といふことばを嚴格に解すれば自己以外の者はみな他人たるに相違ない。之を見てもいかに親族といふものが重きをなして居るといふことがよくおわかりになるで御座りましやう。それかくの如く古代に於きましては所謂他人とは一切交通せず、結合せず、一切のことは凡て同族間に於てのみ間にあはせて居たのであります。だから妻を娶るも同族の者よりし養子をするも同性の中より撰び其他賣買、交換、貸借、贈與、何れもみな同族間に於てのみ爲したものでござります。一言にして云へは古代に於ける人類の生活は同族間にのみ限られたる共同生活であつたので御座ります。

（完結）

○婦人と訪問

土肥平次郎

◎其四十六　訪問中主婦の勸を待たずして火爐に近づき身體を温むるは不敬なれば、必ず勸を待つて後にあらざれば差控ゆるを可しとす。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◎其四十七●●●　若しも嚴冬忍び難き時節にて主婦の出で來る間斯くなしたる時は主婦の見え次第敬禮して直樣主婦と正しく向ひ座となるべし。

◎其四十八●●●　訪問を受けん爲め先方より某夜某日と期限を定めたる時は、其の約を違ひ他日を以て訪問するは常禮にあらず、特に差し當りたる急用出來するにあざれば必ず約を履んで違ふと有るべからず。

◎其四十九●●●　自分引籠中見舞の書狀を賜はり或は見舞の訪問を賜はりたる人々に對しては、全快次第必ず此方より訪問して答禮を爲すべし。

◎其五十●●●　知人より不幸の報知ある時は直に悔の印を送り一週間後親ら訪問して追悼の誠を述ぶべし。



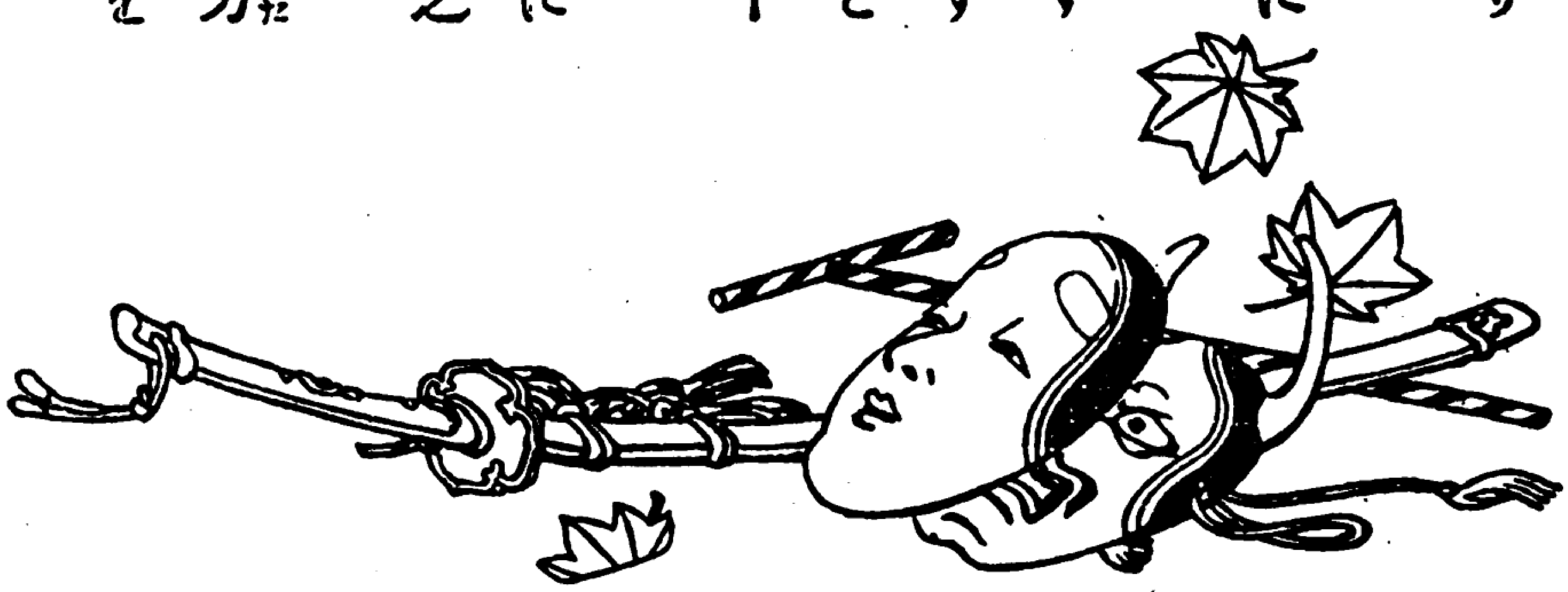
◎其五十一●●●　喪中に在つて社會の人と相混ずる能はざる時は、其の意味を示せる喪中の名刺を送るべし。

◎其五十二●●●　何等の場合に於ても訪問には必ず名刺を所持するを可とす、是れ門戸に於て從僕或は下婢に依り主婦に通じて來訪の意を告るに、我が姓名を誤聞さるゝの憂なく、且又た主婦不在なる時は之を殘して訪問の印となし得るの便あれば也。

◎其五十三●●●　訪問せんと欲する人に、旅亭又は居間にて面會せんとせば、先づ小使に名刺を出して接待所に待ち合すべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◎其五十四　二人以上の婦人ある家内を訪問するときは、名刺の一隅を裏へ折り返し出すべし。
註に曰く　是れ其の訪問の一家一同に係るの意味を示すの法なり。
◎其五十五　紋日節句等に主婦を訪問する際他の訪問人少うして、懇話上猶豫するに便宜あれば敢て急ぎ辭するを不可とせざるも、之に反するときは十分乃至十五分にして成るべく立ち去るを可とす。
◎其五十六　新年の儀式的訪問は男子に後れ元旦を過ぎ二日或は三日間を以て之を爲すべし。
◎其五十七　尋常一様の勸にては主婦方に逗留せざるを可とす。（重に遠方の人を訪問する場合）



註に曰く　世間往々にして所謂るお世辭に老たる人あり、偶々遠來の客に對し應答甚だ慇懃にして、接遇の情切なるを示さん爲め殊更に四五日、逗留せられよ抔勸むるあれど直に其の言に甘えて滯留するあらば、縱令僅少の日數にても、主人は却つて斟酌をなし迷惑する事なしとも限らねば、特に最初より其の積りにて招待を受けたる場合の外は、先づ必ず別に適當なる旅宿を求め、然る後其の客舍より主婦を訪問する樣にし、其上强て斯く勸めらるゝ時は始めて、旅宿を引き拂うて主婦方の厄介を受くる如く心掛けざる可らず。
◎其五十八　遠方の人を訪問する場合には（前に說きたる心得の外）尙ほ約したる

日の何時頃汽車或は他の便に依つて錦地に到着すべしとの旨を通知するを要す。

註に曰く　主人方の親切として、往々停車場或は其の他に待ち受け其の來着を祝するは遠來の客を待つ禮なれば、其の志を空うせしめざらんが爲め也。

◎其五十九　豫め報知せずして遠方の人を訪問する時は、必ず如何に勸めらるゝも三日内外多くも一週間を越へ逗留すべからず。

◎其六十　訪問の際主婦及び主婦の家族より仕向けられたる待遇は、快く之を受くるは勿論なれど、若し勸に應じ逗留などする塲合には總て其の家風を崩さず、食時又は消燈刻限など一切其の家掟に基き進退するを忘るべからず。

◎其六十一　勸に依り愈々逗留する時は豫め日數を述べ置くべし。

註に曰く　主人方にて己れを待遇するに順序都合なしとも限らざればなり。

◎其六十二　主人夫妻又は家族の前にて他より到來せる書狀或は其の他の書類等を受け之を讀んとする時は、一應居合ふ人に對して挨拶したる後閲覽すべし。

◎其六十三　逗留中己れに屬する物件を整理するには、必ず自身に手を下して決して主人の家族を煩すべからず。

◎其六十四　厄介をかけたる主家に對する答禮は總て其の訪問の紀念として、長く後年に殘るべき者を送呈するを上とす。

◎其六十五　主人方に逗留中自分用向にて外出せんとする時は、主人が自身の業務に從事し閑暇なき時を見計ひて爲すべし。

女子服飾の沿革（十七）

上地信成

此時代垂髪は上下共に行はれ居まして、結髪の風は全く絶えたのである、併しながら、下賤の者は勞働するに、大豫不便なものであるから、其間丈けは髪を束ねて居たのであります、其方法は只便宜の爲め、少しい間邪魔にならぬ樣にするのが主意でありますから、頭に巻き上げ、耳にはさみ或はワサに作りなどして一定の結び方はなかつたのであります。

又宮中に仕へて居る女官の方でも其他の高貴人でも、時には束ねて居た圖も間々傳はつて居ますが、これは前申した樣に、何か仕事をして居る時と思へは差支へありません、

併し「榮花物語吹上の巻に、女は髪上げて、唐衣



賤女結髪之圖

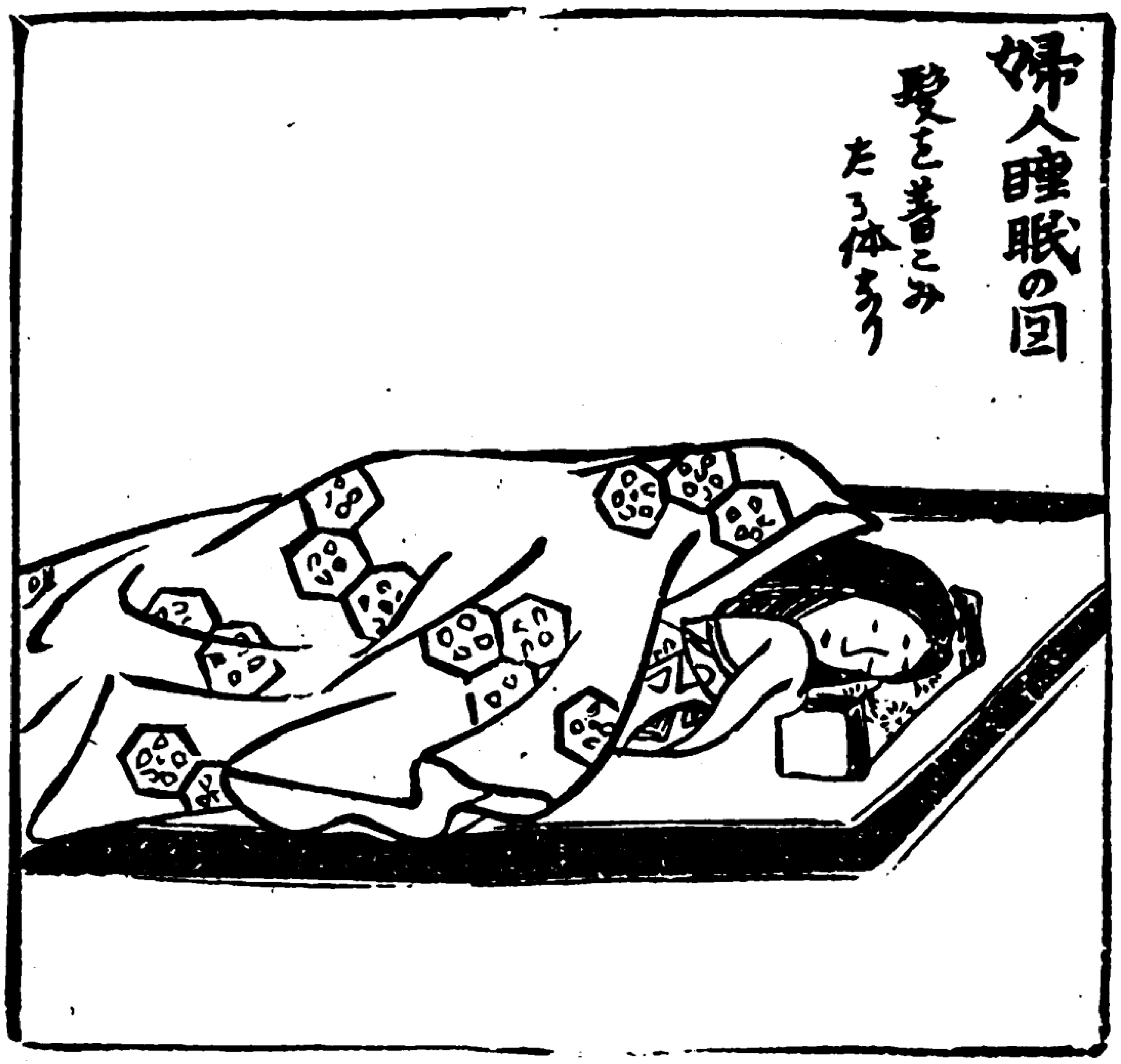
きではお前に出でず」結髮と云ふことが、見えて居るでこれはいかにも、不審でありますが、同じ物語の内にも「おまへに出づるには皆すべらかしなり」と見え、又落窪物語にもわこぎが一人していそがしさには髮を卷きわげ業するに、主の前へ出るにかき下して云づゝと云ふ事がかいてある、又此常時の物語何れを見ても、以上一例の外は、御前に出る時、殊に髮上げした例はありませぬ、只主上の御陪膳にあづかる人達は、垂髮を結ひ上げて櫛をもさす事がある、此の例は枕草子におもの丶折になりて、御髮あげまゐりてと見た、此外紫式部日記を始め、當時の物語には澤山見えて居ります、此事は御膳を仕るに、垂髮では御膳の具に、髮の毛がか丶つて、けがすことがあるから之を、憚かつて、御膳の時は必ず結髮することゝ定めてありました、併しこれとて、御膳の事がすめば、元の如く垂髮にして居たのであります上に申しました榮花物語の文は御陪膳の時の事を申したのではないがと私は思ひます、

今一つ申しておかねばならぬ事は、此時代髮上げと云ふ事が二樣につかつてある、一は前申しました結髮の義で、一は、後世の髮置の祝の義で、竹取物語に「此ちご養ふ程にすぐ〱とおほきになりまさる、三月ばかりになる程に、よきほどなる人になりぬれば、かみあげなど沙汰して裳きすとあるのは、即ち小兒髮置の事であります、

序に申しますが、私は先日或る女學生に、昔の官女は、夜寐る時或は厠などに行く時には、あの長い髮を、どうして居たのかど、質問されたこれは中々面白い質問であります、それで一寸此事に就て記しませう。

此事は世人も餘り注意して居なかつたと見えて、

研究した人もないので、よくはわかりませんが古き繪卷物などに依て見ますするに、大抵は小袖



の中に着込んだまゝ寢て居ます、中には髮を枕もとにわぐねて臥て居る圖もあります、平安朝の末からは、重に、打亂箱と云ふのを枕元に置き、其中にかもじを納れて寢たものであります、室町時代に、出來た女中心得書と云ふ本にも、寢ね玉ふ時は枕のもとへ打亂箱を置きそれにかもじをおくべし、枕屏風、れんだいにもかくるなり」と書いてある、枕屏風及びれんだいに掛けるのは足利時代より後の事ですが亂箱に入れるのは、平安朝以來より行はれて居たらしいのであります。

　それから厠に行く時は御附の女房が居て、垂髮をたぐねて帶の間に挾んだものであります、この事も女中心得書と云ふ本に「御隱所（厠の事也）へ御供の時はかいどりをばとかせ申し、かもじをば御帶へはさみまゐらすべし、夜ならば手燭を持て、先づ主より先へ入り、内を見まはし、其後われは遠くなく近くなく控えてよきなり」と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

書いてある、之は足利時代の事であるが、平安の時代も之とかはりはなかつたのであります。

以上は何も貴人に就ての事でありますが、中以下の者は、何れも寢る時は小袖、着込み或は卷髮にし、厠へ行く時も袖の中にたくねこみ或は今支那人がやる樣に頭に、きり〱卷きつけて居たのであります。

○ヴェスビアスの大破裂

伯父君此離に出立せられし後に、小生は殘り居りて勉學仕り居り、やがて沐浴と食事と更に僅かばかりの睡眠を食りなり候が、此頃は日々引き續きての地震有之候、然し地震はカンパニヤには平常の事なれば、只だ僅かばかりの恐怖をもち



居り候が、かの伯父君出立の夜は、驚くべき大地震有之、熟睡を醒ますのみか、臥しながら身体は一廻りせらるゝかの如くに相成候、母は直ちに小生の寢室に飛び來り候へば、小生も直ちに起き上がり、母諸共に庭に下り座を占め申候、庭と申すは直ちに海に通じ得る所に御座候、此折小生が態度は、沈着と申すべきか輕卒と申すべきかは存ぜれど、ティタス、リヒユウスの一册を携へ、庭に座しながら諳讀致すのみならず、且つ當時取りかゝり始めし同書の拔萃をも致候、(當時年廿二)かゝる處に伯父君の一友にて、暫く以前スペインより來りし者、訪れ來られ、小生と母と庭に座し、且つ書を讀み居るを見て、其不注意と其似而忍耐とを非難せられ候、されど小生は少からず此書册に熱中したるに御座候、既にして夜明の頃と相成候ひしが、日は常にも似ずしてどんよりとし、光を放つ事緩漫にて、、四方を見れば諸所の建物皆地震にて破壞せられ、世は荒涼として街巷は崩壞せられたる家屋にて埋沒せられ居候、此に於て小生は此市を逍逃すべきを第一の得策と存じ候まゝ、母共々出で行き候が、難を避けんとする市民は、既に巨大の行列を作りて走り行き申候、至る所の光景目も當てられずして、家屋の火

半は顚覆し了り、小生は此に停まりて恐怖と危險の多くを經驗致し候、小生等が運び出さしめし車も、平板なる廣野なるにもかゝはらず、猶ほ激しく動搖致し、殆んど一分時も同一の場所に安留致さず候、見渡せば海は自ら巨大の激浪を捲起し、地は海と衝きつ衝かれつ致し申候、少くとも海中の動物は、半ばは乾きたる砂上に推し上げられたる事と存候、而して一方よりは巨靈炎の息を載せて逶曲し、倏忽たる閃光は、殆んど天地も裂けるばかりの響と共に至る、其光景見るからに物凄く、閃光と共に大さを增す雲の怪狀、猶ほ更ら悸愕と畏怖の念を高め申候、此時かのスペインの　、急迫なる口調にて小生に申さるゝには、若し君の母の兄弟、即ち君の伯父君在まさば、君等を救けん事を欲し給ひ、若し玆に來り能はざるあらば、君等の爲なからんを願ふなるべし、さるにても君等は遁逃するを躊躇し給ふやと、而して小生は之れに答へて、我等は我等を救けんとし給ふ伯父君の、定かならざる救を待たざるべしと申候ひしが、此時彼は躊躇なく突進して、自らも危險の急速なる切迫を逃れられ候や、最早恐るべき雲は大地と荒海を蔽ひ了り候ひき、雲はかのカプレテラ島を包蔽し、ミセヌン岬既に凄光の閃くところとなりて此中に隱れ申候、危機



將に一髮の間に迫らんとせしかば、小生は母を激勵し、鼓舞し願ふが如く、命ずるが如き口調にて、我等は出來能ふ限り逃れざるべからざる事を申せしが、年既に老いて凋衰せし母は、逃るゝ途の險しきに苦しみ、却て死を願ひし程に候、唯だ母と生死を伴にすべしといへる小生の共にあるが爲め、已むなく小生に隨ひて參るに御座候、されば小生も、決して自己獨り生命を全うせざるべしと決心致し、老母の手を固く握りて、能ふかぎり足を早め、母を促し申候が、老母は却て小生に獨り遁れ去うべしと申候、此時灰燼は豪雨の如く墜下し來り、四邊のみ幽かに見得べき程に暗く相成り候が、顧れば來し方は、眞黑の色に包み染められ、宛も狂嵐の吹き來るが如く追ひ來り候間、小生は母に向て、吾等が全く闇に葬られて進み能はざる迄は、何處迄も遁逃すべく、若し追ひ來る闇が吾等を包まば街路に跪き、互に離散せざる樣にすべしと申候、而して我等が已むなく地に跪座したりし時は、最早夜と相成り、閉ぢ込めたる部室の燈火を搔き消したらんに似たる光景に御座候、婦女の叫聲、小兒の喚響、げに聞くに堪へざる慘況、御推察被下度候子を失ひて之れを索むる邦もあり、生涯の不幸を訴へて旻天に泣哭する徒もあり、死地を出でゝは更らに死地に入るを繰返す

情なさ、目も當てられぬとは、當時の有樣の外を出でまじと存・候、神に手を舉げて九死に一生を祈念し、果ては何處にも神なきかと呼ぶ絶望の悲鳴をなす、將に人の世とこしへに滅びて永劫の闇夜此夜より續き至るべくとも存じ候、げに過去に相成りても、追想しては轉た戰慄に堪へ申さず候、かくしてある中、・或人より報告有之て、ミセニンは陷沒して、萬有悉く炎火に燬き盡されし由申來り候が、後に其誤報なる事明白と相成候、されど一時は人皆之れを信用致して悚然と毛髮を疎立致し候、然るに間もなく、空は僅かに明るく相成候へ共、陽光は少しも見るを得ざるのみならず、却て之れを、後より追ひ來りし猛火の近づきし爲めに御座候、其光は幸に或る距離まで來りて其進行を止め候が、再び闇は吾等を蔽ひ包み、濃厚殆んど堪へ難き灰燼、時こそ來れと來れと降り來り候間、小生は直ちに母を護衞し、更に立ち上がりて我等の灰を掃ひ立とし申候、然らずんば吾等は忽ち其覆ひ冠ぶさるところとなりはつるために御座候、而して此危急瞬間に迫る關に立ち、小生が更らに絶望の嘆聲を發する事なく、却て老母等を慰めたりしは、自らも窃かに誇る所に御座候、かゝる慘憺の間に、闇は稍薄らぎ、烟か霧かの如く漸次に消ね失せ行き、始めて眞の白晝らしく相成、太陽かすかに其形を顯はしいでしが、其色は青白く候ひき、而して怯氣付きたる眼に映ずる世界は、悉く悲哀荒涼の樣を現はし、雪の如き灰にて、大地一面に被はれ居り候、されば此に再びミセヌンに回り歸るべく用意致し、其不安なる夜を希望と恐怖とに明かし候ひしが、勿論恐怖の念は胸中の大部分を占有致し居りしに御座候、何となれば地は常に動搖致し、心既に狂へる人々は、あられもなき卜占によりて慘憺たる恐れを未來に迷想致しし爲めに候、かくして小生等は思ひ設けしよりも多き種々の危險に逢遇致し候へ共、伯父君よりの報知あるまでは、不安の念相離くべくも御座無候、…………

かくしてポンペイも此時埋沒せられたのですが、聞くも恐ろしき事で御在ます、後西暦千七百七十二年、ポンペイ市は土中に發見せられて、今では內を悉く見る事の出來るようになつて居るそうだが、當時の慘況は、皆さんの想像し得る所だらうと思ひます、譯文は原文の十分の一も下手ですが、それは私の罪と致して、只だ之れによりてマルチユニツクや鳥島の罹災者に、同情をよする材料ともならば實に幸の至りです、(完)(天風譯)

掻わけてみれば月あり落葉川

婦人と赤十字（上）

一記者

赤十字社とは夙に世人の稔知する如く主として戰時の傷病者を救護するを目的とする我國最大の恤

兵團體である、が、方今婦人にして同社の事業に關係せるものを擧ぐれば大凡二種となる。一は所定の年據金を納めて社員となり此事業に盡すもの、又一は看護婦となりて同社の管掌せる救護事業の幇助をなすものと此二つである。記者は右二者の性質現狀につき讀者の參考となるべき點を大畧記して見やう。

●●●●●婦人社員の種類　之には三種の區別があつて各一定の徽章を與へられる。一ケ年金三圓以上十二圓以下を納むる者及び一時に金二十五圓を納むる者はいづれも正社員の資格を得、又特に社業に功勞ある者及び一時に金二百圓以上を寄附したるものは特別社員といふ者に推選せらるゝ掟である。尙は此他に名譽社員といふ者がある。之は主に皇族の妃殿下を推戴するものゝ如く、その人撰は皆同社の評議員にて決し相當と認めたるものに限られて居る。

●●●●●婦人社員の數　最近の調査に據れば、全國を通じて名譽社員十三名、特別社員百六十六名、正社員二萬五千三百二十五名（內舊時の贊助社員五百九十六名を含む）にて、之を合すれば目下同社の婦人社員は無慮二萬五千五百〇五名となる。然るに之を同社同季の男社員に比すればまだ其五分にも達せず、男女兩社員の數には餘程の懸隔がある。で同社では切めて其一割位まで增さうといふ目論見で近時奮つて婦人社員の勸誘を試みて居るさうだ。夫れはさる事ながら刻下講學又は慈善を目的とする社團にして二萬五千以上の婦人社員を有するものは他に類を見ない。輓近世に聞えたる愛國婦人會を始め、婦人教育會の如き、婦人衞生會の如き、福田會の如き、大日本女學會の如き、此點に於ては皆孰れも數歩を讓つて居る。故に日本婦

人の恤兵心及び慈善力を發表する機關として、現存の各社團中赤十字社は確かに首位を占むるや疑ひない、是れ記者が讀者に赤十字社を紹介するも無益にあらずと信ずる所以である。外形に於ても、實質に於ても、將た從來施行し來りたる成績に就ても。

婦人社員の府縣別　各府縣と社員との關係はいかになり居るやと見れば、人員最も多きを占むるは矢張東京にて二千三百三十八名、次は神奈川にて一千六百六十七名、次は愛媛一千四百二十九名、次は大阪一千三百四十二名、次は廣島一千〇三十七名、此等は各府縣中に在りて先づ主要なる位置を占め他は孰れも一千名にしか充たない。また外國婦人にして籍を我が國の



赤十字社に置けるものは約八十四五名あるさうである。

篤志看護婦人會　赤十字社にて養成せる普通の看護婦を紹介する前に、記者は同社の監督下に設けられある篤志看護婦人會につき一言して置きたいと思ふ、同會の主旨及び作業は同社の一般看護婦の執る所と毫も差別なきもので、目的は矢張戰時の傷病者救護を幇助するに在るのである、が、同會員と赤十字社看護婦とは全く別物であるから混同しては不可ない。語を換へて言へば、同會は看護法を研究せんとするも身赤十字社看護婦養成所に入つて修業することを能くせざる貴婦人令嬢等の爲め特に設けられたる一種の簡易

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

講習會である。從つて同會員は技倆に於ては迚も同社看護婦の類ではない。實地救護の場合には多く補助者たるに過ぎないものである。併し親族交友間に在りては屢々起死回生の妙技を試み、流石は赤十字社にて教練を積みたるお蔭なりと我も人も供に驚いたやうな實例は澤山あるさうだ。記者は本誌の讀者に向ひ咸く赤十字社看護婦たるべしとは勸めざるも、篤志看護婦人會に入つて一通り實用的看護學を講究し置くことは實際必要なるべしと思ふ。

●篤志看護婦人會の組織及現況　本會は東京に置かれ、小松宮妃殿下を總裁に戴き鍋島侯爵夫人會長となつて事務を管理して居る。又本會の外に二十餘の支會あり、大抵



赤十字社の支部を置ける各府縣の要地に設けられ、其地方に於ける有志の婦人令孃を以て之を組織し、全國の會員は今や二千五百名に達して居つて日を逐ひ益々增加するさうな。而して此等の會員は每月一二回集會を開き、看護學、救急法、繃帶術等日用缺くべからざる學術の教授を享け、且折々其地の病院抔に於て實地練習を試むこともある。かくて二ヶ年以上引續き教練を經たるものは講師の權衡を得て修業證書を授けられる。入會を望むものは會員一名の紹介あれば何時何人でも差支なく、會員は會の資金に充つる爲め十ヶ年間每月金二十錢を據出する外別段負擔といふものはないさうだ。

●篤志看護婦人會の效力　一般看護婦は勿論の事、

今日では全國看護婦の模範とまで稱せらるゝ赤十字社看護婦すらも、數年前まではどうも世人より誤解せられ、蔑如せられ、看護婦は婦人の職業として極劣等なるものとしか思はれなかつた。然るに一旦この篤志看護婦人會設立せらるゝに及び、皇族の妃殿下を始め、華族顯官富豪の夫人令孃等奮つて之に入會せるのみならず、實地勤務若くは公會出席の時の如き公然として制規の看護服を着け、其上普通看護婦の業務と等しき業務を執ることを厭はれざりしので、その結果、赤十字看護婦の品位勢力は俄かに重きを加へ、延いて赤十字以外の同業社會にも尠なからぬ恩澤を及ぼしたやうである、篤志看護婦人會が成立してより今日に至るまで、同會員が一家又は社會に與へたる効益は隨分多分なるものだ、舊例を擧げれば澤山あるが夫れは他日に讓づる。



片袖

紫泉作
橘村補

（一）

思はず家をいでぬ。

手は懐中に入れて。左の中指に差したる亡き妻が紀念の指輪、胸のあたりにひしと抱きたれば、竹の編戸開けんも物憂しとて、足にてやをら放ちやりつゝ。

門をいづれば横さに道あり、道の右なる畑は某がもの、左はわが荒畑なり、畑の畔には茶の木あまた植え並べて、右には實れる栗の黄金、彼方の灌木の野に打つゞきたり。夕暮毎に落つる日の、染けんかと思はるゝ柿の實の紅、鴉も森に塒求めんとて飛び行く。人影のかくれにしかなた、本村に入る可き道を斜に、櫟林の秋草ふみ分けて、覺束なき木がくれのかげを辿り行くも、胸に消えがたきおもひの宿ればこそ。

今入り來りし櫟林の下蔭、いつしか小暗なりゆきて、かくろひし細き道の、はては何處とも知れがたきを、高う鳴く虫の音に誘はれて、そこともなく逍遙ほどに、秋の日山松の梢に落ちて、紅の雲いつしか灰白の色に變りつ、森も林も夕暮の幕につゝまるゝ後ろべ、かすかなる燈火の影一つ、木立へだてゝ見えそめたる、わが家のあたりなり。うら悲しき秋の夕ぐれなればにや、虫の鳴音いよよ寂まさりて、何とはなしに涙はら〳〵と落ちぬ。

身は昔稚き友垣と共に茸狩しぬる小松原のほとりに佇立て。

手は猶懷に、亡き妻が紀念の指輪抱きつゝ、見上れば今宵新五の月影、木の葉まばらある林の梢にかゝれり。

野も山も、魔鬼の眠れるがごと黒きうち、我家の燈火のみぞいよゝ明るくなりまさる。あはれ、かの燈火の光冷かなる下かげに、いかに老たまひたる母の、幼けなき二人の弟妹と、わが爲に歎きを重ねつゝ、覺束なくも生活のかたの衣服縫はせ給ふらめ、かよわき身ながらも、亡せ給へる父君の名跡を續ぎて、一つ家の主人ともなり、一度は妻もてるわれの、今は安樂に母諸共、幼けなき弟をも養ふべきほどなるに、深く相愛して百世の

契を重ね、春は野の花に戯むれし蜂蝶の命、一夜南天にかゞやける星隕と見て、白露のはかなくも、朝の風にちりはてゝは、唯わりし世の面影忘られがたく、幼な兒が教の塲の務めをも辭し、今はかの亡き妻が奥城のほとりにさまよひ、限りなき涙を手向の花に濺ぎて、生活の煙日々に細り行くを救はむともせで、老ひたる母幼なき弟妹に憂目を見することの、さても我ながら罪深しや。

（二）

其處に立てるはわが妻か、わが亡き妻か、あなやなつかし、あなや冷たし、君はいつこより出で來たまひたる——さらば君は黄泉の國より迷ひてや來し、哀れ君も亦我を戀ひたまふにや、未だ蓮の臺の半に座り給はぬにや、何——あかぬ別れの歎きは運命とあきらめよとのたまふか、夫れを告むとて此國へ來れりと云ふか。君が爲に、われ心を

失なひ、老ひたる母、幼なき弟妹に憂目見せつることの罪深く、君は未だよみぢの國に迷ふとや、父にあふことすらかなはで、一人悲しむと云ふか、我に孝を盡し、家を興すことを願ふ君が心、さりとは有難き哉。何——われに君を思ふ心あらば、之より我に涙を捨てよとか、さらば黄泉なる父にも妻とし名乘り合ひ給ふとや——さらば我——暗きぬば玉の道迷ふともせず、身はいつしか君がみ墓の前に佇みて。

杉の樹立よりもれくる空の星明に、忘られがたき妻と父君のみ表は、二ツ生垣のうち露ひゝやかにぞ立せます、野の白菊自ら手向の花となりて、虫の聲こそげに看經の歌なれや。靜かなる夜のもの寂しう、袖のしめり、襟わたる風、皆黄泉のものかと思はれて、ありし父のみ姿、君が面影の眼に見ゆるも心の迷ひ、わが魂ぞ冥府なる國の蓮咲

き匂ふはとりにおこがれ行き、かくは君がみ言葉を聞きけり。ふとの想ひなり。

（三）

我はふとの想にまどひつゝも、三年前の樂しき夢に入りぬ、いざ操りかへしこむ。

若草の萠えそむる頃、我は物學ぶべく獨り都の空を望みてかしま立ちつ、いさゝかの親戚を尋ねて、暫時その家に宿かゝりせし折、わが賴り少なき身の、ともすればまどひ勝なるを、物につき熱き情をそゝがれし少女ありき、初めの程は只情ある人よと思ふものから、賴みをかけし日の經るに從ひ、親もなく兄弟とても無き獨り身の、他人の家に奉公するさへ心細さに、力とするは君のごとき雄々しき方樣なりなど言ひよらるゝにつけ、あやしき胸の



動きいや増て、はては只管乙女なつかしう、火焰は日となく夜となく燃えわたりて、我ははかなき戀夢路をたどりそめき。

或日母が病の報知に愕きさめて、故郷に歸らむとせし折は、二人は既に花下陰の蝴蝶、春の日の夢に戯むれて、秋風の吹くも知らである時なりき。又折かへしての報知に君と別れて歸るべき出發の夜、涙ながらに賜へりしは、夫人より賜はられしてふ一個の指輪、手づから我中指にさしそへたる、昔のまゝなるも悲しき極みなれや。

母の病は思ふほどにも非ざりしかど、再び都に出で玉ふなと弟妹や母の心にひかされ、心もとおくしばし看護に打暮しゝが、村長の某、亡き父と常にへだてなく行かひせ

しが、母にすゝめて村なる小學校の助教に加へられたる。力も及ばず、われは暫し袴つけて通ふ身となりけれども、彼の君より父の通りあるにつけ戀しさ慕はしさ、心は遠く都の空に飛びて、西の方をのみ眺めつゝ、雲の行衛を逐ふ亂れ心のつもりてか、人々にも問はるゝも度々、餘りの振舞、遂に母のたづね給ふ處となりて、誠を告げまつりけるを、母村長と語らひ、都なる某がり文して申し送りければ、某の夫人もいと快くうけがひ給ひやがて親元とありつゝ、我方におくり越されしは菜の花の黄なるが咲き匂ふ頃にぞありける。

二人が喜び、言ふべきほどの言の葉もなし、一年も夢の間にすぎて、歳も改まりたる秋の初め、妻はかりそめの病いよゝ重りて、あはれ綠葉の露ちりけるこそ、悲しくも、紀念の指輪永く殘して。人の命のもろきことと草の葉に結ぶ露にもたとへつべし、紅顏花のごとき乙女、夕の鐘の音にあはれ苔底の骨や、世の常理はとくよしもあれど、解けがたきはわが胸の悲しみなりけり。追慕の患ありけり。涙はこりて紅の血潮になり、流るゝ頰の痛くもやせて、力なく、村長に賴み聞え、學び舍の務めをも退きつ。今は老ひたる母に養はるゝ身となりぬ。

都の某夫人、親切なる村長、學び舍の主、いかに甲斐なう思ひ給ふらめ「言うてかへらぬ妻がと、思ひ捨てよと宣ふ母がみ言葉、無理と聽くにはあらねど、去りとて務めの物憂くて、我にもあらず君が墳墓のほとりに日々たづね來て、涙流すをとどめ得ざりし。

君が草葉の露の下よりのたまひたる言葉は、わが胸にしみたり、いでさらば、我涙を捨て、歸りて老いたる母をいたはり、幼なき弟妹を育まむ。(了)

おあさ

天聲

（三）

うら〳〵霞む春の景色も父思ふ心には眼にもとまらず、大關おあさは十四の娘、常衣に帶かたく裳裾短かく端折り、白の脚絆に白の足袋、天鵞絨の緒すげたる木履はきて、片手に　日傘を杖にとばり〳〵と、生れてから歩きしことなき路程二三里は、夢の如く來りしが、往き來ふものわれのみならず、旅刀腰にして羽織佩服まげの油にてりつく男の、後より行李兩掛にしてつゞく奴に背ながら語り來る　黒羽二重編笠眉深に兩刀の欄頭のみ見せたる武士も來る、馬追ふ男のはなうた高く荷鞍に添うて來るもあり、山駕籠に藥籠膝もとに置き、東風にとろ〳〵と夢をのせ、息杖急がせて來るもあり、背より高く笈負うて叩鐘撞木にならし、無常はこれぞと哀れの唱名、口にして來るもあり、紺褾　袢纏三尺帶に曲尺さして頸に小包を縊せし男、路傍の社など眼を注けて來るもあり。

旅馴れぬ脚は木履にたまらず、窪みに蹉き石にぐれて、鼻緒やう〳〵ゆるく、はては切れたる途端に膝頭すりむきて痛さに、鼻緒のたてかたも知るや知らずや、木履投げ出し足袋はだしに五六町歩みしが、松の梢兩側に並樹ありて風そよ〳〵通ひ、芝生清らなる處覺えず休みたくなつた、腰おろして見まはせば、彼方に杏の花咲き亂れ、一片二片雪と散る下に茅屋の廂少し見え、草鞋幾個も吊したるが眼にとまる。昨日巡禮の穿きしは、彼樣な家にてうるものかと心づき、やがて辿りつきて見れば、老嫗一人皿小鉢洗ひ居たり、言葉かくるも何となく嫌さに、軒端近くは佇立みながら雲

時思案に耽り居たるが思ひ切て、此草鞋幾許にやと問へば十六文なりといふ同じやうにかけし竹皮草履これはと問へば十二文、それではこれをと錢とらせ、汚れし泥足袋はらひもやらずはき了ひ婆のいぶかしい顏後に殘して、一心に父の事天神樣に祈誓しつゝ往きゆけば、長き春日も暮近く天の色もやう／＼淡れ、紫の雲徐にたなびき、遠山の外にまた山の姿寐たるが如く、和かき風頰を撫で、吹く末は路もせの桃の花、落らず風情も閑なり、野邊の菜花尋ねあぐみしや、迷ひ來る蝶の影、後にあとさきになる。狐のやうな犬の、何處かの背戶に、夕陽の影法師を吠えて、垣に噪ける群雀のぱつと飛びたつも哀れなり、すぎゆく街々村々、家々の炊烟わは／＼と天を罩め、朧ろに下ろす霞の幕に淡昏うなりぬ。

或村端の家に、濁の樣な甘酒を喫み、捻飴豆の棒、稲荷鮨二ツに足らぬを夕飯とも午餐とも見て飢を凌げば、嚢中は唯青錢二個餘すばかり。

日はまたく暮れ、家の内に燈見るやうなりしが、脚下いつか明く、わが身に先だつてゆく影法師にふりむけば、月に東の天高く、嬋しき顏を霞の薄絹に隔てゝおぼろの光、人の行くを送る。

江戶の都に通ふ路、晝こそ喧しくも往來はあれ、此頃世の亂れに追剝盜人の噂絶えず、此邊財布は持つて通れぬ物騷家々は戶締早く、殊には村端の松並樹寂しく春ながら麥生の上面通ひ來る野風、身に浸みて寒く、風に送られそよ／＼と忍びやかに鼻に入るえならぬ香、霞にこもりて重げに響く鐘の音、夜は何處かに哀れの種ひそむらしく、寂しさは一層。

空虛駕籠擔げてむかふより來る二人の男、話しながら來しに胸棒きて覺悟しつゝ近づきしが、我

には事なく行き過ぎたる、語るをきけば此前路に松列樹、昨宵も旅客一人剝衣れた裸體のまゝ逃げしとの事、女心の氣味わるくなりしが、父が平常の教へ、譏るは此時、武士の娘ぞときつと從容き、行くこと二三町ならで並樹の路なり、兩側土堤にて草花の茂り路をのぞく様なる松の葉越の月も思ひしにや凄みあり、剝れしは此邊かと思へば、竦として風寒きに、帶にかたくつけたる懷劍に手をかけ、如何なるもの出るとも　心には天神樣祈りながら、有るほどの勇氣をはつて行くに、仔細なかりしは神の冥助か。村に出でゝ息吐きあへず、四隣覗へば宵より程たちぬれば、村に一軒の起き居るさまなく紡績の車の音さながら夜のふくるを促して幽に聞えぬ。

何處に宿らむと定めしならず、わが眼江戸より外なく父より他なければ、唯々歩むばかりなりしを、今は一日の疲勞やう〳〵兆して、足は鐵より重く脚熱したるを、なほも堪え忍びて村の端に一點の燈火を認め、嬉しさに胸をどらしつゝ進めば、小森の中に荒れたる堂宇あるなり。今日は祭りにてもありけむ、油皿の燈柱點し、堂の中六疊敷ばかり板張に童の遊びし名殘が、草花散せしむしろ一枚、格子戸より燈光に壁の方見やれば、不動明王火焔背に負ひ劍手に持ち雙眼瞠きたるが、嚴しく坐りたまふ、兎角は躕躇ひしが、どうでも今宵わが宿はこれと定めて容易く開ける格子戸を中に入りて堅く閉め、不動の前に跪きて口の中に父の安全を祈請し、幾度か拜を重ねて廂に坐り、われとわれをば按摩して休みしが草履の裏と裏とあはせ、草花かき寄せて球となしたるを載せ、風呂敷包に前襷を重ねて包み、假寐にも頽さぬ枕のたしなみ、むしろを衾に横になりぬ。

小説

杉の梢に鳩のさゝやき月かげふかく、何の風かさやさやと音づれて、夢むすばれず。燈火何の心どや、燈柱の丁子一ッ咲きて吉事をしめせしが、程なく床に落ッるとひとしく油は盡きて火は消えぬ。

眞の暗黒なるに戸外の月も落ちたれば、眼さえて映るは父のおもかげよくてこそ來たれと聲する方に飛んでゆきたく思ふうち、終日の疲勞一時に生じ、むしろの床に草履の枕、夢の國にとわけ入りぬ。

（未完）

フレデリック大王が日常定例以外の食品に就て巨細の調査を下すの狀は大國の帝王に似ずして寧ろ下宿屋の女戸主に似たりと云ふも不可なかるべし庖人及び牡蠣一百個を購はんが爲めに四リクスダラ以上を請ふときは帝の逆鱗せること恰も將軍の一人が城砦を女帝に賣れるを聞けるが如し又た一瓶のシャンペン酒だも判然たる勅命を待たずんば之が（コーク）を脱することと能はざるなり、

マコーレー



文林

杜紅葉　　東久世通禧

うふすなの杜のもみちは染しより
新しほりくむてこゑそきこゆる

雛菊　　鍋島直大

御園生にさかり見る日も近からむ
にはのまかきの菊さきにけり

國旗　　前田利鬯

天津日のみはたかゝげて大きみの
みよをいはゝぬ民なかりけり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

瀧邊紅葉　　水野忠敬

紅葉はの千しほの色ともろともに
　くらへてや見むたきの白いと

水車　　宮地巖夫

水くるまめくりし世こそ忍はるれ
　よとの川ふねのほりくたりに

冬杜　　阪正臣

なか〳〵に冬わたゝけしひえの杜
　回りの木たちかせをへたてゝ

新井白石　　荻原巖雄

わらためしくにのひかりに驚きて
　色こそなけれこまのつかひは

藤原藤房卿　　千葉胤明

松かせはふきすさむとも藤のはな
　なとちるまてはまとはさり劔

烟草　　遠山英一

旅やかた友ともたのむけふりくさ
　つきし寢さめそ淋しかりける

屋上霜　　加藤義清

萱ふきのくちたる屋根も新らしく
　みえこそわたれ霜しろくして

垣寒草　　近衛貞子

露しけきかきねの小草かれにけり
　あはれと見しは夢のまにして

山家鳥　　柳原愛子

しづかなるわか山里もかしとりの
　かしましきよは遁れさりけり

菊盃枝　　前田朗子

ませの内のいつれをみても菊の花
　咲ぬえたなくなりにけるかな

自轉車　　南郷柳子

いつかたとさししめさねと乗人の

こゝろのまゝに回るをくるま

漁村時雨　　小池道子

舟出せむあまかこゝろも迷ふらむ
しくれの雲のかゝるなきさに

社頭杉　　松平健子

なみたてる杉の緑のしけりあひて
朱のとりゐも見えすなりぬる

初霜　　坂田泰子

今朝みれは庭のしら菊うつろひぬ
よへより霜やおきそめにけむ

水雷艇　　中村禮子

烏羽玉のやみにまきれて仇ふねを
おそへるさまのすさましき哉

外山時雨　　小川直子

遠かたのみねには雪も見えそめて
とやまのさとに時雨ふるなり

兼好法師　　河村重子

木のはしと云はるゝ身にも道の爲
つれ／＼くさは摘のこしけむ

秋夕　　下田春興

村すゝめねくらにまよふ聲さえて
夕つきはそくやなきちるなり

○夕燒雲　　ちぬを

稻刈る鎌に手もたゆく
小歌の聲もつかれたれど
秋豐かなる收獲の
車にあまる落穗かな
巣を忘れざる家鳩の
翅を收めて歸るごと

野より市より黄昏の
人は吾家に歸る哉
空花やかに夕やけて
落日は山にかくれたり
動くともなき横雲の
流るゝ方は遙かなり
天童高く薔薇色の
衣の裾をひるがへし
かへすに似たり、紅の
またゝくひまに薄るゝよ
美くしからずや西燒の
明日は天氣ぞ鎌を磨げ
旦晴れたる野に出でゝ
積上るまで稻刈らむ
夕燒小燒とうたひつゝ
遠ざかりゆく里の子も
母の腕に夢やすく
神のつくりし
村に育たむ

○鑾輿熊本市に御幸あるをむかへ奉りて

高ひかる日の大きみのいでましを
をろがみまつる今日の畏こさ　肥後　佐々小琴子

百敷の大みやいでましゝらぬ火の
つくしのみゆき拜むかしこさ　仝　佐々有隣子

此秋はやつかたり穗もゆたかなる
みゆきあほきてかしこかり兒　仝　徳永萬壽子

かしこくもこころ筑紫のかひ有て
今日のみ幸をあほくうれしさ　仝　徳永多瑠子

大君のつくしのはてにみゆきます
みよにあひつる事そうれしき　仝　徳永廣子

大君をむかへまつりてますらをか
こゝろつくしにあほぐ今日哉　仝　服部萬壽子

教の庭

大君のしこのみたてのつくしひと
なひくやみよのひかりなる覧　仝　服部充子

大君のみゆきましますつくしかた
めでたきみよにふるたみくさ　仝　野口靜子

大きみをこの浦曲にてあほぐとげ
いとどさちある民にぞ有ける　仝　黒田光子

かしこくも今日の行幸を諸ともに
おろがむみよに逢ぞうれしき　仝　赤星石子

筑紫がた大みこゝろのかしこさを
ふしてあほがぬたみ草もなし　仝　千知波橘子

天さかるひなのはてまで大きみの
み旗のひかりあほぐみよかな　仝　坂本竹子

御惠のあまねき今日のみゆきをば
八千代をかけてあほぐ民くさ　仝　坂本道子

大君のふかきめぐみのかぎりなく
國のはてまでみゆきまします　仝　德永雪枝子

○露　下田春興

白露はあしたにおきて　夕には消ゆとこそいへ
人の身もしかぞ有ける　うつそみも斯ぞ有ける
白露のはかなきことを　世の人のおもふことく
人の代のあへなきことを　白露もかこちやすらむ
あはれ人の代



教の庭

十一月廿日　題　水鳥

天　東京日本橋區濱町二十一番地　川村まつ子

夜もすからたまもの床にうきねして
うきにもなるゝいけのみづとり

評曰、調つきよくとゝのひていとめでたし

地　東京下谷區下根岸町三十三番地　椎野鋭子

さよふけて羽音もさむしみづとりの
うきねのねやや氷りそむらん

評曰、水鳥の羽音身にしむこゝちす

人

東京神田區美土代町三丁目一番地　近澤和子

霜こほるあしまにさわくみづとりは
よたゝさむさをわひてなくらん

評曰、とりたつるふしもなけれとすてかたし

甲之部

東京　早尾あさ子

をしかものうきねの池もうすらねに
とけてもねぬかこゑさえてなく

東京　戸塚てつ子

いけの面のなみもしつかにをし鳥の
羽かひかさねてゆめむすふらむ

東京　立木かず子

降かゝるおちばがふすまかさねても
たえぬよさむかみづとりのなく

大分　竹城たゝ子

みる人もなくてさむけきすみの江の
つきにうかれてみづとりのなく

東京　篠田糸子

とかまなす月かけやとすいけの面に
身をきるばかりしぎぞなくなる

横須賀　上田まさ子

もみち葉のにしきをしける床しめて
こゑのとかにもかもめなくなり

肥後　千知波橘子

てる月のかげをやどせるいけみづに
ひかりあらそふをしのつるぎ羽

東京　積山鏡子

しも氷る夜はのつきかけふけゆきて
みつおとさむくをしとりのなく

愛媛　珠川明子

なにはかた入江のあしはうらかれて
なみのよる／＼をしそなくなる

山口　田村道子

池みづのこほるしも夜はをしとりも　とけてはゆめもむすはさるらむ

乙之部

をし鳥のあそぶいけにもさゞなみの　たつやうきよのならひなるらん　秋田　三浦さわ子

風ましりあられふる夜をふしわひて　あしまにさわくみつとりのこゑ　但馬　田尻保代子

木からしの風や冴ゆらんみつとりの　夜とこれわふるこゑのきこゆる　和泉　稲原菫子

かせさえて月すむいけにみつとりの　うきねわひしくゆめむすふらむ　大阪　橋本しか子

風さゆるなきさのあしはしもかれて　なく音もさむしいけのむらとり　東京　戸賀崎治子

馬くるまゆきゝのおともきゝなれて　みほりのとりはたちもさわかす　東京　戸賀崎久子

いけの面にうかひて遊ふみつとりの　ともなつかしく見えわたるかな　東京　笹川ふき子

朝かせにたま藻のとこやこほりけん　こゑさむけくもさわくみつとり　大阪　伊勢村花子

朝日さすみきはのこほりうちとけて　むつましけにもあそふをしかな　廣島　衣笠澄子

こほりゐてみるたに寒きあさかはの　きしにたのしくをしのあそへる　伊勢　池田梅子

岩ふちにあられみたれてあさほらけ　ふくかぜさむしかもそなくなる　埼玉　横田音羽子

うらかるゝ入江のあしのかけにしも　脊おとならふるかものひとむれ　東京　片山あや子

紅葉ちるいはかきふちにうちむれて　うきなみかつくをしのひとつれ　東京　片山ふみ子

みつとりの霜のうはきをかされて　夜たくさむさになきあかすらん　栃木　脊木たま子

よをさむみしもやおくらむ住の江の　なみまにざわくみつとりのこゑ　東京　山本梓子

池のおもにもみちの舟をうかへつゝ　まとゐたのしくあそふみつとり　東京　永井さき子

なにはえのあし吹く風にゆめさめて　ともよひかはすをしかものこゑ　愛知　後藤のふ子

池みつはこほれとをしのひとつかひ　いかにこゝろのとけてねふれる　山口　田村多豆子

こからしの吹きすさふ夜もをし鳥は　つかひはなれぬうきねをそする　山口　田村米子

月かけのさえゆくまゝにみつとりの　なくおとも寒くこほるいけみつ　東京　川瀬たき子

かれわたる芦間にねむるみつとりの　ゆめおとろかす夜半のこからし　東京　北岡美代子

かれあしにしもこそさやけうきね鳥　うきねの夢もさむくやあるらん　東京　山村くら子

みきはなるをしのふすまは霜かれて　うきねのとこやさむけかるらむ　東京　北岡文子

をし鳥の羽かひのうへにつむゆきを　長崎　林くに子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はらひわひてやれにはたつらん

住の江のまつふくかせになみたちて　うきねのをしのゆめそくたくる　茨城　荒野たに子

夜もすからうき寐の床やさえぬらん　たえすしもなくいけのみつとり　三河　永井さい子

難波江のあしまのとこやこほるらん　夜ふかくさわくあちのむらとり　香川　鎌田みつゑ子

うちよする浪のおとにもなれ〳〵て　ねむれるをしのやすけなるかな　肥後　坂本美智子

池みつのふかきちきりかあさりする　をしのつかひのむつましけなる　京都　坪内りき子

うらかれし池のあしまにところえて　むれゐるかものむつましきかな　東京　椎野ぬき子

水とりのたまものとこやあれぬらん　なみこそさはけよはのあらしに　東京　黒澤松枝子

みつとりのはかせに池のなみたちて　あたりさびしきふゆのゆふくれ　東京　椎野薫子

いけみつのこほれる床にゆめさして　ひとりやをしのよはになくらん　東京　椎野秀子

さしくしのあかつき月よしもさえて　かもか音たかししのはすのいけ　伊豫　小高れい子

のりすてし小舟ましろにしもみえて　かもそなくなるあしまかくれに　東京　敷島うた子

池の面はこほりはてけむ小夜ふけて　みきはのあしまをしとりのなく　東京　林環子

をし鳥のあそふなれたくおもひけん　つふてなけゆくひともありけり　秋田　細矢なよ子

いくたひかしもうち羽ふく水とりの　こゑもさむけきふゆの夜のつき　大和　澤田よし子

けさみれは池の面しろくなみたちて　むつましげにもあそふみつとり　熊本　田代綾子

ふちむれてなつさひあそふおし鴨の　こゑもさむけししのはつのいけ　神戸　井上品子

うきくさに夢をのこしてみつとりの　さわくいりえにやとるつきかけ　長門　杉道子

こゝろして浮世はたらむみつとりの　みつかへひまのなきをおもへは　大阪　橋本ふく子

ふしかはのみなもと清きみつとりの　はをとはたかくひゞきけるかな　大阪　橋本ふさ子

朝きりのひまよりみえておきへなる　しまをかすみて飛ふはかもめか　鳥取　高崎貞子

かさねても霜のうはきやさむからん　いけになみゐるをしのおもひは　長崎　八尾いへ子

つらゝゐし池にもむつみれるをしの　こゝろはいかにあたゝかるらん　東京　戸賀崎潤子

静かなるみほりのなみのあさあけに　ほの〳〵みゆるかものひとむら　東京　高橋松江子

更ゆけはしかのうらなみおとさえて　こゑさひしくもみつとりの鳴く　札幌　山田靜子

いかにしてゆめむすふらむをし鳥の　つらゝまくらのふゆのよな〳〵　札幌　山田ふみ子

うちよする波にとなれてなにはえの　きしのあしまにうかふみつとり　大阪　伊勢村春子

いさましく見ゑにけるかな霜さゆる　大阪　大阪谷信子

敎の庭

いけのあしまにあさるおしとり

すむ月のかけもさむけきふゆの夜を　いかにはふらむいけのみつとり　大阪　大阪谷新子

をし鳥のうきねのゆめやさむからし　しものうはきを夜半にかされて　東京　大川ふく子

いさゝ川ちかくやあらんみつとりの　こゑきこゆなりたひのやとりに　相州　岩橋花子

あら海のきしになつさふとまふねの　舳さきにゆめをむすふみつとり　青森　柿崎秀子

池みづのこほりかさぬるふゆの夜に　さむけかるらんをしの羽ころも　肥後　千知波彌生子

水とりの羽かひのしもやはこふらん　さゝなみよするひろさはのいけ　肥後　佐々有隣子

水とりのうきねのとこやこほるらん　羽おともさむくかせにきこゆる　羽後　佐々小琴子

羽風にもこほるはかりのふゆの夜も　をしの夢ちやのとけかゝるらん　岐阜　佐藤蒼生子

世をすてゝ人もとひこぬやまかけの　をかはにあそふをしのひとつれ　肥後　坂本登子

おもひねのゆめみたすらむ妻こふる　をしのふすまにあられふりきて　名古屋　鈴木雅子

朝日さすいけのみぎはにをしかもの　ひとりはなれて游ふるのとけさ　埼玉　横田秋子

夜を寒みはねきるおともきこえねは　をしのこふすまこほりとつらん　東京　北島功子

あはれ世をうきねの鳥ばしはしたに　しもやすからぬおもひなるらむ　伊豫　竹村竹里子

波さわくいりにうきつしつみつゝ　身もやすらけくあそふみつとり　肥後　德永廣子

すみなれし葦もあとなくかれはてゝ　とこをたつれるかものひとつれ　肥後　德永多瑠子

池みつによをうきとりのうきしつみ　はかなきさまをひとにみすらん　肥後　德永萬壽子

夜を寒みあまかやとりのふねの火に　かもめなきよるねさめわひしも　長州　岩田章子

いけのもをうきねの床とあさゆふに　なれ〳〵しくもあそふみつとり　長門　清藤香子

池みつのこほるわひしとをしかもは　さすやあさひにとけてねふれる　山口　村上操子

見るたにもさむしとおもふ水の上を　ところ得かほのをしかものこゑ　松山　上原のぶ子

今朝見れば池のおもてもこほりゐて　みぎはにのみそかものつとへる　神奈川　田邊房子

さしくしのあかつきさむくおく霜に　あを羽も見えぬいけのみつとり　東京　山本茂子

もみちはのうかふなきさに打むれし　かものあを羽のうるはしきかな　和歌山　瀨戸榮子

さゝ波のよるもすからにわひてなく　つまなきをしのこゑのあはれさ　肥後　板井みは子

よをさむみわひてなくらん水とりの　とほさかりゆくこゑのあはれさ　肥後　坂本みよ子

みつとりのたまもの床にうきねして　うきもやすきもなみのまに〳〵　肥後　坂本菊子

ゆきかよふゝねにもなれてすみた川　肥後　坂本竹子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にほのむらとりたちもさわかす

おほゐ川いりゐによとむもみちはに　肥後　鶴永雪枝子
ましりてあそふなみのうきとり

霜さゆるうきれのとこに夜もすから　肥後　鶴永しづ枝子
なきさわくらんいけのむらとり

たちさわくあたなみもなくすみた川　埼玉　前野ふさ子
きよきなかれにあそふみつとり

なにはゐのあしまの水はこほりゐて　埼玉　前野蕗賀子
うきれのとこにれふろみつとり

佗ひすみのまくらへ近くおとつれて　備後　横山芳子
ゆめおとろかしみつ鳥なくなり

池のおもにうつろもみちのかけふみて　神奈川　森田葉留子
うきせもしらてあそふみつとり

池みづにうかひてあそふなしかもの　茨城　内田さだ子
上毛にしものおくと見ゐけり

池のへのあしまなくゝろみつとりの　東京　椎野清子
はおともさむくふくろよはかな

時のまもはなれぬなしのふすまには　和歌山　長尾小榮子
こほりもなみもへたてさろらん

よなさむみこほりそめけむ池みつに　東京　牛山棠子
なしの羽おとのたゆるまそなき

神無月時雨とゝもに神なひの
もりの木の葉はふりにこそふれ

殘菊

天

東京府下荏原郡大井村二四八邸内　三好珍子

庭も籬もあれはてゝ人はふりにし宿ならねど、さすが片山つきたる住ひには、人めも草もと、いはまほしき今日此頃、枯ふしたる千草八千草に、霜の花さへ置そへて、いとゝみる影もあくあはれなる中に、手いれもせし、たゝおのれおひなる白菊の、時しり顔なるが、露霜にきはひて千代のすがたに咲殘りたる、なか〳〵に哀ふかし。有明の月影さむく、色あせし紅紫のちりしきたる庭に、ひとり秋の色を殘して匂ふさま、又何にかたとへん。古人の霜にたへたる花しなければと、詠みけんもけにや、おきまとはせるしもにもうつろはぬは、朝日に匂櫻花よりもめでたく、其操は松にもをさ〳〵劣るましうなん。しるすもかしこし雲井の上の御しるしとあふかれつゝ、「君か千年のかさしとたゝへられ、其姿のけたかく霜置けと香の高さは詩人の心をうこかし、あるは、湊川に清き名を殘したる楠公の紋そと慕はるゝも、よくものにたへしのひたればこそなれ。

萩桔梗女郎花など姿こそなよ〳〵と麗はしうみゆれど、一度野分の風にふきみだされ、霜におひては、何の見所やあるべき。
あはれ今の世の大方の女子は、たゞに高き名をのみ得んとするか、多かめれど、よくものにたへしのびて、操正しく百草のかれにし後までも、清くうるはしき名を殘す此菊をかゞみとこそあふがまほしけれ。

評。趣巧よく整ひて首尾めで度出來たり

地

愛媛　籾山かめ子

あはれ咲き香ひたる千くさの花も、いつしか露と消えはてゝ、雨とふる木の葉に埋もれゆく庭に、さてもゆかしく咲き殘りたるよ菊の花。我はその憐れにも雄々しき心のなつかしくて、いつしか垣根に立ちよりぬ。折りしも霜月夜の更け行きて、枯れ枯れになりたる草の上を蔽へる霜の淡く淡くかすかにもれくる本家のはなし聲にあたりいとゞ寂寞たり。サット吹きくる夜嵐に思はずブル〳〵と身ぶるひしつゝ思へば憐れなるよ、この景色。流るゝ水も行く雲も樂しく榮えしその頃は土筆つみにと、とひ來し乙女もありつらむに、けたかきすみれの姿をしたひつゝ飛びきし蝶もありつらむにふけ行く秋のあはれとともに、昔の名殘あともなく、やう〳〵ふみ止まりし一輪二輪の菊も、降るさ夜しぐれに、さぞなあとなくちるならむ、あはれうたてき塵の世ににくき嵐の吹きこぬさきに已が心の向はん方へ靜に流れ行きてよと、二枝三枝咲き殘りたるを折り取りて、やがて屋側の清き小川にそと浮べやりぬ。あゝ無殘のものや、又みむ秋の初めには、この住を忘れずに、清き姿にさきいでよ、吾れは御身のまたこむ日をぞひたすらにまちつゝあるを、さらばとよ我友、今日まで日々のうさを慰めくれにし、なれの恩を今こゝにむくゆるになむ。

評。幽婉凄涼の趣愛すべし

人

東京市赤坂區青山北町三丁目六十八番地　山本梓子

何にまれ、物の終りはいとゞあはれも深くおぼゆるをさるが中にも咲ての後に花なしとか、こと國人もいみじうもてはやすめる、菊こそいはゞかたなしや。こよひしも、日ごろかきくらしたる時雨の空、いとようはれて、影すさましといひけむ冬の月、さひしき軒ばにかゝりて、みかきなしたる

光に、籬のもとをみやれは、頭にしものおきすさびつゝうろひたる物から、香はいといみしくてあるに、衣手のさむきも打わすれて、をり立なとしつゝ、めもかれす、同し心に昔の人のめでられけむ、ふるきことのは、さては後徳大寺のおとゝの霜にねつりの表きてけりと、とりなされしもをかしうて、打ずんするほとに、夜もふけぬとか、近きほとりの寺の、ねよとのかねのね、いつよりも霜にさえて聞ゆるに、おとろけは、月はた入方の空いといはむかたなく。

簡評。簡潔にして斧鑿の痕なし、

(以下原稿到着順)

長野　松澤まつ子

露霜にきほひて、千世の姿にさきにほふは」と古人も言はれけん雄々しの菊や。在五の君の秋なき時や」と愛で給ひし此叢りよ。ことに、いはまくも畏こき御あたりの、御しろしとさへさせ給ひしは、花の面目のきはみになん。此目出度根に、西に、東にひろごりて過ぎし頃我庭にも、植ゑつけてより、あけくれ心づくしのかひありて、やう〳〵あさましくなり行く庭に、にほひ出でゝ、月に露に、人の心をなぐさめしは、そも幾度ぞや。斯くて、大方は木の葉さそふ風のまに〳〵ちり行きて、今は只よもぎが中に殘れる二本の白菊の、かたへ流るゝいさゝ小川に影をうつしたる氣高き姿。其れよ、其古、小楠公がみだれたる世の中に再びひるがへし給ひし菊水の御旗にも似て己は、あまりの床しさに庭に下りたちて、暫し眺め入るにさら〳〵と音たてゝ、紅葉の我袖にちるもげになかしや。折しも庭のしをり戸押し開けて入り來給ひしは、親しき友、たけ子の君なりき。「まつ子の君よ、我亡き父君の御墓に手向まほしければ、一枝たまはりてよ」といふ。やはれやさしき友の心かな、思へば妾も世こそへだてれど遠く父君に別れまゐらせて、朝夕の奉事さへ出來得ず、雨につけ、風につけ其方の空を眺めては、人知れず袖しぼる身にしあれば、同情の淚せきあへぬを、花にかけじと、つとめつゝ、共に手折りし二枝三枝、たけ子の君の腕に移されて、一入のゑまひに、ゆらめきつゝ。あはれ白菊よ、友の亡き父君の、御爲に、如何なる榮ある討死せんとてか。あはれ〳〵今は、漸く園を守るは、只、一本の白菊のみ。空はやがて、六ツの花さへ咲き出でんばかりの氣はひなるに、操も、一きは高くおぼゆるよ。あはれ花よ、妾も、汝の如き氣高き心ばゐにてあらんには、身は遠くへだつるとも、恩愛の情は、又、遠くもあらぬ我父君もさこそ喜び給ふらんものを思へば〳〵。何處よりか胡蝶一ツ我前をかすめて、ひら〳〵と花のほとりをさまよふよと見れば、我宿顏に羽を下しぬ。

長門　岩田草子

ゆふべ〳〵におきかはる霜しげけれど、色あせず、千草なりしく野分あらけれど、花ちりもせで、やがて、人目もかれゆかむとする淋しき時に、この氣高き姿、ゆかしき薫。この花や、此花や、その撓まぬ心、犯れぬ色で、松の操もなか〳〵なれ。一日夕暮、寂しき野山をさまよひて、うつろひし女郎花抱ける、優しき野菊にあひぬ。わが村端れなる貧しき人のやれ垣には、いつも、昔、知らぬ顏に、白菊一輪ゑみぬる。唐土には、東籬のもとに菊うゑて、節を養ひける人もありしとは、幾度かやぶるゝ望に、はや、止みなんとせしわが心の恥しさよ。花てふ花、皆、一朝の野分に

跡なきを、猶、おきまさる霜にも、ふきすさぶこがらしにも、高き操を守りつゝ、匂へる菊を鑑みや。誰がや、たがや、誘ふ嵐に、潔う散る山櫻花をたゞふなる。よし、さもあらばあれ。此花のみぞ、半輪に一條の水添へては、楠氏の譽と共に、千代にその香を止め、十六瓣は、畏くも、帝の御紋として、幾よろづよ、御稜威と共に輝かなん。

東京　永井さき子

花とり／＼に咲き出し、秋の千草もいつしかくち初め、落葉かくれになくこほろぎの音も、かれ／＼なるきのふけふ、あれしまがきを、つくろひがほに、千代の香高う、咲き殘れる菊の一花。霜は、しろう置き、風は、はた寒く吹き渡りぬれど、露、しらきくのいろに出でゝ、　つろはぬこそ、百花のあだなるならひにも似で、げにそも心こそあふかるれ。あはれ、いかめしき文の林に生ひ立ち、學びの露を、身にうけし、をみな草よ、朝に、夕に、心して、此けだかき花の操にも、まさらでやは。

長崎　八尾いへ子

神無月も末近うなりて風音の寒くきこゆる朝、木の葉ちり敷て霜おきわたす庭の面に盛り過ぎて久しう匂へるは翁草といへるも理りなりけりと見つゝ、昔ありつる事抔思ひ出でゝいとをかし。そは節句のあるが中にも菊ばかりはいやはてにて、大内には菊の花奉るとて、茱萸(グミ)袋を簾にかけて、様々の節會行はれ、いかばかりかゆかしかりけん、下さまにも菊の酒飲て此節句をよろこびたるも、千年余りなん行はれたれど、こは唐土の儀なはとて、大御代の始めに止めさせ給ひぬ。されど此花を古へより、仙人の齢にくらべ、其香細きを移すとてきせ綿などの、みやびわざもありしと、ものには見ゆれど、今の世は徒に歌よむ人の言の葉草とそなれりける。そはとまれかくれ姿は　天長の節に大御代をほき奉るこゝろざしにもと、植たるがおほんみ露あまれく、かゝる御世のかたざりなさに、黄金の色したゝるも、白銀の色したゝるも、とり／＼に匂ひのこれる此頃とて、したはるゝ友もがなと、木の葉降り埋みたる庭もはらはず、ほこりかなるは都にまさる片山里の冬景色にぞある。

肥後　德永廣子

白妙に朝な朝なにおく霜の、身にしみて堪がたきころとなりては、野べの千草は、ことさらあはれはかなうみゐて、花の色香も絶なんばかりに、庭のながめもさびしく、只のこれるは菊のみにこそあれ。古今の人そのをの花の色香うるはしきをめではやすもまことならずや。さればはが庭にも隣の老翁と、うるはしき花苑の菊を朝な夕なの友としたのしまれつるに。いかに霜のはげしかりしにや。いつもなく花のいろのうつろひはてゝみるだにはかなげにおぼゐつる。かたはらのまがきがもとにおくれて、うゐしめつる。白菊のくち葉のかげにみつよつふたつ、さけるが、まばらなれども、いとうるはしくみゐぬ。花盛には見もやらず、つくろひもおこたりがちに、うちすぎしに、かく末花までも。みさをの色のたちまさりて、人のよろこびをうかべ、ほめたたへらるるも、其花の姿ゆかしく侍れば、女子のおこなひもかくてあるべくなど。かたりあひつる。友どち二三人このみさをの花色にふかくかんじて。かへすがへすはするべからずとちかひぬ。

長門　杉道子

秋も末つかたになりぬ。啾々と吹く夕の風、哀をおくりて、なやめる身ぞ忍に泣く。草野の小巡、荷葉陸、匂ひし香は夢なれや、もゝ草霜に悴れ、紅黄紫白の妍たるその姿は、あゝそも消ゐし形見いづくぞや。滿郊あれはてゝ、冷けく結ぶ霜いやしげく、すだく虫の音いやほそ

りゆくぞ悲しき。

世に正しき道の光消ゐ失せて、常暗にさ迷ふ罪の子よ。いたましやな、すさびける現世。うら若き血のなほみだれざるや、貴き人の心すらあさましけり。いつかまた黒髪にきらめく星光りに、さても終にかへらざる汚れしことのせひなさに、胸の泉に咽びの波狂はざるや、あゝ不浄の世なりけるよ。我は悲しさ、恨めしさに胸せまりて、悲哀に狂ひ、せきあへず千々紅涙灑げば、げに頼もしや、貴しの残菊の花、凋哀せる枯野に凜として、清き露含み馨しく香を放つ。我泣かじ、泣かじ、なれのをゝしく、みさをのたしきをみては、うら恥かし。いざ今よりは勇ましく我れ世と戦はん、やよ残菊、さすらひの世を救ひてよ、けがれの人を洗ひてよ。希ふは神と汝れ。

あゝ美しや、たのもしや、貴しや、山野荒涼、たゞひとり清香秀麗残菊の花。

肥後 佐々有鄰子

園のまがきにも秋ふけて。やう／＼露ふかくなりぬ。朝風そよとふきちらす木の葉の。みつよつ。ませ竹の蜘蛛の糸にかゝりて。ひらひらするけしきもいとあはれなりや。まして重陽の節句もきのふとすぎさりて。栗の實のみひとり笑みてひさしに。はらはら落ちり。ときにとりて身にしむ音をたてつるぞさびしき。をりから妻戸おしあけ園のあなたを見わたせば。菊の酒にくみそへて酔をすゝめし時さへおもひ出されて。さとかをりくる香は。鼻をうがちつるものから。残の菊花もすてられずしばしながめてかくなむ。

和泉 稲原菫子

きのふまで。あはれに聞きし虫の音も、いと枯れがれになりゆきて。木々のもみぢば。さては。庭を色どりし千草の花も。ちり／＼とちりみだれけん、跡もなく、いとあさましき、けふ此頃、まがきの菊のみひとり、ほこりがに、一本二本、秋の色を見よとてや、草かれの冬までも、霜にもかれず、咲き殘りたるめでたさ。あはれになつかし數多き花の中にも、大御代の光と共に、盛り久しき色香はげに、この菊なれや。

大阪 桝田登子

萩女郎花もいつしか、ふきすさぶ嵐におふどれふして、庭も籬も朝霜白う、けぶりて日影のどけき垣もとに、二本三本咲き殘りたる、色香の中々に哀になん。散りもしぬべきあたら其香を、かしこくも時雨の雨の、あはれかげそへ給ひし、かなしき此叢りよ、東の籬に咲き初しより、朝にながめ夕にもてはやし、日數の積りぬるまに／＼、心も花に置きまどはせる、霜にきほひて何ぞは露と、思ひ消ちつゝおとろへぬ物から、うつろひ盛りに猶若かへり、老せぬ程の雄々しさよ、たとしへなくもいとあはれ深うなん覺ゆる、そも此菊よ、呉竹の世におひかづる、はかなき草のたぐひにもあらず、くゝ立も堅らかに、花のつしやかに、こめかしからで、おほらかにも、心にくゝ思ひ上りて、咲き匂へる樣、なべてのやう變りていみじうあてはかに、賑ぎはゝしき極みなりけり、されば花の闘と、たゝへまほしう、下露にちとせ經にけん仙人、若ゆてふきせ綿に老をのごひ、うま人の玉のみぎり、うづのかざしに薫り、あるは、すはまに作り、御几帳の内花やぎたるま袖にくゆりて、我のみかは、言さやぐ唐にも酒に醸して、藥にはただ食し物となし、隱逸と賞し、冷香と愛で、延壽客と悦び、縣甘谷の下水を掬びて、齢をのばへ、こぼれての後さへ、こがね地に滿ちぬと謡ひて、咲の盛りは、いひ知らずゆゝしくも、花やかになる物から、露をやどし、霜をかつぎて、うつろひにたるなん、中々にあはれに覺ゆるを、靜けき小垣に立てるが、霜いた

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うけむれる朝げに、ふと見いでたらんは、げに仙人の住處、覺ゆる心地になん。

霜けふり露も匂ひて菊の香の
　かをりさむけく秋更にけり

咲きなゝる盛りもあれど中々に
　うつろふほどの霜のしらきく

東京　數島うた子

神無月ふりみふらずみ、さだめなき時雨にそめ出されて、四方の山々なべて錦につゝまれたる中に、咲きおくれたる白菊の垣にもれて匂へるはまた一しほのあはれなりけり。ましてや初霜のおきまとはせる風情、谷川のほとり世のちりもかゝらぬほどに咲き匂ひたる氣高さ、何とてたぐひあらめや、水汲む人の千世の齡を數へらるゝもまたむべなりけり、あはれ世の姫たちねがはくは、このこゝろあらまほしくこそ。

朝な〳〵おく霜にさへ色あせぬ
　菊やちとせのみさをなるらん

中村花子

秋去りて、冬將に、來らんとす。やがて。萬山の花木は、霜葉を帶びて、今や、枯れなんと、するに。菊のみは、霜にもおちず、時を得顔に咲ける樣、いみじうあはれなり。菊は、間垣に、白うさく、あまた咲けるも、宜し、或は、靑葉の中に、白菊の、一二枝咲けるも、氣高く愛らし。されば古へより、四君子の一として數へられ、櫻花と共に人に愛玩され、和歌に、文章に、歌はれ。又。いとも、畏れ多れど、雲の上の、御しるしと、せさせ給ふなり。又、たやすく枯れざる樣は、世の婦女の、操になぞへらる。故に、菊花は、一般の花よりは、大いに優されり。



○老婆に地圖を賜ふ

目下熊本なる秋期大演習に行幸あらせ給へる、天皇陛下には御野立の場所直ぐ手前の民家に一人の女八十歳以上と見ゆる老婆を脊負ひて拝觀し老婆の手を合せて拝せる様の畏くも御目に止まりけん御手づから御携へあらせらるゝ地圖を賜はりしにぞ老婆感泣して夢かとばかり暫時は物も言得ざりき此老婆は田邊村の内西牟田千百五十八番地田中文字太の母ヤオといひ之を脊負ひ居たるは其娘にてシユンといふものなりヤオは今尚眼鏡を用ひず針の目を通し壯健にして家事を補助し居れりと　陛下には尚郡長を召さ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れて御菓子を給はるべき御沙汰ありしと申す

○兩内親王殿下の御近狀　皇女常宮昌子内親王殿下は明治二十一年九月三十日の御誕生にて本年十五歳に成らせられ周宮房子内親王殿下は明治二十三年一月廿八日の御誕生にて十三歳に成らせ玉へり常宮殿下御誕辰の祝典は去月三十日行はせらるゝ筈なりしを當時宮中喪の爲めに御延引となり今三十日を以て行はせ玉ふ由也茲に御近狀を記し奉らむに兩殿下の御學問御用掛は下田歌子、三田守眞、阪正臣、堀江芳子、小川直子、野口親(小蘋)遠山甲子、奥好義の八氏なり兩殿下は御學問所に入御あると同時に總て御自身にて書籍及び文具を整頓し玉ひ其日の日課を受けさせられ日課終りて後も少しも女官の手を假り玉はず御三方にて其跡を取片附玉ふ故に日課の始まる可き時間の六七分前には必ず御席に着かせられ日課了りても又暫時御席を離れ玉はず御學問の程度は華族女學校の同級生徒に比しては優れ玉ふ事あるも劣り玉ふことなし又兩殿下は老人子供に御慈愛深く常に御前へ參候する向には必ず御自身にかれこれと御物語あり又時間の制限には深く御注意あり他へ御成りの時の如き何時何十分御出門と仰出さるゝ時には其時間前、必ず御座所を出御あり總て仰せ出されたる時間に違はせらるゝ事は萬あそばされず御召服并に御食事等に付いては一度も可否好惡をのたまひし事なく近侍より伺ひ出づる時は何にても宜しとの御沙汰あり御附の女房達には御幼年の御時より誰彼の御選みなく皆平等に召つかはせられ今日迄一人として御不興を被りし者あらず兩殿下共に人に面目を失はする樣の事なき樣にとの御注意深くおはします朝々御起床後御手水御更衣より御座所の御飾付けも御自身にて遊ばされ御教育

主任加賀美夫人及び御附の女房が何事に限らず心附きたる事を申上ぐる時は容れ玉はぬ事なし疾く御承知の事にても始めての樣に御沙汰ありて人々に滿足を與へ玉ふ奥向御教育は佐々木夫人(貞子)の擔當なり表向は加賀美夫人(繁子)の擔當なり御姉妹の御間柄至つて親しくましますも朝夕の御禮儀の嚴重なることは恐れ入る許りなり新聞紙上に見ゆる社會の出來事など加賀美夫人より其實際を言上あれば兩殿下巨細に御尋ねるぞいみじき

○貞子女王御結婚期　昨日勅許相成りたる北白川宮貞子女王殿下と有馬頼寧氏との御結婚は來年二月中旬を以て御擧行あらせらるゝ由貞子女王殿下は本年御十七歳に在まし目下華族女學校最高等科御在學中なりと承る

○歌御會始御題　明治三十六年歌御會御題は「新年海」と仰出され詠進書式并に期限等左の通定められたり

料紙は檀紙、奉書、杉原紙又は美濃紙を用ふ
詠進は一月十日までに宮内省御歌所へ差出す可し
但一人一首に限る

堅詠草

但し五つ折

御題

名上

裏面書式

某府縣下某國某郡市某町村住

華士族又は平民

苗　字

官位勳功爵など有する者は苗字の上に記載すべし

倘明年歌御會始の奉行は御歌所參候前田利鬯子同大口鯛二兩氏奉仕のことに御治定相成りたり

○女子東京美術學校の改革　神田仲猿樂町なる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

同校は先年來内部の紛擾絶へず頗る世の物議を惹起したる爲め學校の維持も困難を感ずるに至りたるより今回同校の設立者谷口鐵太郎、田中晋等の諸氏は同校設立の全權を藏原惟郭氏に一任することゝなり去る十四日新舊校長の更替を爲せりと云ふ同校は此改革を機とし裁縫、編物、刺繍、繪畫、音樂、寫眞、造花、諸禮各科の生徒募集を爲すと

○女子修養會の設立　藏原惟郭氏を會長に幹事は千田時次郎氏に囑托し表題の如き會を東京女子美術學校内に設けたり會則の大要左の如し

一、本會は學識德望ある諸大家を聘し每月一回本校内に於て講話會を開き生徒の品性を修養し併せて清新なる學風の振興を期す

二、講話會開會の際は時々音樂の演奏繪畫彫刻其他の美術製作品を展覧し女子の情操を高め美感の涵養に資す

一、他の女學校生徒にても希望の者は特に參會を許す

○慈善園遊會　數年前創めて我國に出獄人保護の事業を起して好成績を現はせる原胤繼氏は今回又夫人幹子と共に婦人出獄者の爲めに保護所を設置せんと企て資金募集の爲め多數貴婦人の賛助を得來る二十一、二十二の兩日早稻田なる大隈伯邸に於て菊花參觀芳園遊會を催す由

○留學支那婦人　去る六月の中旬より下田歌子女史の家塾に收容せられたる曹麗雲、陳彦安、華桂芳、胡彬華と外三人の清國婦人は其後同女史が創立に掛る麴町元園町の婦人協會の寄宿舍に入りて衣食は更なり萬般の事悉く邦人に倣ひ一見本邦婦人と異る所無きが如しと元より進取の氣象に乏しき孱弱なる巾幗の身を以て遙々の波濤を凌ぎ渡來せし程の婦人なれば精勵感ずべきばかりにて今は普通の日語を解し目下語るにも不自由を感ぜざる有樣なり一體文藻に富み漢文は其得意とする所なれば來春の三月花蕾漸く芳を發せんの時は

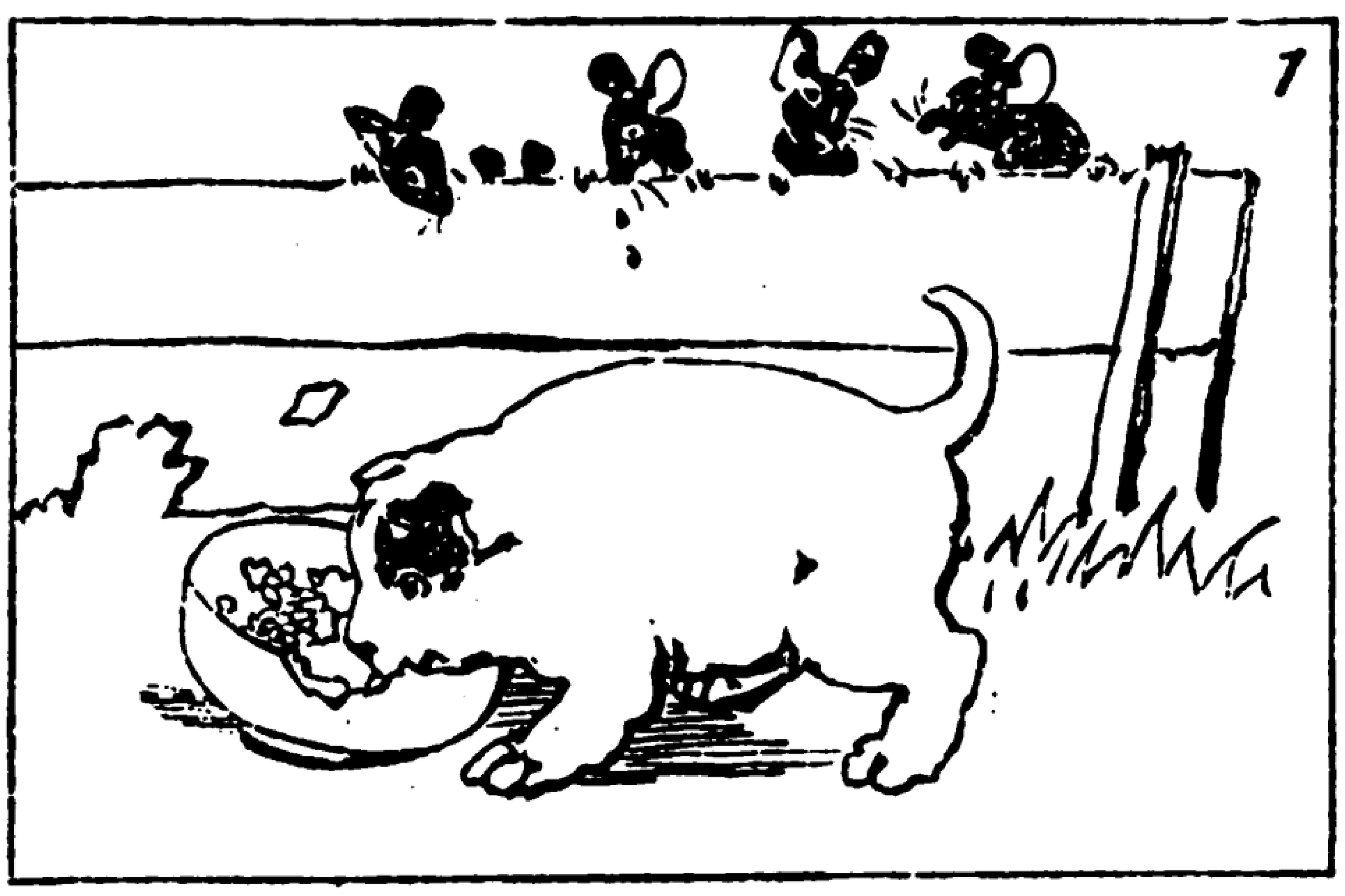
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

邦人に伍して然までの遜色は無き位に至るべしといふ

○ヒユース孃の演說（於山口婦人會）

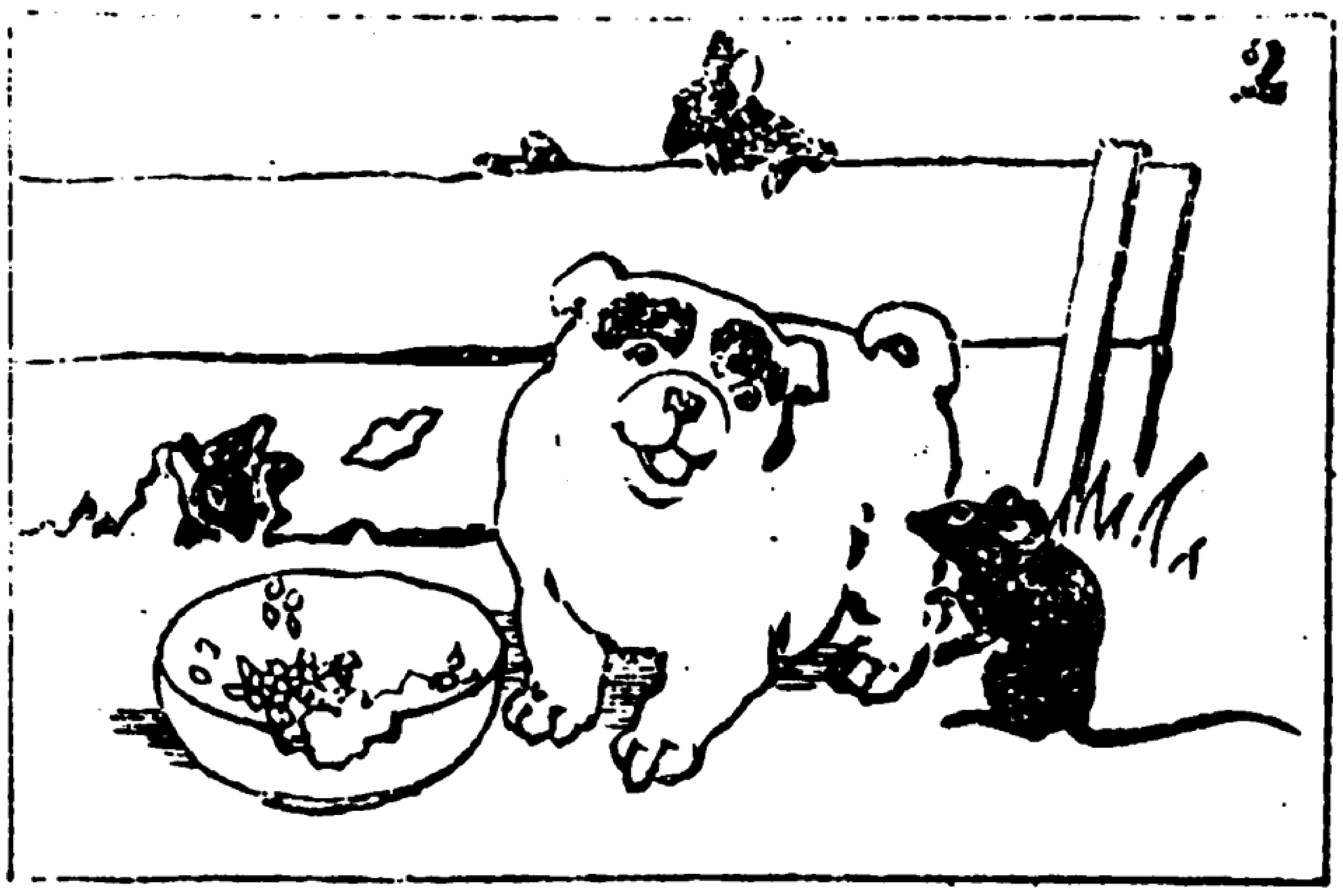
去月二十七日山口婦人會はヒユース孃の來遊を幸機として山口師範學校内に於て開會しヒユース孃に一場の演說を請ひたり其の演說の大要は左の如し

聽衆諸姉私は今日此處に參りましたるは演說をする爲に參つたのではありませぬ昨日來非常に疲れて居りますから演說することは出來ませぬと御斷りをして置きました然るに唯今橋本高等學校長私方へ來られて婦人會の爲めに何か一寸でもよいから話しする樣にとの御懇望故致方なく十五分間丈話す事を約束して參つた譯です自分は日本へ來ましたのは敎ふる積りで來たのではない習ふつもりで參つたのです（中略）東洋の婦人は思ふ樣に働かれぬ氣の毒に思ひ升私は婦人でありますから強く同情を表し婦人問題に付き申上げやうと思ひ升凡そ婦人は獨立して何事も出來ませぬ婦人は他の人と連結せねば何事も出來ませぬ是非協同一致する必要があります婦人の職分は家庭にありて家を治めるが職分ある故自然公に立つて連結を計ること六ケ敷あります尙婦人には一個人の好き嫌する性癖がありますから連結が困難です諸姉は此極僻かな婦人的の好き嫌ひの感情を度外視して連結を計らねばならぬ然して他人の良き點を利用し己れが短を補ふ樣にせねばなりませぬ世界一般の婦人が互に連結してゆけば面白い



仕事ができると思ひ升

私の考へには日本の婦人は男子より劣つてゐる男子に向つては私は婦人に與へよと申して居りますが女子に向つては一心になつて働けとかく申すのです(英國の我々に望む所は右と違つて居ります吾人は力かぎり爲して居ります英人のすゝめる處は男子に一生懸命進めねばならんことを申して居ります)今一つ御注意申し度きは勇氣を養ふことです諸姉は長州人の妻や子孫で武士道で鍛錬なされて居れば勇氣を說くは無益ならんかと思はますが實際さうでない勇氣の養成が必要です人の死に瀕した時程勇氣の必要なるものはないまたモツト困難なる場合あり私は多數の男子のヤイ〳〵

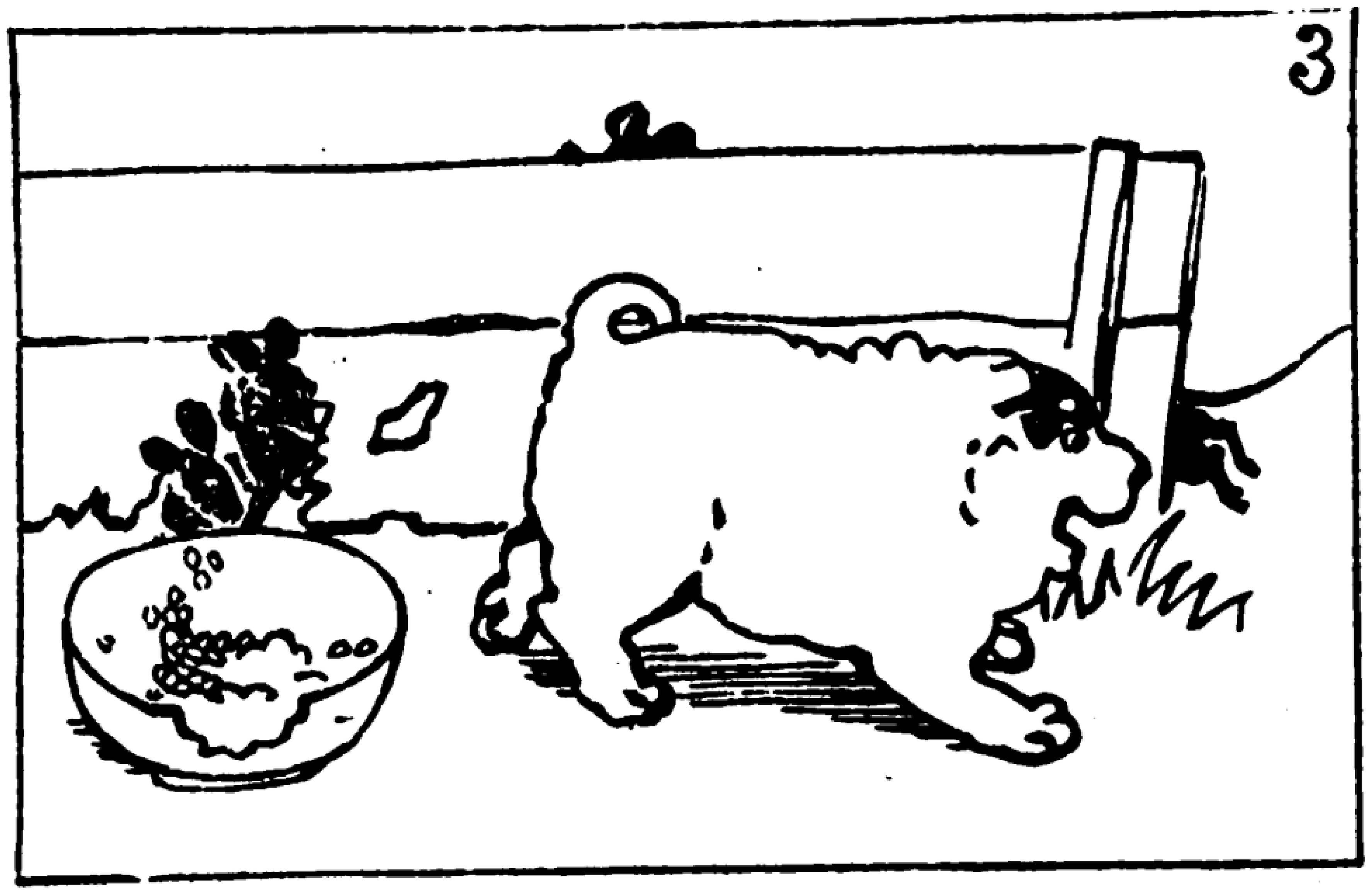


噪擾する間に起つて演說したる事がある輿論に對する勇氣がなくてならぬ輿論には從ふべきではあれども時としては輿論必ずしも是ならず斯る時には輿論に屈從してはいけぬ他人に笑はるゝを憚かり臆する樣では卑屈です委細かまはず進むで戰陣に立つの勇氣を奮ひ起して嚴行せねばならぬ此勇氣が婦人に缺乏して居ります

此山口は東京より離れて居るから日本の爲めに特に盡すべき必要があります東京は多數の人入込み居り種々優つた人集まつて居るが他の部分につまらぬ人が居る程危險な事はありませぬ佛國の文明巴里に集まり他の部分不權衡あれば危險なりと或人申しましたが其適です英國は幸にロンドン

に計り優者が集まらず各地に散じて居りすからせ國の爲に都合よい方です此山口は東京と離れて居るから思想の中心となることと六ケ敷ことですが他の部分と連絡を計ること最も必要急務と信じます……　私が山口に望みますは此連合にわります然して昔時の武士道を發揮し婦人會の益々盛になることを希望致します今日御約束の時間を守り完全なる演説を爲し能はざりしことの原因に就て悲みます

○安藝の孝子　山口縣山口町第九百七十番地同居當時廣島縣廣島市大手町九丁目第九十三番邸寄留會社員中村壽吉(四十三)といへるもの壽吉は目下其養母お松(八十)及び妻お爲(四十)の三人暮しなるが同人は天性温厚篤實にして親愛尊


3

敬の念深く常に養母に事へて孝を致し家業を勵みけるにぞ夙に孝子の名譽を顯しゐたり養母お松は豫て身體柔弱なりし處漸々取る年波と共に一層柔弱となりて果ては病魔の爲め精神に變狀を來したるより平生無理の事のみを云ひ時に依ると又亂暴を爲す事あるのみならず日夜客を招ぎて酒宴を開き唯他人を喜ばしむるを以てこよなき快樂となし家の爲め會計の都合などは更に念頭に留めず萬事氣隨氣儘に振舞へり左れど壽吉は少しも此等の事を憂へず只管養母の歡心を得ん事のみを身心に盡しゐたるに養母は又不幸にも去る廿七年眼病に罹り終に自由を缺くに至りしかば壽吉及び其妻お爲は如何にもして再び以前の如き眼に回復せしめん

とて良醫と云ふ良醫には悉く治療を受けさしめ其身は寢食を忘れて看護に從事し或は背を撫で足を擦り或は世の珍談奇話などを枕元に語り其心を慰め或は費用の多少を論せずして近鄰の者を聘し養母の周圍を擁して酒宴を開き養母が平素の志を成すなど其行ひ終始一日の如く過ちにも倦怠の色を顯はしたる事なければ町內の者は孰れも孝養の模範と仰ぐのみならず其筋に向け賞與方を出願したりといふ

○日本女子大學校の運動會

（つゞき）

午前の分は前號に記載したれば午後の分に移らんに

（第十七）ローン、テニス（大學部及高等女學校）

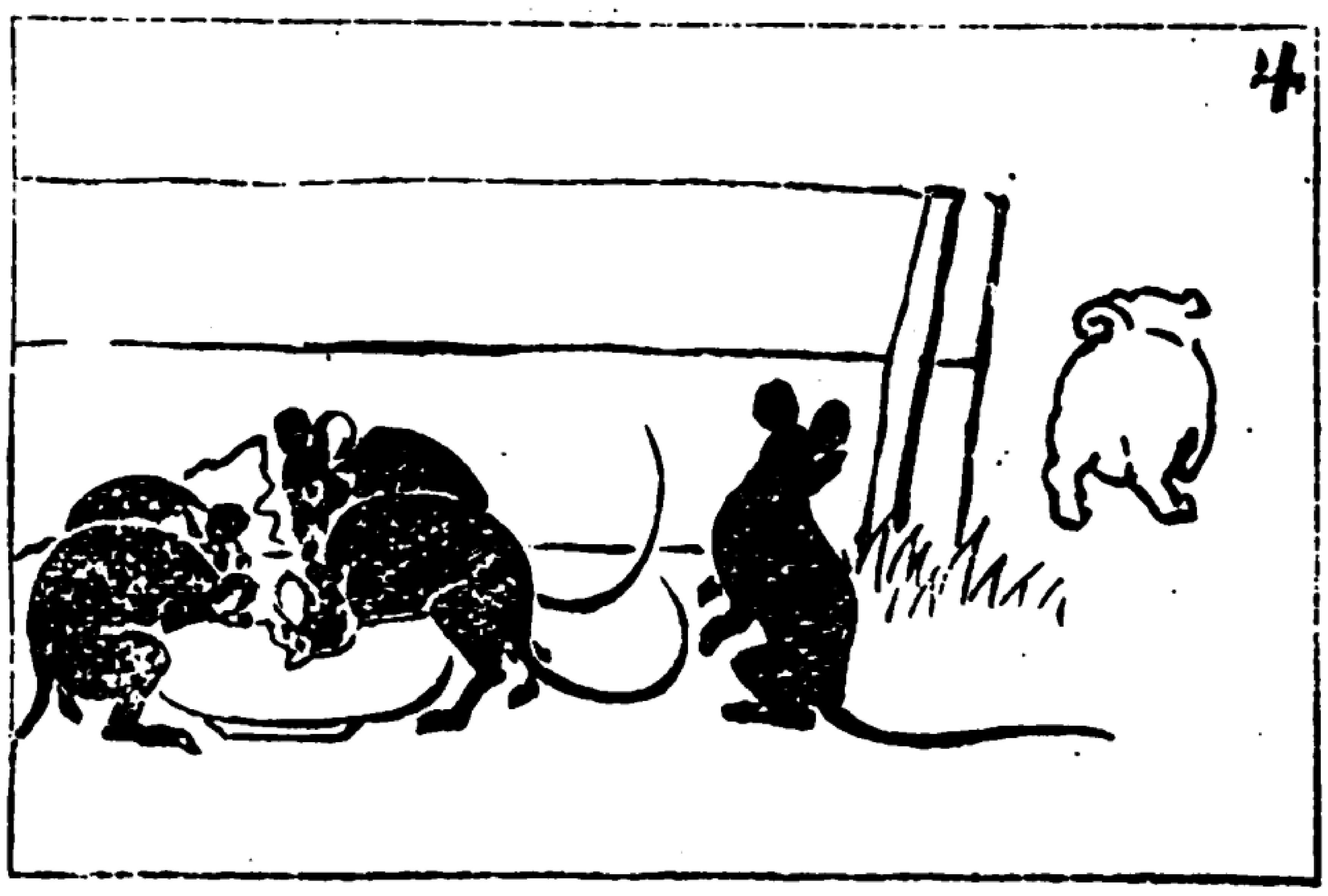
之れは一般に不評判の樣なりき、今一層の奮勵を要したし。

（第十八）シンバー體操（高等女學校第四年西組）

兩手に小さき金盤を以て洋琴の調子に伴れて上下左右に振りては鳴らす狀、恰も天女の舞の如く體の自由に動くには目を驚かせり、美的體操の神髓は蓋しこゝにあるべし

（第十九）千鳥競走（英文豫備科第二年）

紅白の旗十六本を樹て千鳥形に走つて旗を渡し合ふ仕組なり頗る活潑にして爽快なりき



（第二十）第一メーポロ、ダンス（國文家政學部第二年）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

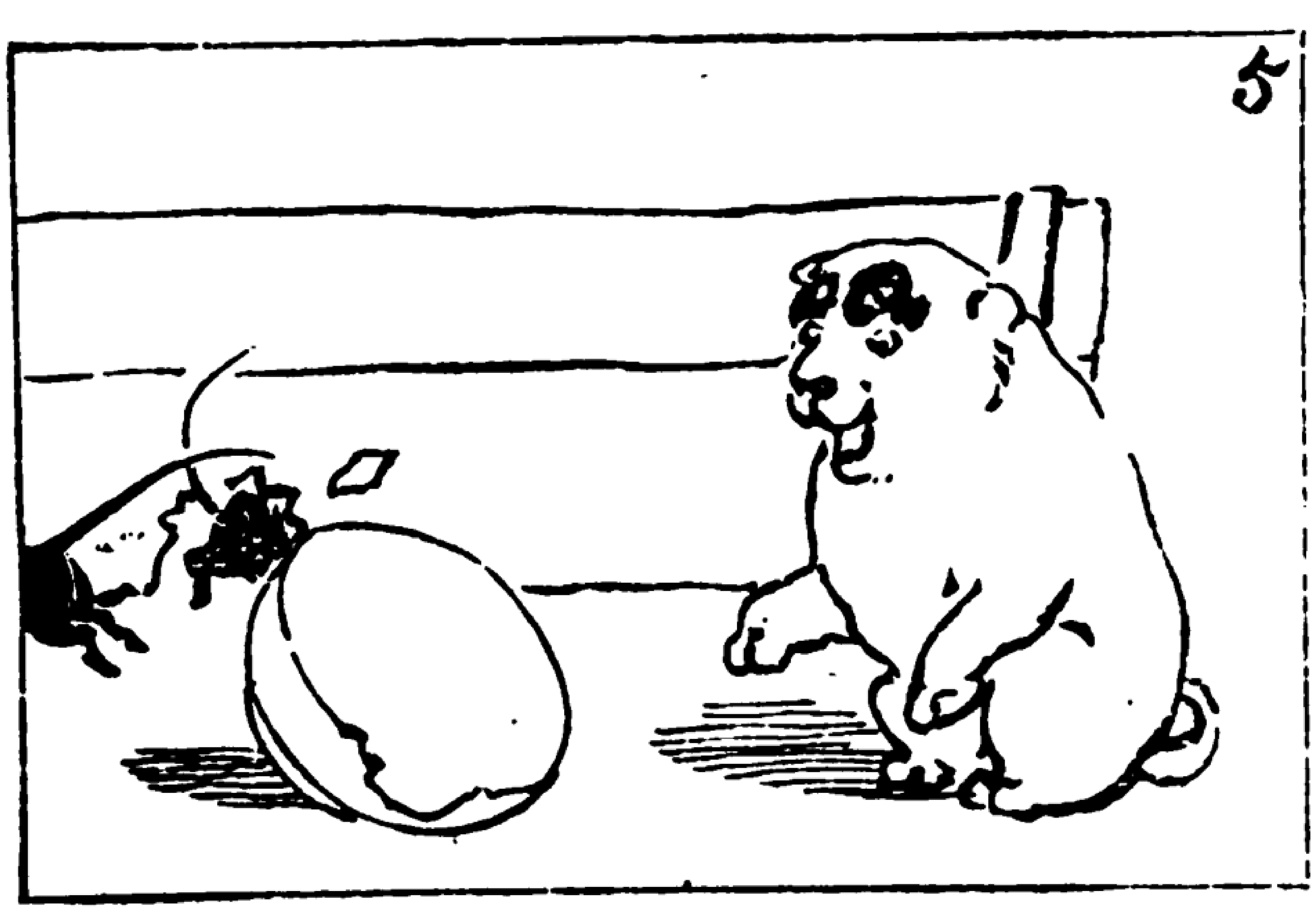
高さ一丈三四尺もある圓柱の頂上より紅白の布十二條を垂れ一人一條づゝを執て、十二人して種々に此布を柱に巻きつけて組み合せながら進行するものなり、最後に布を柱に巻かずして編み下げて退きたるは鳥渡目先の變りて面白かりき、併しメーボルの歩調を用ひずして普通の行進に依られしは惜むべし

（第二十一）　現象競爭
（都合に依り見合せとなる）

（第二十二）　沖の鷗
（英文學部同豫備科）

前の霞の富士と同じく扇子にて舞ふなり、撮影せる外國人あるを見受けたり

（第二十三）　與次郎兵衛人形（國文學部第二年）



名前を見て如何に珍奇なるものかと想像せしが、大根と竹箸で與次郎兵衛人形を作り、指の尖に載せて走るだけにて子供らしき様なり

（第二十四）　花月行
（高等女學校四年東組）

紅白の輪に黄青紅の花を巻き付けたもの一づゝを持つて體操をするなりこれは體操よりも終りの行進の方は美事の様に思はれたり

（第二十五）　料理競爭
（家政學部第一年）

處々に食料品を備へ置きて一團の人員走つて梨の皮を剝きサンドウイッチを作り上げて競ふ趣向なり參觀者には一向味が分らざりしも其製品を來賓の子達に配られしは一寸愛興ありじ

（第二十六）紅葉狩（高等女學校第三年西組）

兩手に一本づゝ楓の枝を持ち出で體操終りて次に行進となり楓樹の門を作つて其下を潜つては出る狀其名に背かず優美なり

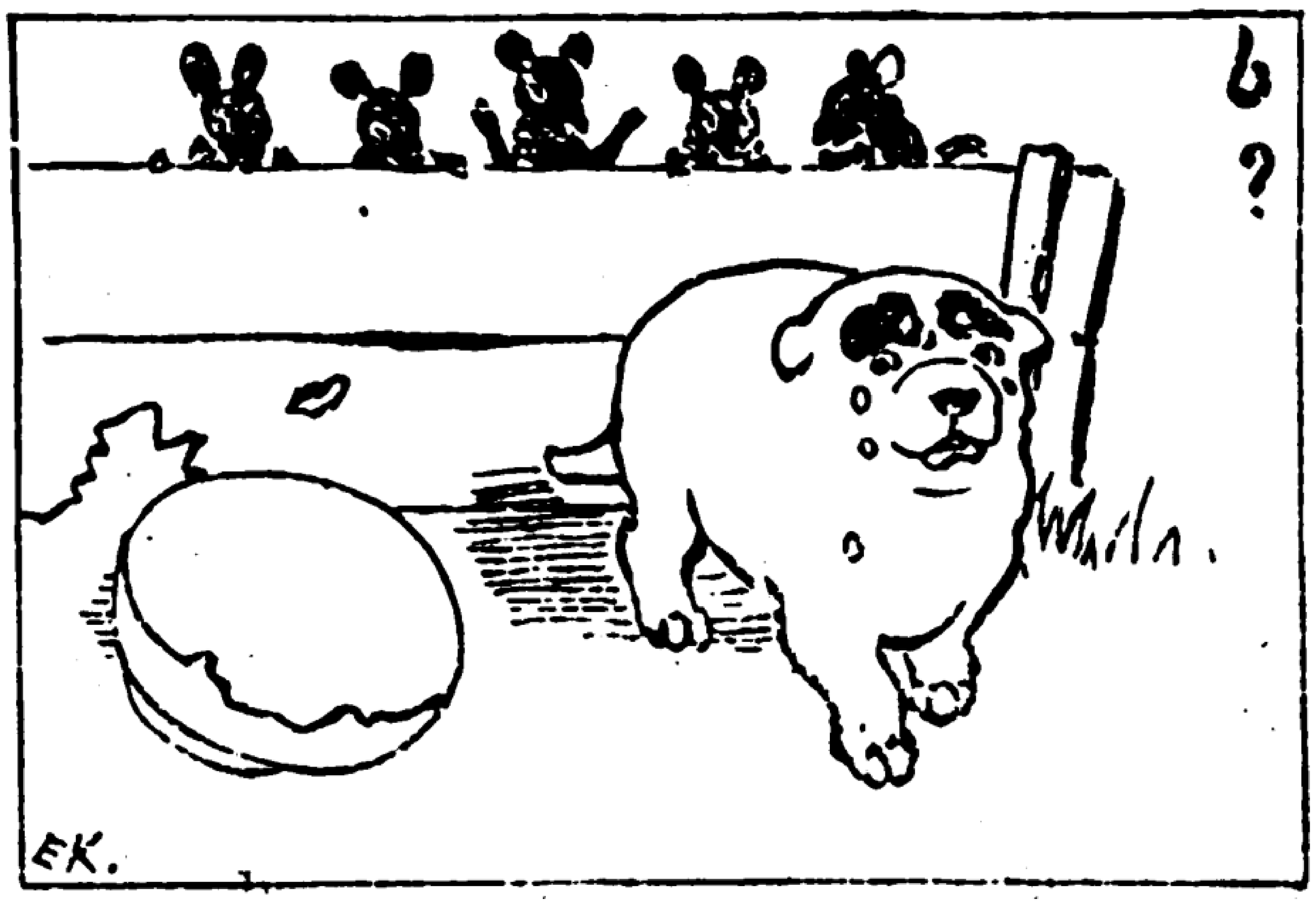
（第二十七）毬の取合ひ（英文豫備科一二年）

二列對向して中央に一個の毬を置き交互に一人づゝ出ては毬を取り合ふ單簡にして興味ある競走なり

（第二十八）かざしの菊（高等女學校第三年東組）

各手に一枝の菊を持ちて行進し或は十字形に或は圓形に或は散し或は集り常に洋琴の伴奏に調和して舞ひたるなり、

（第二十九）バスケット、ボール（大學部）



之れは此校の特技の由なるがグラウンドの狹き故にや一向興味なくして終られたり

（第三十）第一虹靈舞（高等女學校第四年西組）

各一本の輪を頭に翳して整列し運動をなす輪は列に依て色を異にし七色に分けられたり、虹の歌を唱ひながら輪を振る樣中々に面白かりき

（第三十一）自轉車マーチ（大學部）

七八人の女生自轉車隊を組織して軍樂に合せ種々に乘り廻はし狹き場所を衝突もせず行はれしは熟練の結果とやいはん

（第三十二）第三マーチ（高等女學校全體）

四百名以上の生徒同時に種々の形をなして軍樂隊

の吹奏に合せて行進し、教師高壇に上りて指揮せり歩調整ひて中隊教練を見るが如し、斯くて君が代を歌ひて當日の余番を無事に終られしか來賓は數千人もありて最も盛會なりき　（をはり）

○コーレリ孃の新小說　有名なる英國の閨秀文學家コーレリ孃は此程テムポラル、バウアー（現時の權力）と題する小說を出版して新聞雜誌には未ダ一冊も送らざる程なるに早くも十五萬部を賣盡したる由なり此の如く一時に夥多なる購讀者を得たることは英國に未曾有のことにして孃の小說の常に好評を有するにも原因すべしと雖も又自から其書の價値の凡ならざるを知るに足るべし而して此小說は英國王を主として有らゆる社會の人物を極めて平凡なる例へば小兒若しくは御者馬丁等の眼を以て觀察したるものにして其平凡なる所却て普通の小說より非凡なる所なりと云ふ

○臺所不用說　ボールソン博士はグード、ヘルス雜誌に於て近來料理したる食物を販賣するもの次第に增加することを論じて終に臺所は遠からずして家屋に不必要なる部分となるべしと結論せり博士は曰く人工を要することは其何たるを問はず殆んど皆近世に至りて一大改革を經たり少なくとも機械の發明に依りて人の勞力を省き得ざるものなし然るに臺所のみは近世の進步に抵抗して夫は文明の恩惠を受け居るに拘はらず妻は依然として祖母若しくは曾祖母の時代に異ならざる方法に於て勞働しつゝありマッシを作るにもパンを燒くにも百年前と其方法に何等の相違なく然も其仕方の拙なるときは常に八釜しき小言を聞かざるを得ず世の中に不公平の事少なからずと雖も斯くまでに不公平なること他にありや疑はし然るに今は如何程料理に經驗なき職人と雖も最良の料理人の作り

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たる物に優る食物を科學の力に依り食物製造場に於て製造しつゝあり豆も豌豆も大なる食料品製造所に於て料理したる方滋養多く風味好きものを得ることゝなれり最早妻を苦しめ料理人を苦しめて不味なる不消化なるものを食するの要なし最近の發明は種々なるスープの原料を製造することにあり僅に湯を注げば美味なるスープを得べし又諸所の鑵詰製造所に於ては殆んど有らゆる食物を鑵詰となしつゝあり實に臺所は日に不用の物となりつゝあるなりラムプの蠟燭に代り瓦斯のラムプに代り電氣の瓦斯に代りたる如く近時の工業は次第に臺所に襲ひつゝあり臺所の不用となるは決して遠きに非ざるべし否吾人は不用とならんことを望むものなり云々

◎獨逸の音樂界と幸田幸子女史　東京音樂學校の卒業生にて、先頃獨逸へ留學せし瀧廉太郎氏が、本月十七日病氣の爲歸朝せしが今同國音樂界の近況を聞込たれば、少しく左に紹介せんに、同氏は昨年五月十八日獨逸に着し、伯林よりイラプチヒに至りしが、其頃は暑中休暇も近寄り、コンセルバユリムに入學せんには、十月一日よりならでは叶ひ難きより、暫くピアノの大教授ダイシミルラーの弟子、ウイラセニヨル氏に就て教授を受け、ダイシミルラー氏の厚意にて、折節同氏より其曲を授けられたる程に、入學試驗を受る事となりしが、我國の試驗とは異りて、彼方にては唯一曲を奏さしめ、及第すれば其人の名前を呼び、呼ばざるを以て落第者とす、其教授法の如きも、豫て生徒より教を受けたき教師の名前を願置く習慣なから、教師は开を承引するもせざるも勝手なれば、承知せざる時は其望叶はず、瀧氏は規定に依りて、ダイシミルラー氏の教を受くる

事となり、十一月廿三日迄登校して、作曲は本年二月死亡せしヤダスソオン氏の教を受けたり。瀧氏の見聞に依れば、我斯道の名手と彼方にて出來の好き卒業生とを比較すれば、さのみ甲乙なき程にて、我にありては年限の短き割合には其の發達著しと謂ふべく、年代も長き事なれば、彼方にては從つて名手多く、學生中にも却々の名手あり。作曲に就ては、我と彼とは、雲泥の相違にして、到底彼に比ぶべくもなし、尙目下伯林にバイオリンの研究中なる幸田幸子氏は、昨年四月以來名手ヨアヒム氏に就て敎を受け居るが、其入門の時は彼國の規定にて試驗を受け、直に同氏の承諾を得、門に入りしだけありて、幸田氏の成績極めて好く、今は同門中の評判となり居るは、我音樂界の名譽といふべく、同氏は去月遊學滿期となりたれど、以後は自費にて今少しく研究せんと、先頃文部省に出願して其許可を受けたる由

新刊寄書

婦人と子供	第十一號	フレーベル會
海の母	第百十三號	夫人正法會
兒童研究	第九號	教育研究所
日本婦人	第三十六號	帝國婦人協會
大八洲雜誌	第百九十六號	大八洲館
女子之友	第百二十六號	東洋社
女學世界	第十四號	博文館
料理法講義錄	第六號	大日本割烹學會
新聲	第四號	新聲社
婦女新聞	第百三十號	婦女新聞社
むさしの	第十號	東洋文學會
體育	第百七號	休育會
偕行社記事	第三百一號	偕行社
中央公論	第十一號	反省社
高家之友	第八號	時事新報社
藥石新報	第四百四十四號	藥石新報社
勞働世界	第二十號	勞働新聞社
女子新聞	第六、七號	女子新聞社
女學生新聞	第一號	女學生新聞社
英學新報	第二十四號	英學新報社
音樂之友	第三卷第一號	樂友社
少女界	定期增刊	金港堂
新沖繩	第二、三、四號	新沖繩社
中等教育	第八號	中等教育會
感化院月報	第十五號	東京感化院
婦人	第二號	婦人協會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

水主天姥新著

千古之冤魂 石田三成 及其時代之形勢

一部定價金卅錢
郵稅四錢

勝てば即ち官軍。負くれば即ち賊のみ。理非往々にして顛倒し、曲直或は顚逆す。天道漠々、世事茫々慨嘆せざるべけんや。三成六條河畔の露と消にしより三百有餘年に及ぶもその冤枉は依然として、伸雪する能はざるなり。著者乃ち、明快痛切の筆を揮て當年の形勢を描出し、東西の兩雄たる家康と三成とを較論比評するや。恰も法官の刑を斷ずるが如く、毫も假借宥恕を須ゐず、一褒一貶、一黜一陟の間、文舞ひ筆踊て千古の功罪を眼前に見るの思ひあり。汽車關ヶ原を過ぎて、鬱葱たる松尾南宮の諸山を望みし者、此書を繙いて當年の事蹟を思はゞ、眦裂け、腸斷たざれば已まざるべし。蓋し近來の快著なり。

發行所
東京築地株式會社
國光社

文學士　小林雨塔著

勾當內侍

（四六二切袖珍各十三錢郵稅二錢）

名媛を以て名將に配す。是れ千歲の佳會也。而かも忽ち生別となり、忽ち死訣となる。豈復千古の恨事に在らずや。宮禁秋涼夜闌なる時、美姬半簾を捲き、月に對して玉琴を彈ざれば、名將千草の露を踏み、馬を佇めて戀に泣く、何等の風流ぞ。而して一たび天の憐みを受けて、鳳鸞の契なるに及んでや、即ち亂離の厄に遭ひて、長く恨を北國の青山に留む。又何事の悲慘ぞ、時人或は傳へ曰ふ嵯峨野の奧、往生院の邊、まだ裏若き尼法師の、右手に花槽を携へ左手に珠數爪繰りて、口に稱名をふ唱るにあふものありきと、是れ勾當內侍が義貞の後世を弔ふ也。抑も義貞の半面を知らんと欲せば、勾當內侍を知らざるべからず、勾當內侍を知る者義貞を知る所以なれば也古忠臣の魂、名媛の怨籠りて此の小册子の中に在り、涼夜秋燈に對して之を讀む、誰か又一滴の涙なきを得んや。

近刊

袈裟御前
巴御前
顏世御前
辨內侍

近刊

佛御前
虎御前
白拍子龜菊

既刊

大町文學士著
常磐御前

國府犀東著
靜御前

華族女學校編纂

國語假字遣ひ一覽

壹部 定價拾貳錢
郵送料金 貳錢
郵劵代用一割增

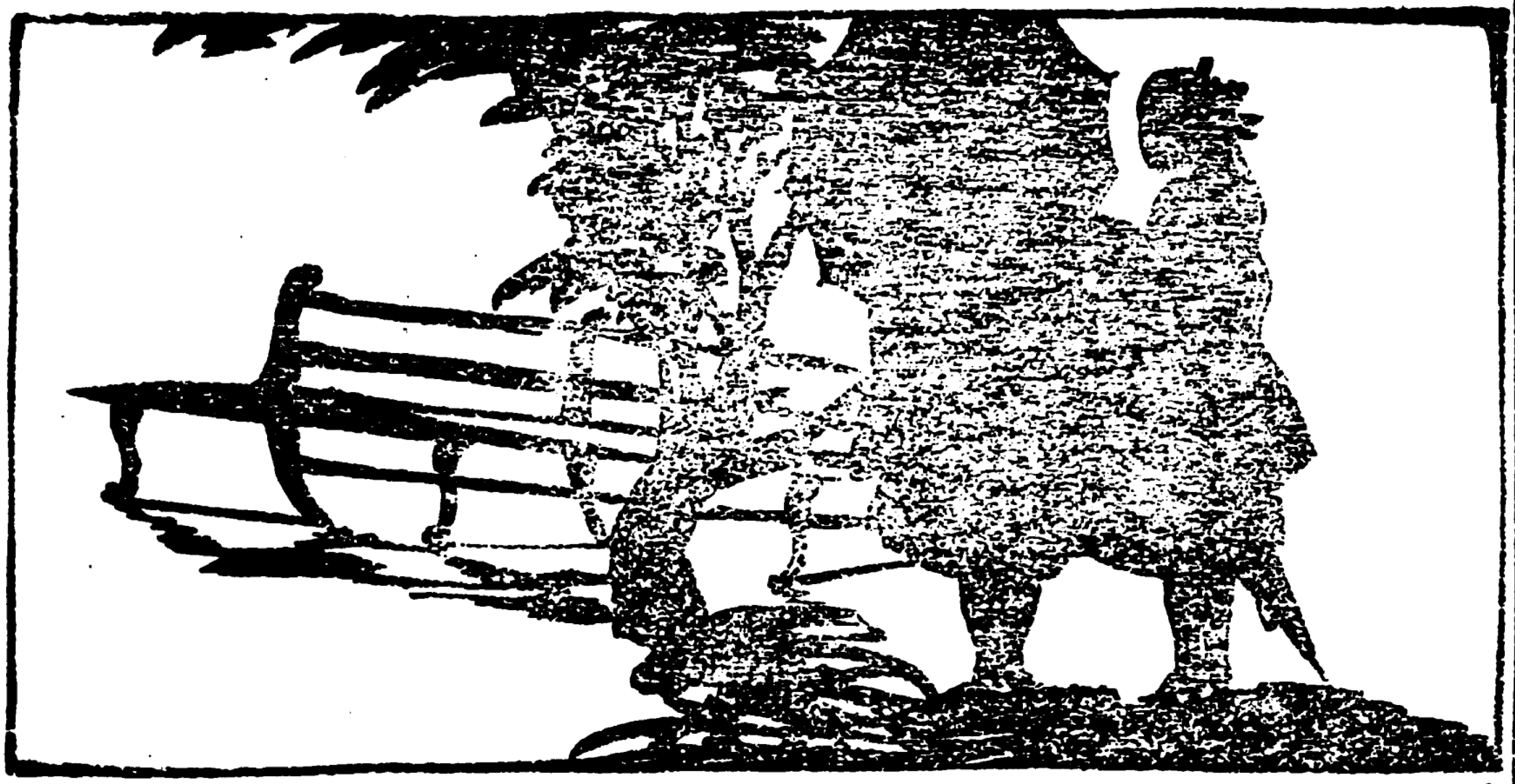
從來國語の假字遣ひを敎ふるに多くは、たゞ五十音の順次のみによりてその語を配列するを、例とせるが、本書は、まづ、その語原近きもの、意義通へるものを一括して、之を類推せしめむと計り、成るべく記憶の勞力を省かしめんとせり。本社今回華族女學校の御下附を得て、世に公にす、國語研修者、文學者には座右必携の要書なり。

發行所 東京京橋區築地二 電話新橋二六九三 株式會社國光社出版部

嬢さん方お待ちかねの

少女讀本

月の卷が出來ました



堀内新泉著 ◎ 壹冊定價拾八錢郵稅四錢

花の卷に對する批評

◎毎日新聞評 堀内新泉子の縦驅の筆に成れる家庭讀本にして、最と面白く、且つ有益の册子なり、目次は花の實、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等なり

◎萬朝報評 まじめな所があつて先づ〳〵善い讀本と云はねばならぬ。

◎婦女新聞評 家庭小説を以て一旗幟を立つる堀内新泉子の著にして十三四の少女に讀ましむるため純潔なる短篇小説數種を集めたるものなり面白くなかしくまた哀れに悲しき間に教訓的意味を含ませて綴りたり妻たり母たるものゝ心得を説きたれば家庭の讀本として最上のものならん續いて出づべき月の卷雪の卷こそ待遠しけれ

◎教育時論評 家庭向の著書、花の實、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等の諸篇あり、家庭教育の一助とすべし

◎中央公論評 家庭讀本老人讀本を著はしたる氏は又少女讀本を著はせり、アドヶ無き物語中自然に教訓を含む家庭の讀物として最も珍重すべし

◎東京日々新聞評 家庭讀本をあらはして以來、常に斯かる讀本を公にして、世の好評をほしいまゝにせし老人讀本に繼いて、今又この著をなす、趣味の淺深は暫くこゝに言はず、吾人はたゞその年少女子を害すなきを喜ぶ。

◎國民新聞評 花の實、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等、既に少女らしき名題にして、著者亦た夙に此種の書に經驗あり、且つ成功したるに近し、夏の浴衣、避暑の山、少女の調度の中に收めらるゝは、またなく應しかるべし。

◎國文學評 花の實、ゆき姫、野末の露、玉椿、山吹、ぬひはり、の六篇を輯めて、一册としたもの、皆、孰れも、教訓の意を寓して、最も、少女に適するやうな誠に罪のない物語である。讀み終つた跡に、淸らかな和氣靄々たる家庭の面影が、髣髴として、目前にあらはるゝやうな心地がする。吾人は、曩に、著者の『家庭讀本』を讀みて、その筆の、斯の種の著作に甚だ適するものあるを見たが、本書を讀みて、なほその然るものあるを認める。著者の、美はしき性格が、おのづと筆の上に現はれるものであらう。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

松川甯著

結婚と家庭

袖珍美本
定價拾五錢
郵税四錢

結婚と家庭！是れ未だ解答を與へられざる現今の一大問題なり(抑も兩性結合は天の大倫、男女相愛は人の常情。誰れか又之を防過するを得んや。然りと雖も淑女必ず吉士と遇はず。才子必ず美人と配せず、是を以て或は失戀に泣き、或は破鏡を嘆じ、終生孤閨を守りて。厭世の人となる者、古來其類多からずとせず。是れ豈人生の最大不幸にあらずや、著者麗の筆を以て此の大問題の解決を試み。近く證を取り遠く例を引き縱横論議して毫も憚かる所なし、希はくば青春妙齡の士女、此書に據りて以て、相愛の結婚儀を擧げ和樂の家庭を構成せば、始めて人生の眞福を享くるを得ん歟。

現今諸名家撰述〇女鑑編輯局編纂

新編 ひめかゞみ

菊版美本
定價金二拾五錢
郵税四錢

近世女子敎育の年に月に盛んなるに隨ひ、學は和漢洋を兼ね、才は天地人に通ずとも稱すべき閨媛の彬々として世に現はるゝは誠に喜ぶべき事ながら、專ら智育を主として重きを德育に置かざる餘弊にや、さばかりの才媛にても其操行如何と顧る時は案外眼に一丁字なき鄙の賤の女にも及ばぬ者多く、其甚しきに至りてはふりがな新聞の三面に、父母良人の名迄汚す者さへ少なからず、斯くては古今東西の書を讀み盡せしとて何かせむ、誠に嘆はしき限りなり、本社茲に慨すること久し、仍當今諸名家の文章中より近世列女の傳記を抄出し、之を賢良、忠義、孝行、節操、才學の五綱に分ちて編纂刊行することゝなせり、抑方今文明日進の際時勢に伴うて女子の本分を盡さんと欲せば、操行學藝兩全ならざるべからず。學藝は花にして操行は實なり。花あり實ありてこそ始めて完全の女子と謂ふことを得べし、世上の才媛淑女諸君本書を熟讀玩味して花實を一身兼ね備へ玉はんことを、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

茨城縣師範學校教諭岡部時次郎
茨城縣師範學校教諭森田廣吉　共編

教育適用　舞踏遊戯法

定價壹冊
金貳拾貳錢
郵稅四錢

本書は主として高等女學校並に高等小學校上級の女生徒に課する爲め編述されたるものにしてつとめて説明を簡單にし且つ專ら畫圖によりて解説したれば未だ舞蹈遊戯の觀念なきものと雖も一旦之を繙かば容易に了解することを得べし

發行所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地
電話新橋特八八番、新二六九三番
株式會社　國光社出版部

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

藤野天城著

女子小觀

四六版洋装美本定價廿錢郵税四錢

既刊

生田目經徳著
標註 雅文消息集 全
定價郵税共廿九錢

高瀬眞卿著
學校家庭 修身一夕話 再版
定價郵税共四十六錢

堀内新泉著
家庭の鑑 三版

杉谷正隆著
家庭歌訓 修身百話 全
定價郵税共四十四錢

指原乙子著
女子文章軌範 完
定價郵税共卅四錢

發行所 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

わきが

根治確證新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脱せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓つて根治**すること確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる賣藥と異なる處の本劑一種特有の神効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌する病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑也▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲(藥價)輕症根治分藥價送料共六拾錢◎重症根治分同上壹圓廿錢◎頑固慢性症根治分同上貳圓卅錢◎爲替は神田局あて取組の事◎切手代用は必ず二割ましの事◎着金即刻送藥す▲(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似偽藥顯はる用藥者は深く注意ありて「日新館藥房製劑」の名義に着目して購求あらん事を乞ふ

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房 (電話本局二五四六番)

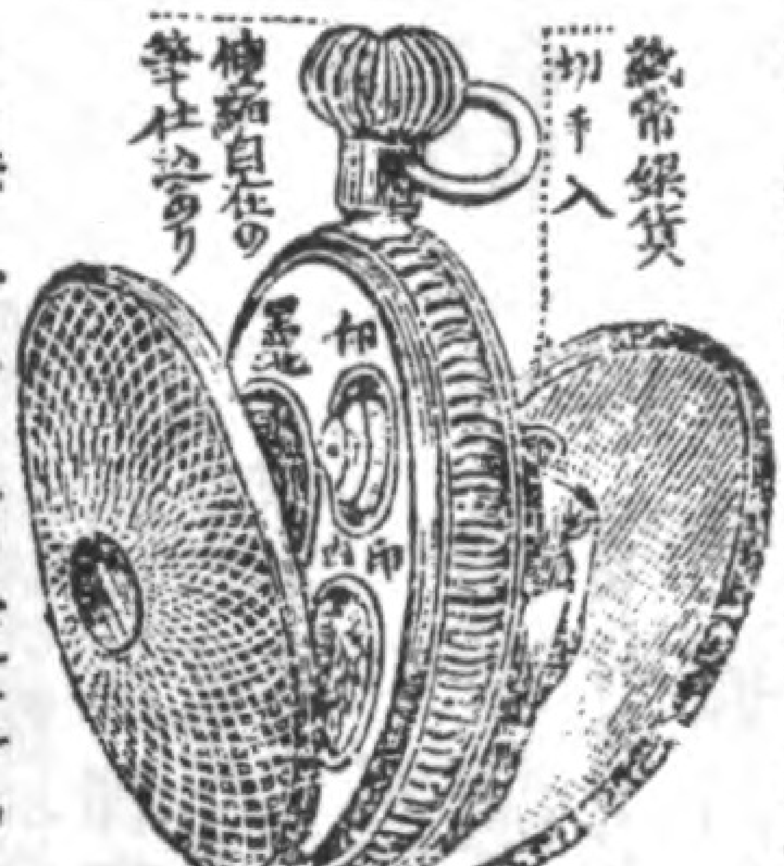
肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八拾錢特別製分壹圓四拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

大改良 最新式 時計形文具兼用錢入發賣

本品は圖の如く龍頭無雙ニッケル側十九形兩蓋開きにて一面は**文具**(墨池肉壺檢印等)を備へ一面は**錢入**(銀貨金貨紙幣印紙等を入る)龍頭は伸縮自在の**筆**を仕込み體裁頗る優美にて當時流行の時計**薄形**の時計と異らず**景品**披露の爲め千個限り時計鎖を進呈す▲特別上等製美術浮彫り兩蓋開き九拾五錢上製八拾錢小包送料百里内八錢百里外十六錢の割にて添送の事▲切手代用必ず二割増し▲着金即刻送品す▲代金引換小包郵便は面倒手數に付一切御斷り申候事▲着金の上に非ざれば決して送品致さず候



專賣元 東京市神田五軒町十九番地 日新館商店

登錄商標

五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
錫蓋附 乳白硝子器入
壽美禮おしろい

●壽美禮おしろい



●ねり製 定價 大壜 二十錢 小壜 十二錢

水製 定價 大壜 二十五錢 中壜 十五錢 小壜 十錢

ヴワイオレツト水製

錫栓附乳白硝子壜入



すみれ白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蜡體等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉は』常に用て御顔肌等の色を白變せしめきめをこまやかににきび、そばかす、あせも等を生せず御肌へを淸々しく天然の色白きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を淸爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京橫濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ、流行せり

●皮膚艶白劑壽美禮あらい粉

●綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢
罐詰 六錢五厘 袋入 壹錢

●弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を淸々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生せず又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

登錄商標

西洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE.
WASHLNG IOWDER.

壽美禮あらい粉



製造本舖
東京東兩國
橫網町一丁目

伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所ハ全國到ル處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場ニ有リ

Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑

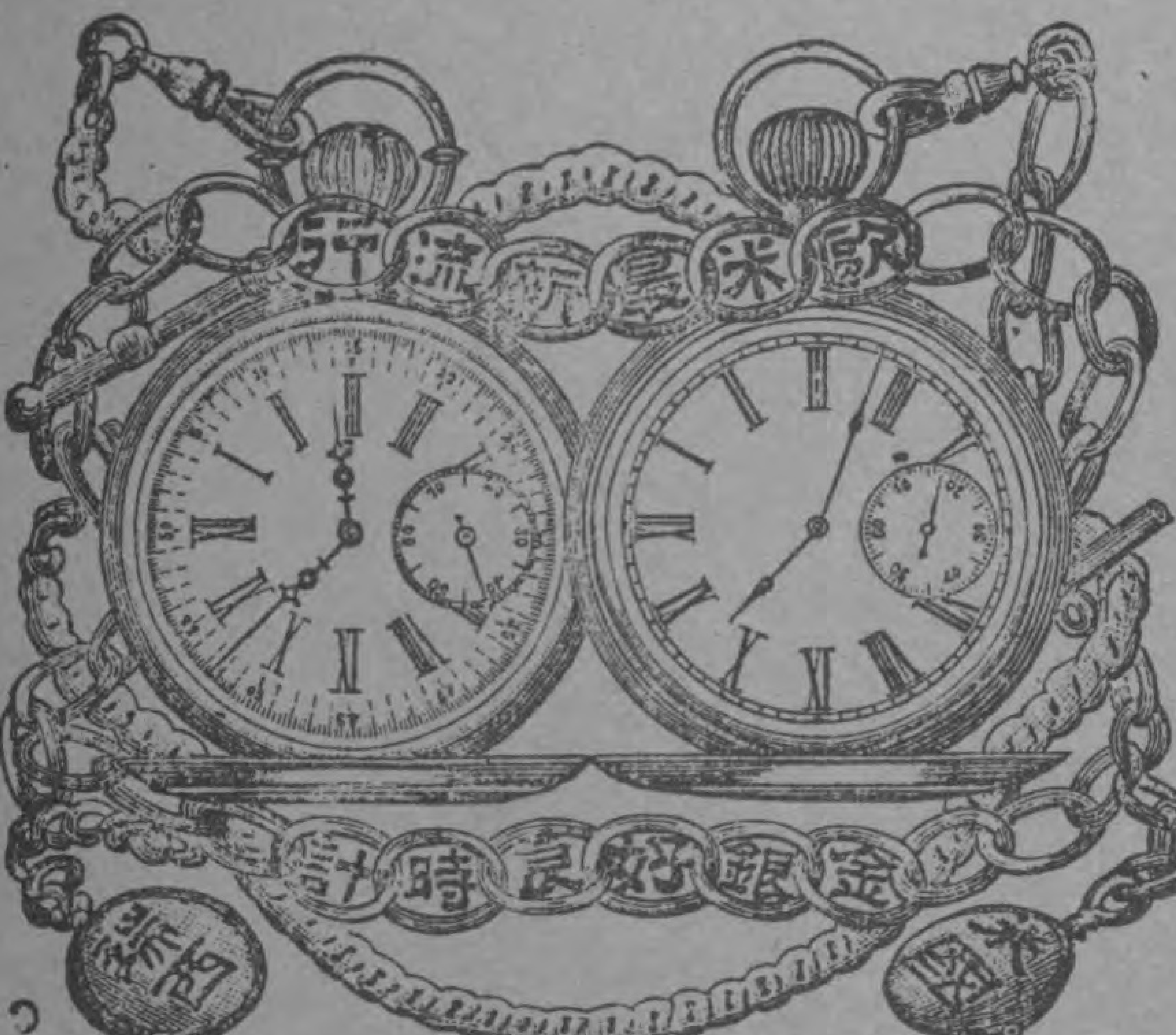
明治三十五年十一月廿日發行

毎月二回五日廿日發行　第貳百六拾五號

明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

◉米國製ダイヤモンド入指環　價十五圓以上各種

◉此十二種は許多種類ある金銀懷中時計の中にて最も流行の新形最も好良の製作なり



米國製無双側			
金側	甲種	價百廿圓	十八金廿形中蓋付
	乙種	價百五圓	同中蓋付
金着	甲種	價廿八圓	廿形金着保証廿ケ年
	乙種	價廿二圓	同十五ケ年
銀側	甲種	價拾七圓半	廿形銀中蓋
	乙種	價拾六圓半	同ニッケル中蓋付
瑞西製無双側			
金側	甲種	價百拾五圓	十八金廿形裏三枚蓋
	乙種	價九拾五圓	同中蓋付
金女持	甲種	價四拾圓	十八金十四形
	乙種	價三拾圓	十四金十四形
銀側	甲種	價拾六圓	廿形裏三枚蓋
	乙種	價拾二圓半	同中硝子

（市外送料各廿錢）

◉今般着荷の分には員數に限りあり早く御來觀ありて御意に叶はゞ御求めあれ

運動要具步度計　價貳圓八十錢以上各種

東京市京橋區尾張町貳丁目

天賞堂

（特電話新橋三三三）

贈呈無料　天賞堂定價表一覽　（送料四錢）

東京市京橋區[illegible]地貳丁目株式會社國光社印刷部印刷

Digitized by Google　Original from